

なんだこの世界……まるで意味がわからんぞ

すつぬ

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

他者様の艦これSSを見て描きたくなったので書いたもの。気まぐれなのですぐに投稿することはないかなw

?恐らくギャグ要素タイトルのサブタイトルだけな気がする

# 目次

艦これの世界？はっはっは！冗談きつい	
ぜ……	1
挨拶することになったんだけど話す事が	
まとまらねえ！半ば強引に終わらせちゃ	
え！w	15
練習風景見て、気づいたら木刀ふってた。	
急？	30
訓練で忘れてたけど前提督のゴミを売り	
に行かなくては！	49
胸の話をしたら砂浜までぶっ飛んでった	
w	68
よっしやあ！俺らしくないことするぞー	

w	84
新たな出会い……そして幻想	100
イケイケのダンディーなおっさんから救	
われた後説教とか休ませる気ねえーだろ	
!?	116
俺の頭の中に住んでるおっさんがロリコ	
ンだと確信してしまった	129
やっぱり食堂と言ったらカレーだよな！	
え？そんな事より雑談だど!?	145
どいつもこいつもネガティブすぎい!!砂	
糖貰っていいつすか？	162
なんか今日は疲れてるみたいだわ…明日	
は頑張る！	181

俺は：彼女たちに救われ、彼女は願いを

叶える。 199

なんか偉い人から対戦持ち込まれた。面

倒だなあ（小並感） 223

昔話を聞いたが、そんなの俺には関係

ねえ！行くぞおおおおアアアっ!?

238

上手く行きすぎて怖いなあ：怖いな怖い

なあ！後から（ry） 258

お久しぶりの登場ですね！あいででで

!! 281

元々工房ってこんな感じなんすね！なん

か静かですなええ！ギャラル（殴

297

いつもとは違うようでやっぱりいつも通

りだけどちよっぴりいつも通りじゃない

秘書艦！叢雲!!（特に深い意味は無いよ） 315

はええ：あんたも闇抱えてるんすねえ：

頭が痛くなりますよ（偏頭痛） 334

ある日の日常＋あるふあ 368

シリアスだかシマリスだか分からないけ

ど瑞鶴さんと話してるだけの回!!

390

演習の誘い?…キマシタワ（何が?）

390

演習の誘い?…キマシタワ（何が?）

演習メンバー集めなきやならんなあ…ア

ゝアゝアツ！（!?）—— 412

大魔法は一日一回しか打てないのだよ

（回数制限）—— 425



艦これの世界？はっはっは！冗談きついで……

「はっはっは……なんだこれ？」

朝の新聞の表紙には『またも深海棲艦出沒！艦娘が見事阻止！』という見出し。艦娘？深海棲艦？馬鹿言え！俺の住んでる日本はそんな殺伐戦士ガンダムみたいな面白おかしいファンタジー要素なんてないぞ！てかあったら俺が死ぬぞ！すぐ死ぬぞ！ほら死んだ！……いや死んでねえーよ！

「……何やってんだ俺」

頭の中に問い返す俺。まあー無論、その言葉に声をかけられるわけ

『転生したのじゃよ』

「……なんか聞こえたんですけど」

嘘？あたしとうとう難聴になっちゃった？いやいやそんなバナナマン日村なことがあつてたまりますってんかい。

『難聴じゃないよー』

「そうかそうか……ふんっ！」

俺は目の前のテーブルに頭をぶつける。ふむ。ヒリヒリと頭を冷やして……

「……………いつてええ……………」

親が仕事行つててよかった……………今の光景、完全にチンパンジーの自虐披露だもんな……………

『お前は、前世……………前の世界で死んだのじゃよ。眠るようにな』

「まてまてまて……………仮にそうだとして、なんで俺はこうして……………あつ、転生つて言つてたな……………てかは?どこに転生したの?」

『艦これの世界じゃよ』

「艦これ?あ!なにこれ艦これまじ運ゲー!つて奴か?」

『そんなフレーズは知らん!つてかお主、あまり驚かないんだな?』

「いや?驚いてるよ?バリバリバリ子さん並みに驚いてるよ?アソパソマソの顔面ポーンだよ?」

『何言つてんだお前』

「……………あ、思い出した。艦これつて、提督つて人が指示するんだろ?で、艦の擬人化した可愛いおにやによ子達が艦娘つて捉えでオーケー?」

『OK!』

「なんでそんな声のぶといんですかねえ……………つても、艦これの世界に転生したからつて、俺がその提督?つてやつじゃねえし、心配することは」



『提督じゃよ』

「はい？」

『だから、提督じゃよ？』

「ごめん。説明プリーズ」

『転生特典じゃ』

「何それ、まるでアニメの主人公みたいだな」

『まあーそんなようなものだ』

「いや適当すぎん？でも提督っても、俺提督服？って言うのか？そんなもの持ってない

ぞぞ？」

『それは要らないようこちらが調整した。ラフな格好の方がお主もやる気が出るだろ

？！』

「提督っていう職業がめんどくさいから全然やる気が出ないんだけど」

『女の子とキヤツキヤウフなこと沢山できるのじゃぞ？』

「よし行こう。すぐ行こう。」

『単純って言われない？』

「うるせえ。早く行くぞ」

っと、勢いだけで飛び出して、頭の中に響く声を頼りに進んでいくと…

「ここがその、鎮守府って奴か?」

『そうじゃな。まあー入るといいぞ』

「え?でも勝手に入っていいのか?」

『いいも悪いも、お主はこの提督じゃぞ?』

「それもそうかwお邪魔しましたー」

『なんかどつからかコンビニの入店音が聞こえてきそうじゃな』

そうして俺達(?)は、施設の中に入った

吹雪「今日……………ですか」

新しい提督がこの鎮守府にやってくる。それを聞いた瞬間、私達はまたあのような仕打ちを受けるのかとビクビクしていました。いや、今でももしかしたら体はふるえ、怯えてるんでしょうね……………

吹雪「そろそろ……………ですわ……………」

時計を見て、そろそろ時間を確認する。震えた体を頬を叩いて収まらせて、廊下を歩き出す。途中、長門さんと会いました。

長門「吹雪？……っ……そうか……今日か……」

吹雪「……はい」

長門「……また、頑張ろう」

長門さんはそう小さく言葉を発し、歩いていきました。

吹雪「……」

私は……怖い。またぶたれる……また蹴られる……また毎日のように怒声が響くのかと……それを考えるだけで震えが止まらない……ふと、前を見ると、窓の外をじっと見つめてる、夕立さんと時雨さんを見かけました。

吹雪「……どうしたの？」

時雨「吹雪かい？……あれを見てくれないか？」

吹雪「あれ……？」

つと、窓の外に指を向けた。私はその方向を見る。そこには、1人の青年がいた……

「なんもねえーなここ!」

現在俺は、敷地に入つて少し歩いたところにあつたグラウンドのベンチに座つてゐる

『お前の目は節穴か。グラウンドがあるじやろ。後ろにも建物があるじやろ?』

「それ以外なんもねえーじゃん!一応軍施設みたいなもんなんだろう?なのに機銃とかそんな類が一切ない……なんだこれええ!」

『騒ぐな……しかし妙だな』

「妙つて?」

『艦娘人っ子一人歩いておらぬ……』

「ん?あーそうだな。ここがお前の言う鎮守府つて言うなら、艦娘がそこら辺をお散歩ランランしても不思議には思わねえ。むしろ居た方が提督事務室つてどこかな?つて聞けたから楽なんだけどな」

『……もしかしたら、ブラックだったのかもしれないのう』

「ブラック?」

『ブラック鎮守府。お主の言うところの、ブラック企業といえはわかるかの?』

「……胸くそ悪くなってきた。一樣聞くが、ブラック鎮守府だと何があるんだ？」

『性的暴行、まともな食事が出されない。外出禁止、酷使、休み無し……暴力……まあ色々あるな』

「……………」

『この世界の提督っていうのは、艦娘は兵器であり、道具だと思いのじゃ。見た目が女の子だからって、兵器には変わりない。と思うのが一般論らしい……お……主……!?!』

「くだらねえ……殺すぞ……」

『（な、なんじや……？急に雰囲気……それに目の色……こやつ先程まで黒じやなかった？なぜ……青眼になっておる？）』

「……………ま、イラついてもしやーねえーかw今は現状を何とかするしかねえーなw」

『そ、そうじやな。』

「?どうかしたか？」

『いや……なんでもない（さっきのは……一体……）』

「そうか?……ん!?!第一村人発見!」

遠くの方から女の子が1人歩いてきてくれてる。

??? 「あ、あの……」

「はい!どうしましたか?」キラキラ

??? 「えっ……えと……」

「うん!」 キラキラ

『お主。気持ち悪いぞ』

「……それもそうか……こんな訳分からんやつに元氣よく返事されたら気持ち悪いもん  
な……ああ、悪い。ここに入って初めての人だったからねw テンションがバグってた。  
それで? 君の名前は?」

??? 「……鈴谷」

「鈴谷? なんかも普通だねw 俺は……まあここに着任した提督って奴か? そう呼んでく  
れw」

鈴谷 「っっ!」

「ところで鈴谷さん? 俺ね、提督事務室つて所でなんか手続きしなきゃ行けないよ。  
それで……良かったら案内して欲しいかなあ……なんて」

鈴谷 「……こちらです。ついてきてください」

「おっ! 案内してくれるのか? サンキューな!」

鈴谷 「……」

そうして、廊下を歩いてる中。

『気おつけておけよ』

(あん？何でだよ？)

『お主が提督という言葉を発した時、鈴谷の顔が引きつっておったからな……』  
(……………分かった。)

『うむ』

鈴谷 「ここが……提督事務室です」

「へえー……………ここが……………サンキューな。わざわざ案内してもらって」

鈴谷 「いえ……………」

「さてつと……………つて……………うわああ……………」

俺は扉を開ける。中はなんかこう、目が痛い。キラキラとあらゆるものが光ってる。これ…ソファーだよな？なんかキラキラしてて無駄に高そう……………こんなのはニトリの3万ぐらいのソファーでいいんだよ！はあ……………たく

「あの、鈴谷さん」

鈴谷 「っ……………はい」

「ちよいちよい」

俺が手招きをする。鈴谷は、渋々と言った感じで部屋に入る。

「ちよっと待ってね」

っと、俺はガサゴソガサゴソとして……

鈴谷（……………ああ……………私また……………されるのかなあ……………今回の人は乱暴じゃなければいいなあ……………）

そんな願い叶わないのにね……………どうせ激しく犯されるだけなんだから……………

「はい…これ」

鈴谷「……………な、なにこれ？」

何故か、彼は私にゴミ袋みたいな物を渡してきた……………はっ！死なないのをいい事の中に……………入って……………

「?なぜに入ろうとしてるの?」

鈴谷「えっ?あ…いや……………」

違うの?中に入って酸素のない中私を犯そうとしたんじゃないの?



「こうやって、広げて持つてるだけでいいからwね？」

そう言つて再度彼は私に袋を持たせてきた。わけも分からないまま私は袋を持つてると

「はいこれじゃない」ポイ

鈴谷「あつ」

彼は、ぽいぽい私がつてる袋に捨てていく。高そう……いえ、高い物を全て袋の中に入れると、部屋は何も無い状態になる……悪趣味のソファ―とテーブル、椅子を除けば……

鈴谷「あ、あの……提督？」

「んー？」

鈴谷「……これは？」

私は、手に持った袋を上げて彼に訪ねると

「あーそれ？w全部売るよ？w」

鈴谷「なっ?!?!でも！」

「こんなの金をかけるぐらいならもつといい使い方があるからねwつと」

彼は引き出しをあける

「……」

彼の手に持ってたもの……それは

鈴谷「っ……………」

分かってたわよ。何かおかしいと思った……そうよね。結局そういうことよね……

私は、スカートをたくしあげた

「うわっちよ!?!何してんの!?!」

何故か彼は……目を背けた……

鈴谷「なぜって……その手に持つてるのを私に使うつもりで……?」

そう私が発した瞬間、空気が少し変わった……すると目の前の彼は

「……………」

そのオモチャを振り上げると

バキッ!

鈴谷「!?!」

地面に叩きつけ、足で踏み潰し……完全に壊した

「もう……そんなことはさせない」

鈴谷「えっ……………あっ……………」

彼は私に、悲しいような、すごく切なそうな目線をこちらに向けていた。そのせいで、私の口からは素っ頓狂な声が溢れる。そんな私をよそに、彼は言葉を繋げた

「……辛かったね……苦しかったよね……俺にその気持ちかわからない……けどさ。俺がここに着任した以上……君や、君以外の子に絶対悲しい思いをさせない……俺が……この腐った世界を変えてやる」

鈴谷「あつ……ああ……」

私達のことを本気で思ってくれる人……そんな人いないとどうに諦めてた……でも……

「……こんな未熟者な俺でも……みんなを守れるかな？w」  
優しい目……そんな目をされたら……

鈴谷「うっ……うう……」

「……泣いていいよ……俺はそれを慰めることしか……出来ないから……」ギユ  
私を暖かい感触が包み込む……そのせいで……今までの気持ちが溢れ出て……気づいたら

鈴谷「あああ！うわあああつ!!」ギユツ

今日あつたばかりの……私達が嫌いな提督のことを抱きしめて……情けなく大声を上げて泣いていた。そんな私を彼は……優しく抱きしめながら、背中を撫でて落ち着かてせくれていた。

鈴谷「(ああ……みんな……やつと……だよ……やつと)」ギユ

「おわっ!?!ちよー!」

やっと……私たちの想いが……通じたよ……!!

鈴谷「……ねえー、提督?」

「な、何……かな?」

鈴谷「提督は……さ。私達のこと……見捨てない?」

「……見捨てるものか。必ず……守ってやる」

鈴谷「……んっ♪」ギョッ

「ちよっ!?!」

私は……大胆にも……彼の耳まで自分の口を近づけると

鈴谷「期待、してるからね♪」

そう言つて、自分でも驚くほど緩んだ頬を彼にみせて、彼の……提督の後ろをピタリと張り付いていった♪

鈴谷（私達の……私の提督♪）

挨拶することになったんだけど話す事がまとまらねえ！  
半ば強引に終わらせちやえ！ W

「……………あの……………」

鈴谷 「？♪なーに？♪」

「あ……………いや……………なんもない」

鈴谷 「そう？♪」

何故かこの子……………鈴谷だっけか？俺から離れようとしなないんだけど……………用は終わったのでそそくさと帰るかと思っただが、俺が立って水を取りに行けばその後ろをちよこちよここと着いてきて、椅子に座れば、その椅子によっかかるように座る鈴谷……………

『お主、好かれたのう』

（はあー？こんな会って数十分でかあ？）

『わしもそう思うが、よく見ろ。彼女の目を』

（はあ？） チラ

俺は鈴谷に視線を向ける。視線に気づいた鈴谷はこちらに視線を向ける。俺の椅子によかかっているため、少し首を上にしなければ俺の顔を視認することは出来ない。しか

し、視認した瞬間

鈴谷 「……?なに?♪」キラキラ

「……………」

鈴谷 「どうしたの?提督?♪♪」キラキラ

「あ、いや。すまない。ただ見てただけだ」

鈴谷 「♪♪そうですか♪」キラキラ

「……………」

『……な?』

(おいこれどうすんだよ!!)

『知らんがな!!わしでも想定外じゃよ!!』

(俺だつて想定外だわ!!てか外もくそもあるかああ!そもそもこんなチョロインまじで

アニメでしか見たことねえぞ!?)

『お主があのような大胆な行動するのが悪いのじやろう!?!反省しろ馬鹿者!!』

(何をー!?!俺だつてあん時は必死だったんだよ!!分かるかゴラア!)

『分からねぬはアホ!!』

「誰がアホじゃアア!!」

鈴谷 「!?!提督!?!どうしたの!?!」

やべ……ヒートアップしすぎて思わず叫んでしまった……てへぺろ☆

『可愛くない還れ』

(だまれじいじいコノヤロウ……)

つと、あわあわしてる鈴谷に訂正しとかなきゃな……

「悪い悪いW少し学生時代のことを思い出してたんだW心配させて悪いな？」ナデナデ

鈴谷「あつ……う、ううん……♪大丈夫……♪」

「そっか、ならよかったよ」ニコ

鈴谷「っ……♪」ドキン

「?……(まあいいか)」

『女たらしだな。お主』

(自覚してないって恐ろしいな……)

『お前の事じゃよ?』

(はは……)

『笑って誤魔化さないでもらえる?』

(ハハツ☆)

『夢の国の住人はNG』

それから、この頭の中にいる爺さんと会話しながら書類を片付けていく。何故か鈴谷

は俺から離れる事はせず、ずーっとその場にいた……そして、あらかた書類を終わり、次の課題を爺さんは提案してきた

(食堂で就任式だア?)

『うむ。その鈴谷みたく、他の子がお主をよく思ってるとは限らないからのう。ある程度の自己紹介は必要じゃろうて。それに、皆に顔を知られてないのに提督は俺ですつ☆つて堂々というつもりか?』

(……流石にそりや出来ねえーな……鈴谷に聞いてみるか?)

『その方が良いじゃろう。彼女もまた、艦娘じゃ。彼女からの助言は今のワシらには有益な物になるじゃろう。』

「(それも……そうだな) 鈴谷?」

鈴谷「なーに?」

「今からな、俺の就任式……つて言うのか? まあ一応は自己紹介をしたいんだけどさ……鈴谷はどう思う?」

つと、次の瞬間、鈴谷の雰囲気<sup>が</sup>真面目<sup>に</sup>変わる。おお……切り替えは早い子なんだな……

鈴谷「そうだねえ……確かに提督は優しいし私達のことを思ってくれてるってさっきの出来事で知ったけど……それはあくまで私だけだからね……でも、自己紹介する分にはい



いと思うよ。礼儀としてもね」

なんかすつごい褒めてくれる…やだあたし恥ずかしい…

『照れるな若造』

(うつせガングロじい)

「そうだよな……ところで鈴谷？自己紹介と、同時に色々変えたいこともあるんだけど……それについていきなり発表しても大丈夫なのか？」

鈴谷「提督が変えたいと思えば変えてもいいんじゃないかな？そもそもこのルールを作るのは提督だけだからね……私らはそれに従うだけ……でも、あまりに酷いものだと陰で何か言われちゃうよ？」

「は、はは……そりや心に来るな……」

鈴谷「……やつぱり、提督は他の人とは違うんだね」

「?どうしてそう思うのかな？」

鈴谷「提督って生き物は、自分の戦果しか見てないから……あたしはその戦果をあげる道具……そういう風に今まで生きてきたから……こうやって今はあたしだけでなく、艦娘に対して感情を入れて話してくれる人はいなかったから……」

「……例え、兵器であろうと、俺は艦娘を一人の人間としてみる」

鈴谷「え」

「兵器でも…見た目は女の子だ。心もちゃんとする。そんな子を兵器だ道具だと言えるほど、俺は人間やめちやいない。それに、あの深海棲艦っていう化け物を倒せるのは唯一艦娘たちだけなんだ…そんな生きる英雄みたいな子達を蔑むような事は俺には出来ない。それよりかは、絆を築いて楽しく、仲良くした方がお互いプラスだと思うんだよね。鈴谷そう思わないか?」

ニコツと笑って鈴谷に聞き返してみる。鈴谷はと言うと

鈴谷「あつ……ああ……// //」

「……鈴谷さん?」

顔を真っ赤にしながら口をパクパクして俺をじつとみてた

鈴谷「あたし……あたし……っ!」

「あの……大丈夫ー!?!」

俺の言葉を遮るように鈴谷は立ち上がると、俺の方に抱きついてきた

「えちよ!?!何!?!」

突然の事で混乱しているのにもかかわらず鈴谷は俺を抱きしめるのを辞めない……

鈴谷「提督♪提督ー♪」ムギユウ

うおおおわアアアアア!?!それ以上はまずい!何がまずいかつて?鈴谷の胸にある確かなボールが!ボールがアア!俺のまな板にむぎゆりつて!あああああ!!

「……満足……しましたか？」 ゲツソリ

鈴谷 「……………ごめんなさい……………／／／／」

「いいって……気にしないで……ね？」

鈴谷 「は……………はい……………／／／」

あれから5分ぐらいは抱きつかれてましたね。賢者タイムが発動するとは思わなんだ。

「ま、まあ、鈴谷、食堂にて俺から挨拶をしに行くよ。えーとそうだな……15時には話したいかな？そこで、鈴谷には他の子達にその事を伝えてきてくれるかな？」

鈴谷 「て、提督っ！そ、それって……………！／／／／」

「へ？何?!なんかまずいことでも」

鈴谷 「あたしが提督の初めての命を受けれるってことですか!?!／／／／」

「……………へ？あ……………うん。」

鈴谷 「!!♪あたし!♪頑張るからね!♪♪」 ダッダッダ

とてもキラキラした目をこちらに向けたあと、猛スピードで部屋から出ていった……そんな鈴谷に一言

「あの子、好きな子出来たらすぐバレるんだろなあ……」

『お主にバレてるものな……』

「まったく……今までどんなやつにあつてきたらあそこまでチヨロインになるんだよ……」

『そりゃー提督つて生き物は、あの鈴谷が言うように戦果しか見てないからのう。酷使するのは当たり前だと思ってるからして、お主のように相手のメンタルも気にして話すような奴は滅多な限り居ないのじゃよ』

「なんか提督が悪党に見えてきた」

『大丈夫じゃ。既にそういう掲示板は存在するからのう』

「するのによ……」

つと、時間まで爺さんと話していたら、既に時間が来ており俺は急いで食堂に向かう。俺が食堂の中に入ると、そこには、数十人位の艦娘が待機していた……いやほんと……遅れてすんません……

「すんません!!遅れましたアアア!」

つと叫びながらステージのような所にかける。

「はあ……はあ……うつぶ……やべ……いきなり走って吐き気が……あと人の量に……限界かも……」

『お主、人に酔うタイプか?』

(仕方がねえーだろ……あーやべ……吐きそう……)

『いいからはよしろ』

「あつはい。うおっ!? マイク入ってる!」

まさか自分の声に驚く日が来るとは……いや何回もあるわ

「えーコホン。諸君おはよう。私は今日ここで提督を務めることになった物だ。よろしく頼む……つてまあーこんな硬つ苦しい挨拶はそこら辺の鍋にポイツとして闇鍋で楽しむとして!」

なんだろう。明らか驚いてるように見えるのは私の気なせいでしょうか。あらヤダ  
どうしよう

『なんでお前時たまオカマになるの?』

(素ででちゃう)

『病気かな?』

(うっせw)

「えーと、まあー改めて、俺はここに着任した提督だ。まあー見ての通り俺は新米だ。正

直ぶつちやけると右も左も分からない雑魚同然だが、君たちを守るためにも、君たちと共に学んで行きたいと思ってる。あ、これは本心ね。割とマジで」

つと、そこまで言ったところで1人が手を挙げた

「はい、なんでしよう」

手をつとしてその子を指さす。周りの視線がその子に集まるが、その子は動じずにこちらを睨みつけている。眼帯か……いい趣味してるね

??? 「新米がしゃしゃんじゃねえ!あたしらは命かけてんだ!そんな腑抜けた」

「あー、ちなみにお名前を」

??? 「あっ!?!……天龍だ」

「天龍さんね。オーケー。確かに、君の言い分は尤もだ」

天龍 「お、おう?」

あれ?なんか困惑してる?

「君たちの命がかかっているのは充分に理解してる。だからこれも同時に言っとくけどね……俺が提督っていう物を理解するまで、君達には休みをもうけようとしてる。」

天龍 「……はあ!?!」

? 天龍はもちろん、他の子達にも分かるぐらい驚かされてる。あれ?そんな驚かれるもの

「こんな新米が指導をするなんて死に行けと言ってるようなものだからな……だからあの程度俺が慣れるまでは」

天龍「ちよ！待ってくれ！」

「ん？」

天龍「その間の期間は!?!あたしらは何してればいいんだよ!?!」

「は?……」ホソ。すまない。ただ単純に英気を養つて貰いたい」

天龍「……はあ?」

「幸い、資料に書かれていた資材?つて言うのか?あれの数が10万を超えていたのでな。爺さん……あ、いや、上の奴らに確認したところ、10万もあればこの人数だと1年は余裕と知ったからな。それも出撃つて奴をすればの話だ。しなければ減りはしない」

天龍「……」

「だから、俺が提督つて職業に慣れるまでは、君達には俺を支えて欲しい。分からない事があれば遠慮なく君達に聞く。もちろん、無視して構わない。当たり前だ。嫌いな奴に話しかけられたら気分も落ちるだろう?あーでも、特訓はせめて1時間ぐらいはしてくれよ?じゃなきゃ腕が詛つちまうから。……なにか質問はあるかな?」

そう言うのと、天龍と言つた子は、目を丸くしながら「いや……ねえーよ」と言つて、下

がってくれた。俺はニコツと笑って次の話題に切替える。

「それと、朝昼晩のご飯についてだが」

??? 「ま!待って!!」

「はい?」

??? 「ご飯つくの!?!」

「いや、当たり前だろう? 働く前、働いた後、休み時間には飯を食うもんだろ?」

??? 「やったあああ!」

……そんなに喜ぶような事か……?

「……ま、まあいい……それでだ。料理を作ってもらう人を間宮つて人と鳳翔つて人に頼みたいんだけど……ここに居るかな? 居たら手を挙げて貰えるかな?」

そう言うのと、おずおずと言った感じで2つの手が上がる。

「おっ! いたいた良かったwそれで……頼めるかな?」

間宮 「あの……どうして私たちなんですか?」

「?別に深い意味は無いよ?ただ美味しいって評判があるのと、料理をかじってるのがこの中だと君たち二人だからって事かなw」

鳳翔 「で、ですが……私達は……その……」

「何かな?」



鳳翔「……………艦娘……………ですよ？」

「うん。だから何？」

そう言い放った瞬間、場の空気がガラリと変わった

鳳翔「……………え」

「艦娘だからなにつて事wだつてさ、見た目女の子じゃん。何ら人間と変わらないよ？」

鳳翔「そつ！それでも！」

「化け物が作った料理を人間は食べないと？」

鳳翔「つつつ……………そう……………ですつ……………」

なるほどねー☆

「じゃー訂正。俺は君達艦娘を化け物だと思つた事は一度もない」

『!?!』

「だつてそうでしょ？俺らと同じ考えを持つていて、行動力を持つている。最初に化け物と称したそいつは恐らく怯えてんだよ。人間の俺らでは勝てない深海棲艦を艦の力を宿した人間……………それも女の子に。嫉妬してんだよwそれに製造をされるとか言うけどそれもぶつちやけ高度なAIみたいなもんだからw気にしたら負けよw」

鳳翔「で、ですが」

「はい！…この話はしゅーりよー！閉店ガラガラ！ズドン!!」

鳳翔 「え……あの……」

「つまり作ってくれるのはオーケーなんだろう?それでいいじゃん!もう終わり!はいさ  
いなら!つあ、そうだ(唐突)お風呂、あるらしいじゃないですか?入浴時間決めたん  
で、掲示板で確認してね」

『「え!?!」』

「午後と午前の部、2つずつ設けたから!よろしくう!あ、ちなみに湯を沸かしてくれ  
るのはなんか知らんけど妖精さんって人達がいきなり「私たちに任せるのだ!バリバ  
リ」とか言つて飛んで行ったので多分大丈夫です!なんか金平糖よこせとか言われたけ  
ど知らん!後で買う!あ、伝えたいこと伝えたくて解散ね!これからもよろしく!バ  
イビー!」

つと、半ば強引に終わらせて、俺はステージから降りて提督執務室に向かう。いや  
だつてあのまま話してたらうだ言つてそうだから終わらせた。

『お主……無理やり終わらせたの』

「仕方がねえーだろお!?!あのまま話しても埒があかねえ!習うより慣れろーだ!」

『それもそうじゃなw』

「おうよ!」

そうして、俺が提督事務室で書類を書いている時に鈴谷が突撃してきたのはまた別のお



練習風景見て、気づいたら木刀ふってた。ゑ？

夕立「よろしくお願いしますっぽい!!」

時雨「提督……お相手よろしくお願いしますね？」

「どうしてこうなった……」

俺は今現在、道場のような場所で木刀を構えてる……この経緯は俺が提督事務室に引きこもって3日目のことだ

コンコン

「んあ？はい。空いてるぞよー」

そう言葉を発するとガチャリとドアが開く。そこから現れたのは銀色の髪が腰まで伸びており、コーン色のベレー帽みたいなのを被った美少女。俺は思わず

「なんか女神きた」

っと言葉を出してしまった。当然目の前の少女は

??? 「いきなり何を言ってるんだい？」

っと、ジト目で見られてしまった……俺の心割れそう

『お前のハートはガラスで出来てるのか？』

(誰の心がガラスだって?)

『お主』

(るっせ)

??? 「……いいかな？」

「ん？おお……わりいわりい。ってか君、名前は？」

??? 「……自己紹介してなかったわね……私の名前は響。これでいい？」

「ほいほいっとー。響ちゃんね。了解」

響 「……馬鹿にしてる？」

あ、やばい。なんか怒ってる。睨まれた。よし

「滅相ありません響殿」

響 「……まあいいわ。」

「ほっ……てかなに用ですか？」

響 「あたし達がどう強くなってるのか……気にならないの？」

「少し気になるな。君達の練習を見れば、何か分かることが出るかもしれないしな」

一応これは本心だ。皆がどう練習して強くなってるのかは気になる。

響「……………良かったら、ちょうど今やってるんだけど……………見に来るかい？」

「いいのかわ！」

響「え……う、うん……………皆にはもう話してあるから……………」

「そうか!!そうと決まれば行くぞー!!案内してくれ！」

響「あ……うん」

つと、来ましたのはここ水上。は?…って思うだろう?ところがどっこい、艦娘という子達は水上で訓練するらしい。一通り見てなんか思い当たる節があるんだよなあ…………

時雨「どう……………かな？」

一人の子が話しかけてくる。確か見に来た時にある程度自己紹介をしてもらった。6人いて、今話しかけてきたのが時雨、その後ろでコソコソしてるのが夕立。俺を遠くの方で睨みつけてるのが霞って子と曙って子、で、ただボーツとこちらを見てるのがここに連れてきた張本人響、その横でニコニコしてる天龍。睨んでる奴と目の前の2人が初めましてってことかな。

「どう……かあ……………やっぱ凄いな……………ってぐらいしか頭に浮かばねえ……………あーでも」

時雨「……………でも？」

俺は頭に思ったことをそのまま言ってみる

「何で君たち、水上で訓練してるの？」

時雨「……………は？」

「いやね、ずーつと見てて思ったんだ。確かに艦娘つてのは海の上で戦うんだから水上で訓練するのは当たり前なんだけど……………それっていつものと変わらなく無い？」

夕立「……………何が……………言いたいっぼい？」

「つまりだな、陸で訓練した方が人間の体の使い方が分かって強くなりやすいんじゃないかなって」

夕立「ぼい？」

「まあ……………つまりだな」

「何故かちようどよくある木刀2つを夕立に渡す。そして俺が挑発するように手をクイクイってして」

「まあ、かかってこい」

「そう言うのと夕立はムスツとした表情になって言ってくる。」

夕立「いいの？これでも私……………結構力あるっぼい」

「大丈夫。陸に慣れてない奴に負けるつもりは無いから」

夕立「！どうなっても知らないっぼい！」

つと、こちらにかけてくる……が

「……………」

夕立「なっ……………」

時雨「!？」

夕立の木刀を受け流して、そのまま足をかける。夕立は盛大に尻もちをついたので、そのまま首元に木刀の先つぽを当てる。

「これで分かったら？艦の動かし方しか知らなかったら、どれだけ艦の力を使ったとしても、こうして軽い力でいなされる。使い方を理解してない証だ」

夕立「……………」

「人間の力も、艦の力も持つ君達だから、強さは2倍にも3倍にもなる。でもな、艦の力が特別強くても、その大元の体である人間の力を使えなかったら強さは半減してる……っと思っただけだな、まんまそれで正直驚いてる。」

夕立は木刀を強く握りしめてる。恐らく悔しんだろう。

「……………立て」

夕立「っ…」

「悔しんでもいい。後悔してもいい。けどな、それだけで終わらすな。」

夕立「!」



「立ち上がれ、立ち向かえ。お前はその程度と罵られてもいいのか？このままでいいのか？……弱いままでいいのか？」

夕立「!!私は……!強くなるっばい!」

そうして木刀を構え直して、立ち上がる。

「……ふっwかかってこい」

それから、夕立と少し剣を交えた……結論からいえば夕立がボロボロになるだけだった。でも、前に比べれば相当良くなってる。重心のブレが少なくなっただけがする。

「…今日はここまで。よく頑張ったね」ナデナデ

夕立「っ!ばい!」

頑張った人はちゃんと褒めなければ…伸びないからな

「それじゃーなw」

そうして、手をプラプラとしてその場を立ち去ろうとした時だった

夕立「明日も!お願いしますっばい!!」

「………ああ」ニ」

そうして、俺はその場を後にする。

『……お主、剣道出来たのじゃな』

(あん？出来ねえーよ？)

『はっ……じゃーさっきのは』

(んなもん、その場のノリで適当にやってただけだよw)

『はっ……はあ……』

(ま、あと何回か負けさせれば自主トレでもするだろw)

『(悪いが小僧よ……それは無理だぞ。何故なら……)』

夕立(絶対！強くなる！強くなって！あの人に！提督にもっといっぱい褒めてもら  
うっばい！もっとなでなでしてもらっばい!!)キラキラ

『(あんなキラキラしてるもん……どこぞの鈴谷みたいに……)……まあ、頑張れよ』

「んっ…おっっ…」

これが約1週間前の出来事であり始まりだった……まあー要は気まぐれで一戦混じえたら、毎日挑みに来るようになり……気づいたら夕立の他に時雨や天龍、響、そして噂を聞いた電という子が毎日道場に居る……俺は一人一人と剣を交える……

『頑張れ☆』

(なんで忠告してくれないんだよおお!!)

『言つたじやろw頑張れとw』

(それは忠告じやなあああああい!)

「はあー……まあーいい……か」

俺自身も別にいやつて訳じゃない。むしろちょうどいい運動が出来るので俺的には楽しい。それよりも嬉しさの方が勝ってる。この子達がどんどん明るくなっていくところ

『青春じやのw』

(青春か……こういう事を言うのか？w)

『まあーちと血の気は多いが』

(それは言ってるw)

「さて、それじゃー誰からやる？」

時雨「僕……いいかな？」

「ふつwああ、構わないよ。こいつ」

そして剣を交える。最初より一振一振が重い、力任せに振ってるだけだ。大したもののじゃない。上半身に力に乗せてるということは

「ほれ」コン

時雨「うわあっ!？」

少し脛に当てただけで尻もちをつく。そんな時雨の首元に木刀を添えると、ゆっくりと手を挙げ

時雨「……参りました」

「よしつw時雨は力いっぱい振っちゃう癖があるね。筋はいいけど、全体になるべく伸ばすようにした方がいいと思うよ。上半身に力が行き過ぎて下半身が疎かになっちゃってるからね」ニコ

時雨「は……はい……」

「別に気を落とすことはないよwさつきも言ったけど、時雨は筋がいいんだ。まだ3回目だというのに、真っ直ぐに木刀を振れる。それはなかなかできない事だと俺は思うよwこれからの成長に期待するんだよw」ナデナデ

時雨「っ！はい！」

「うん。いい返事だw次はー？」

響「私……」

「よーし、カモン」

響「あうっ……」

「響ー、大丈夫かー？」

響「痛い……痛いよおー……」

「よーしよし……大丈夫かー？」ナデナデ

響「……………／／あうう……………／／／／」

「焦りは禁物だぞー？」

「いやー凄かった。勢いよく向かってくる所までは良かったのだが、剣を振るった瞬

間、体がそのスピードに耐えれなく、俺が軽く受け流しただけで尻もちをついた。いやまあーそれだけならまだ良かったのだが、尻もちついた時に、持っていた木刀を滑らせ、自分の頭に直撃。ムキになって立とうとして、手を滑らせ前のめりになり顔を強打『まるでギャグ漫画のような展開じゃったのー』

(やめて差し上げろ。俺これでも笑いこらえてるんだから)

『ニコニコしておるぞー?』

(は!?!まじかよ!?!おさまれーおさまれー…)

『もう遅いぞ?』

(なんでえ!?)

『前見ろ前』

(前……………?は!?)

顔をムスツとした響が……

響「……………笑いたければ…笑えばいいじゃないっ」プイ

そつばまで向いてしまった……………あらあらまあまあ……………

「……………響」

響「……………なによ……………?」

「ドンマイ!」ニカ

響「なあっ!?／＼／」カァア

「仕方がねえよw焦るのは分かる…でもな?自分なりのペースつてもんがあるだろ?なにも急ぐことはねえーんだwしっかり、着実に、一步一步進んで行ければいいんだからさw」

響「!!」

勢いよく立ち上がった響はムスツとしながらも後ろに下がって、素振りをしてる。

「はは……可愛いやつだなw」

電は時雨に色々聞いてるな……うむうむ!感心感心!

『お主も特別剣道強いってわけじゃないだろ』

(うーうるさいな!す、少しでもいいじゃんか!!こう……微笑んでもよ!!)

『はいはいかつこいいでちゅよーw』

(殺す!刺し違えても殺す!)

つと、脳内で馬鹿げた会話を繰り返して広げてる時に

天龍「次!あたしいいか!」

「んあ!?!…ああw構わないよw」

天龍の声により、意識を現実に戻す……いやーこれ、傍から見たら本当に俺が目をつぶってるだけなんだろうなあ……実際は頭の中に住んでる爺さんと話してるだけだ

……待って俺、頭おかしくね？確かに頭におかしい奴が住み着いてるけど

『誰が馬鹿じゃ』

(お前じゃアホ)

天龍 「提督ー!？」

「……あつwわりいわりいwそれじゃはじめつかw」

天龍 「おう！」

そして俺は構える。同じく天龍も構える。

「一昨日言ったこと、覚えてるかー？」

天龍 「もちろんだ！あたしの練習の成果！見せてやる！」

「ふっ……ああ、お手並み拝見だ」

そう言うのと、天龍は目を瞑る。俺が天龍に言った言葉

天龍 「第六感？」

「ああ。天龍、お前の眼帯って元からなのか？」

天龍 「ああ？これか？そうだよ……フフ……怖いかな？」

「あーいや、怖いというか可愛いというか……」



天龍 「んなっ!? / / /」

「んまあー何より……だ。右目が見えないお前に聞く。どうやって深海棲艦との距離を把握してる?」

天龍 「あんっ? そんなの、感覚で」

「そう、それっ」

天龍 「……はあ?」

「天龍は片目が見えない以上感覚が他の子の数倍、数十倍ある。つまり……だ」

俺が木刀を手に持って

「天龍、目を瞑れ」

天龍 「へ? お、おう……」

そう目を閉じたところで

「当たってる……分かるか?」 コンコン

俺は体全体に木刀を当てていく。肩、頭、腹や背中、足などに

天龍 「あ、ああ……当たり前だ。」

「じゃー次に、俺がどこからか木刀を振り下ろす。天龍は自分の感覚だけに集中して避けてみる」

天龍 「はあ!? んなむちやな!」

「いいからやる」

天龍「！……お、おう！」

そして、完全に空気をガラリと変えた天龍の腹にスーッと近づける。すると、当たらずんでのところでひゆるりとかわす。

「目を開けてみる」

天龍「……ん？つてうお!？」

天龍は目を見開いて驚いている。それはそうだ。自分の腹を数ミリ単位で避けてる木刀を見ればな

「これがお前に秘められた第六感……みたいなものだな」

天龍「これ……わ……」

驚いているのと感動している目で、自分の手をにぎにぎしてる。俺はそんな天龍に手を向けて

「物にしろよ。それは誰の手にも掴めない、お前だけの力なんだ。掴み取れよ」

天龍「つつ!! ああ! ありがとな! 提督!」

そうして、俺と天龍の腕がクロスする。

「おおう……」

たった2日……それなのに今日の前に居る天龍は

天龍「……………」

明らかに雰囲気が違う。自分の全てを読んでるかのような圧迫感に少し震える……  
が

「すげえーな」ニヤ

その状況でも、笑ってしまう俺がいる。まず初めに軽く木刀を振るう。しかし目を瞑ったままだというのに木刀を縦にして俺の木刀を受け止める。すると、そのままさらされ、カウンターが飛んでくる

「っ!?!」ブン

間一髪のところでは避ける。しかし天龍は気を全て感じているんだ。もちろん、意表をつかれ、焦っている俺の気を読み取ってないはずかない。すぐに次の斬撃が飛んでくる。俺は素早く木刀の持ち手でガード、多少強引に引き離す。

天龍「……………どう……だ？すげえーだろ？」

目を瞑りながら、自信満々にそう言葉を漏らす天龍。それに俺は素直な気持ち伝える。

「あー……とても2日で身につけたとは思えない。すげえーよ」

天龍「……これも提督のおかげなんだ。俺がこの才能を拾えたのも……こうして自分が強くなってるって実感できるのも……全部提督のおかげなんだ。感謝している。だから、私はそんな提督のために強くなりてえーんだ。提督や皆を守れるかっこいい女になるために！」

「……いい目標だ。だったら……俺を倒してみろ！」

その言葉と同時に、天龍はこちらに走ってくる……

「かかった」ニヤ

天龍「っ!？」

「もうおせえー!」ブン

木刀を横に払う。一瞬驚いたため、判断が低下しているために、先程の天龍では考えられないレベルの回避をとる。普通なら木刀で受け止めて少しでも考える時間に使った方が良かった。しかし、天龍は俺から距離を置くために回避を行ってしまう。もちろんその時の隙はあるので

「そっ!っ!」

天龍「ぐっ！」

背中突き攻撃、体勢が崩れ、また出た隙に対して

「ほれ！」

天龍「あっ!?!」

足に軽く木刀を叩きつけると、そのまま仰向けで倒れる。俺は天龍の上に乗る、親指を首に突きつける。すると両手を上げ

天龍「……あたしの負けだ……」

目を開けて、こちらに涼しい顔を向けてくる天龍からどいて、手を差し伸べる。ありがとうと言って立ち上がる天龍に対して

「分かっているようだなw」

天龍「……ああ。冷静さを失ってたな……お前のかかってこい！にのつちまった。それが負けに繋がっちゃった」

「その口ぶりだと、どうしてそうなったかも?」

天龍「……オレ……あーいや、あたしの気を読むつてのは、あたしから仕掛けてからはまだ無理だ……相手からの攻撃を避けて、それを躲してから反撃するカウンター技しかまだ使えない……」

「よく分かかってらっしゃるwでも、よく頑張ったな。2日間でここまで出来たんだ。自

分を誇っていいよw」

天龍「ああ…ありがとう！」

「それと、あたしよりオレって言った方が天龍に合ってるぜw」

天龍「…でも…」

「…前の提督がなんて言ってたかは知らんし知る必要も無いけどさ…：…ありのままの天龍でいいんだぜ？」ニコ

天龍「っ！」

「もう偽らなくてもいいんだぜ？そんなにまだ俺は信頼に値出来ないかな？w」

天龍「…ああ！本当に…ありがとうな！提督！あたし…いや、オレ！変わる気がするよ！」

「…ふっ、頑張れよ」ニコ

天龍「!!おう!!」

訓練で忘れてたけど前提督のゴミを売りに行かなくては

！

で…問題は……

夕立「よろしくお願いしますっぽい」

天龍との一戦を終えて、息を整える。そんな時に聞こえたひとつの言葉。彼女に視線を向ける。だらりとやる気のないように木刀を手に持つ彼女に……

「ああっ。よろしくな」

そう言つて構える。先に動いたのは…夕立であつた

「!？」

昨日よりも速く、鋭い一撃が何個も何個も飛んでくる。

「クソっ！あんなアドバイスすんじやなかったぜ！」

前に夕立に言つた何気ない一言

「そう言えや夕立はなんでこう何回も俺に挑んでくるんだ?」

素振りをしてる夕立に話しかける。彼女は素振りをやめ、こちらに視線を向けて笑顔で答えてきてくれた

夕立「提督に褒められるためっばい!」

二ペアつとまるで効果音がつきそうなぐらい満面の笑みでそう答えてくれる。そんな夕立に

「そっかw夕立は充分凄いやwこれからも頑張つてなw」ナデナデ

夕立「っ!ばいっ!!」

そう言葉を向けただけ……その言葉を聞いてから夕立は見違えるほど強くなった。

「そこっ!」

夕立「っ!」スッ

「!?消え……いや!後ろか!」カキン

木刀と木刀が重なり合う。



「っ！おつらあ！」

夕立「！……負けなっぱい！」

夕立の長所はどんな体勢からでも受身を取れる所や、異常なスピード……身体能力にある。残像さえ見せる速さに、ピリピリとした緊張感……それが相まって……楽しいっ！

近くまで突進してきていた夕立と木刀を再度交える

「……楽しいなあッ！」

夕立「!？」

俺が大ぶりに横に振ると、夕立は一回吹っ飛ばされるが軽やかに着地をする。

夕立「提督さん……その目っ」

「あん?……そんな事より今は真剣勝負……だぞっ！」ブン

夕立「っ!？」カキン

ノーモーションから一気に距離を詰め、夕立の首筋に木刀を振るうが、既の所で夕立にガードされてしまう……

(俺ってこんなに速かったっけ……まあ……いいやつ!)ズシ

夕立「くっ……」スル

「おわっど?！」

するりと木刀をいなして解放される夕立。俺は全体重かけていたこともあり、ぬるりと前のめりになる。

夕立「提督さんの目って……黄色だったっぼい?」

「……………?俺の目は元から黒だぞ?」

夕立「……………」

なんだ?妙な事を言うな……まあーそれよりも

「……………構えよう。仕切り直しだ」

夕立「っぼい!」

ほぼ決闘のように俺と夕立は構える。俺はポケットからひとつのコインを取り出して

夕立「?何をやるっぼい?」

「ああwこれが落ちた瞬間に開始にしようって意味だw」

夕立「なるほどっぼい…………」

その言葉を聞いて、コインを弾く、クルクルと空中に舞う中、俺と夕立の視界は恐らくスローモーションになっていただろう。いや、現に俺はスローモーションのように遅かった。そしてコインが、チャリつと地面に落ちた瞬間に

「……………っ!」スッ

夕立「……!?!」カラン

ほんの一瞬、その一瞬だけで、俺の木刀の先端は夕立の首元スレスレに置かれる。夕立は上段から振りあげようとしていた木刀を停止させ、そのまま手を離す。からんつと木刀が落ちる音がすると両手をそのままにして

夕立「……ま、参ったっぽい……」

そう言葉を上げた。俺も木刀を地面に落として、夕立の頭をナデナデする

夕立「つつ!!」

「よくここまで強くなったねwこれでもう大丈夫……あとは今までの事を水上でやるだけだ。何、心配はするなw夕立のここ1週間の努力は必ず報われる。俺が言うんだw間違いないよw」ナデナデ

俺の勘はよく当たる……ってじいちゃんに言われたからな……

夕立「………ぽい／＼／」

「はい?なんて?」

夕立「私……頑張ったぽい!!」ダキ

「うぽわあ?」

ゼロ距離からの突進に似た抱きつきをされた……うごっ……臓器が……

夕立「提督さん♪提督さん♪ぽいっ!!♪」スリスリ

なんかよくわかんないけど良かった……いや本当によく分かんないけど……

「頑張ったね……これかも強くなるぞ。夕立」ナゲナゲ

俺な胸に顔をうずくめてる夕立の頭を撫でながらそう言葉を送る。すると笑顔で

夕立「ぼいっつ!」

元気に答えてくれた。

『で、いつあのゴミ袋を売りに行くのじゃ?』

(……はっ!?)

あの死闘(仮)から約2日が経ち、現在は書類をちびちびこなしてるなか、そう言われる。

(た、確かに……そろそろ売りに行くか……)

『もう1週間を放置してるぞ』

(うぐっ……く、訓練が楽しくて……)

『いいからさっさと行くぞ』

(はいっ)

そうして、ゴミ袋片手にこの鎮守府から出る時だった。

「?君たちここで何してるの?」

「……………!?!」ビク

「え?」

片方が緑髪で腰まで伸びてる子。片方が赤い髪型の子。

??? 「べ!別に何もしてないよ!」

「そうか?にしてはここから出たそうな顔してますけど」

??? 「!?そ、それはあ……………」

「ところで君、名前は?」

??? 「わ、私!?そ、そうね…江風だ!」

「おお。元気がいいですね。そちらの緑髪の子は?」

つと、視線を緑髪の子に向ける。彼女はモジモジしたあと小さな声で

??? 「……………山風」

「山風ね。把握。で?2人は外に出たかったのか?」

江風 「べ!別に!で、出たいてって訳じや……………」

うーむ…確かに育ち盛りみたいに見える目してる駆逐艦だけか?そんな子達がここの敷地だけってのもなんかなあ…

「…なら、ついてくるか?」

「えっ!」

「いやー、前任のゴミゲブンゲブン宝物を売って金に変えようかなくて」

山風「…………でも」

「あー、無理にとは言わないよ。ただ一緒に来るかい? って訪ねてるだけだからw」

そう言うのと、2人は顔を見合わせて、ひとつ頷くと江風の方から「同行させてくれ!」  
と言ってきたので一言「おっけい」っと答え、門を開け、歩いていく。

「離れんなよー」

少々人混みがある場所に来てしまった。2人は焦りながらも俺の後ろをちよこちよこ着いてきてくれる…あーでも、遅かれ早かれこれは離れるな。

「ほら。離れるなよ」ギユッ

江風「なっ!ちよつと!」

「離れると危ないぞ? いいから捕まってる」

江風「うっ……………わかった…………」

「ほら、山風も」ギユッ

山風「あっ……………」

「ほら、着いてきて」

つと、目的の場所についた。俺はゴミゲフン、宝物を渡して、少し時間がかかると言うので、ちょうどお昼出しと思い、近くの喫茶店に入る。

「ほら、好きな物頼んでいいぞ」

江風「……………いいの？」

「いいよ」

山風「……………本当に？」

「いいよw」  
「ニコ」

「「じゃー……………これっ！」」

「……………それでいいのか？」

「「うんっ！」」

「お、おう……………」

そして、メニューを注文する。俺は野菜パスタで、2人はお子様ランチ…………

「あの、本当にそれでいいのか？」

メニューが届いた時、2人に尋ねてみる

「「いいっ！」」  
「ニコ」

「ならいいか……いただきます……」

そう言つて手を合わせて、クルクルと巻いて食べていると、目の前の2人はポカーンと見ていた

「ん?ゴクン……どうかしたのか?」

そう尋ねてみると、いきなり2人は手を合わせて

「いただきます!」

「お……ど、どうぞ?」

江風「!」ニペア

山風「……………」ニコ

「??」

『今のお主、お父さんに見えなくもないぞ』

（は?馬鹿言え。この子達は俺の子じゃねえぞ?）

『それでもじゃよw』

（俺まだ若いんだけどなあ…）

『たかが、20前半じゃろ。ワシには及ばんよw』

（たりめえーだろ!まあー20前半でも心は少年です☆）

『うむ。言動その他諸々含めて確かに少年じゃな。馬鹿な方の』



(ああんっ!?否定はしねえーが表出るゴラアっ!)

『認めるのかい!それと残念じゃな!表にはでれまじやえーんw』

『ああっ!?!』

山風「パパ」

『『パパ!?!』』

「ば、パパって俺の事?」

山風「うんっ♪」

「……………どうしてそうなったか説明求めても?」

江風「あー…それは私から説明しても…?」

「え?あ、お、おう?」

そして説明を受けて分かったこと。

「わからんっ☆」

江風に言われたのはこうだ。親の存在が欲しくて、本などで知識を得ており、その知識から、今の光景、年の差、ありとあらゆる状況でそうなってしまったのだと。もう一度いう。わからんっ☆

山風「……………だめ?」ウル

「うぐっ……………で、でも……………さ?ほら!俺……………提督だよ?君も分かるでしょ?前任に何

されたか……だから……ね?」

山風「……違うもん」

「え?」

山風「私がパパって言いたいから言いたいんだもん!!」

「うわっちょよ!?!どうしたの!?!」

いきなり大声あげないでください心臓止まりそう

山風「前の人はゴミでクズでどうしようもない人だったけど!今目の前にいる人は違うもん!」

「餅ついてええ?」

『お前がおちつけええ!?!』

山風「美味しいご飯もくれる、無理に出撃させようもしない……それどころか休みまであるしお風呂も入れる……そんな人の事を嫌いになれないよオ!」

「ホワアアアアアツ!?!」

『壊れたアアアアアツ!?!』

コホン、取り乱した。すまないっ

「……山風、俺のことをそんなにパパにしたいか?」

山風「……だめ?」

「ダメではない。しかしな、簡単にはいうが…難しいぞ?」

山風「……構わない」

「………そうかい。それじゃー命令だよ」

そう言った時に、山風の顔が強ばる…が、お構い無しだ

「………死ぬなよ」

山風「……へ?」

「俺の娘なんだ。簡単に死んでくれるなよ?w」

その俺の言葉に一瞬理解出来なかったのか、キョトンとした顔の山風から一転、理解したのか顔を真っ赤にして

山風「は………はい………// //」

つと言った。

「うんwよく言ったw」ナデナデ

娘の頭を撫でる。これ重要。子供いないから知らんけど。なんなら年齢||童貞だけど。あ?文句あつかよ

それから、まあーあんなことしたのでそれはそれは痛い人を見る目でしたね。そんな中でも笑顔でお子様ランチ食う山風と江風には苦笑いしか出来なかった。つて思ってる俺も普通にパスタ食ってたな。会計した頃にはいい感じの時間になってたので、先程

の店に戻る。するとなんか個室の部屋に連れてこられた。ふむ。なかなか緊張感があるじゃないか

『(なんだコイツ)』

まあーさておき、気になるのは値段ですね。いくらになったんでしょうか

鑑定士「買取額が…7500万円になりますね」

……………ん?今なんて言った?

「あの、すみません」

鑑定士「は、はい?」

「もう一度買取額を聞いても?」

鑑定士「は、はい…?7500万円になります…けど…」

「……………ええええええええ!!」

鑑定士「!?ど!どうなされましたか!」

「コホン…失礼…で、買取額が7500円と…」

鑑定士「万が抜けておりますお客様」

「……………まじ?」

鑑定士「マジです」

「アジ?」

鑑定士「美味しいです」

何だこの鑑定士。めちやくちやノリいいぞ。じゃなくって……

「それは本当なんですか？」

鑑定士「はい。どれも一級品…絵画なんて、これ一つで2000は行きますね」

「わっホイ」

鑑定士「……でも何故そこまで驚くのでしょうか…これはお持ちになったのはお客様なので、持ち主はお客様御本人では…」

「あ…これは親父が譲ってくれた品なんだ。何でも、「もう要らねえーし使い道ねえーからやるよ！ほれっ！」って」

鑑定士「なるほど…お父様が…それで？買い取りますか？」

「お願いします（即答）」

鑑定士「かしこまりました…しかし、額が額なだけに…」

つと、難しい顔をしてしまった。そんな心優しい人に俺はにこやかに笑って

「そちらの都合で大丈夫ですよ、別に今すぐ欲しい訳では無いので」ニコ

鑑定士「ありがとうございます。そうですね…こちらからお電話したいので…携帯番号なんか」

つと、電話番号を教え、今日の所は帰ることにした。

「よーつす。待たせたなあ」

男「ねえねえ！君たち可愛いね☆俺らと遊ばねえ？」

山風「……………」

江風「あ、あはは……………」

「おーい？山風ー？それに江風ー？早く帰るぞー」

山風「……………んっ♪」

江風「そつ、そういう事だから…」

男「まあー待てよ！」ガシ

江風「きやつ！」

山風「は、離して……………」

男「なあーおっさんw大人しく「その子達を離せ」……………へ？」

俺は男の喉元に親指を突き立て、睨みつける。

男「ひっ!？」

「俺の大事な子達だ……………その手をどけろ」

男「っ……………話をき「聞こえなかったか？」ぎっ!？」

俺は親指を喉元に突き刺していく

「その薄汚ねえ手をどけろって言ってるんだ…」

男「は！離す離す！」パッ

そうして離れた時に、俺は江風と山風をこちらに引き寄せ、抱きしめる。

「良かった…無事だな。」ナデナデ

自然に頭を撫でてしまう。そのまま視線を男に向けて

「……」ギロ

男「つつ！ひいっ！」

男たちは逃げていった……

「……はあ！つつかれた！」

チンピラから対面切つて喧嘩ふっかけるとか前の俺だったらぜってえーにしてねえーな……

江風「て、提督?!目!目が!」

「ん?目?」パチクリ

江風「あ……あれ?も、戻った……」

「ん?何の(こ)と?」

江風「……いや……なんもない(赤目が……消えてる?)」

「そつ?なら行く(う)か」

そうして、手を引つ張つて帰路につく。

山風「ねえ、パパ」

「ん? どうしたあ?」

山風「♪呼んだだけ♪」

「ふっwなんだそれw」

私は、握られた手を凝視する。暖かくて、力強いのに優しく先導してくれるパパの手を……

山風「ねっ…江風」

江風「……? なーに?」

山風「江風はパパの事……好き?」

江風「なっ!?! / / あんた何言って!?!」

「んー? 俺がなんだってえー?」

江風「な! なんでもないよ!!」



「?そうか?ならいいや」

江風「何でそんなこと急に……?」

山風「私はね……好きだよ♪パパの事♪」

山風が見る提督に対する目は、乙女の少女のように純粋で真っ直ぐであるものだ。江風は瞬時に理解した。理解してしまった……

江風「……素直でいいな」ボソ

山風「?なに?♪」

江風「うっ、ううんっ!なんでもないよw」

江風は羨ましいと思うってしまった。自分には持てない感情を山風が持つってしまったことに。そして、江風も、提督の背中を見つめる。

江風(この人の近くにいたら……分かるのかな)

そう、心で静かに思うのだった

## 胸の話をしたら砂浜までぶっ飛んでったわw

「ふむ。両手に花とはこと事を言うのだな」

『リア充爆発しろ』

現在、書類整理を行っている。本田さん：あー、鑑定士の人から4日後に電話が来たので、受け取りに行き、銀行に貯金して、あらかた必要なものを通販で頼んで現状だ。ちなみに、悪趣味なソファアールとテーブル、椅子やコップなどを全て二〇リにしてやったぜ！え？悪趣味なソファアールとかはどうしたんだって？本田さんに渡したよ？買取額が気になります！つてそんな事はどうでも良くて

鈴谷「提督、お茶とコーヒードっちがいい？」

「んー…お茶で！あ、キンキンで頼む」

鈴谷「はい♪それじゃー待っててね♪」

つと手慣れたように準備する。鈴谷は最初の頃から暇さえあれば俺の書類の手伝いやこうしてお茶などを準備してくれる。出来る女つてええよな。こう、かつこいい。

時雨「あつ！ずるい！僕の獲物だぞ!？」

天龍「んだよ！w早く倒せねえーお前がわりいーんだろー？w」  
時雨「くううつつ！」

あー、あつちはゲーム組。悪趣味なソファアを売りに行く際に、実家によつて俺の私物を持つてきたのだ。その中にゲームが何個かあったのだが、それで遊んでる2人。え？夕立？道場にこもつて素振りでもしてんじやね？

### 道場

夕立「ポイツ！ポイツ!!…ふう…500素振りはきつっぽい…次は…くしゅんっ！風邪ひいたっぽい…？あれ？でも艦娘つて風邪ひかないっぽい？…気にしなくてもいいっぽい」

まあいいや。そして

山風「？どうしたの？」

「あーいや、なんか当然のように居るなって」

俺の足の間に体をすっぽりはまつて書類のチェックを行ってる山風。そして斜め後ろにただ座ってる江風

「江風、お前暇じゃないか？」

江風「うぐっ……ひ、暇だけど……」

「じゃーこれ、確認してもらえるかな？」

江風「え!?で、でも……それは山風の……」

「気にすんなってw頼んだよ」ニコ

江風「!うんっ!」

つと、書類を数枚江風に渡して俺はカキカキする。そんな時に

鈴谷「はいっ、お茶よ♪キンキンに冷えてるわよ♪」

「サンキュー……かあっ!うめええっ!」

やっぱりお茶はキンキンに限るぜ!喉を刺激するこの冷たさ!たまらねえーぜ!

『……なあー主よ』

(はい、なんででしょうか?)

『なんかすごい光景じゃな』

(……確かにそうだな)

俺のいる提督事務室つてのはそこそこ広い。一般家庭のリビングぐらいある。そん

な所にソファアが2つ、テーブルが1つ、そこに挟んでテレビ。キッチンもあり、コッブや冷蔵庫など…そして俺の仕事机。そして天龍と時雨がソファアに横になりながらゲームをしており、俺の右斜め後ろにニコニコ笑顔を見せる鈴谷。俺の足元で書類をチエックしている山風。そして左斜め後ろに椅子をわざわざ持つてきて座つてる江風が同じく書類をチエック……確かにカオスだな

『なんか他にやることないのかー?』

(んー…そう言われてもなあ…前任が残したこの紙切れしかやることないしなあ……)  
『なんかこう……もつと提督だけしか出来ない特権とか……そういうのなの?』

(んー……ねえーな)

よくよく考えると、別にここの鎮守府は特別危険区域つて訳でもないらしいし、深海棲艦が頻繁に出没するつて訳でもないらしい。つまり平和なのだ。そんな所で提督らしいことをしろと言われてもな……答えに困るよな

『もう、ならいつその事艦娘に手を出すとかは?』

(………ほ?)

『彼女らも、艦娘といえど一人の女性じゃ。それにどれも可愛い子ばかりじゃ……どうじゃ?』

確かに……それはなかなか魅力的な提督行為じゃないか……べ!べべ別に、触りたいとか

?そ、そういうのじゃねえーし?……おい、今誰だ童貞って言った奴!野郎オブクラツ  
シヤアアアッ!

(……信頼関係が浅いから無理だな)

『そうか?ならば試しにそこでニコニコしておる鈴谷に頼んでみれば?』

つと、提案されたので、しない訳には行かないだろう。べべ別に?触りたいとか?そ  
んなやましい事考えてねえーし?

「なあー鈴谷」

鈴谷「はいつ、なんですか?♪」

「おっぱい触らせて」

「[[[[[[えっ]]]]]]」

(……ドヤ?)

『ドヤってかお前アホだろ。』

(これで少しでも人間を怖がって俺との距離関係をだな)

『むしろ離れて行くんじゃないのか?』

(それならそれで大満足!)

『お主よくわからんな…』

(それで結構!まあー結構みんなドン引きした感じだし手応えはあつたんじやないのか

な?w)

『お主……いつか刺さらるぞ』

(刺されねえーよw)

つと、肩をトントンつてされたので俺は笑顔で振り返って

「よしばつちこいー!」

頬にできる限り力を込める。いいか!?何時いかなる時ピンタが飛んできてもいいように身構えるのが童貞屑男の本能……いや誰が童貞やねん!!

鈴谷「わ……私ので良ければ……//その……//どうぞ……//」

何故か胸を寄せるようにすると、俺にそう言ってきた鈴谷……

(これは俺どう反応すればいい?)

『とりあえずツツコめ!』

「なんでやねん」

鈴谷「ふえつ……//」

(こんなんでもいいか?)

『アホか!もつと別な所あるだろ!』

(あーなるほど。そういう事ね)

つと周りを見渡して

「冗談だよ」

つとやって書類に目を向ける。

（どうだった？）

『あー……うん。いや……頑張れ』

（は？何をがんば）ガシ

「あちよ！痛い痛い！」

なんか思いつきり肩掴まれてるんだけど……てかやばい！もげるもげる！

「い！痛い痛い！もげる！まじもげる！肩が！俺の肩があああああつ！」

鈴谷「提督」

「何!?とりあえず説教する前に俺の肩から手を退けて！まじ痛いから！本当！めり込んでいるからアアア！」

鈴谷「あなたたつて人はあああつ！」パン

「ぶべら！はつ!?よし。大丈夫だ！頭は吹っ飛んでない！」

鈴谷「そんな簡単に吹っ飛んでたまりますか！」

山風「……パパのエツチ」

「ええ……」



天龍 「はっはっは W まさかあんなこと言うとはなあ W」

「いやだつて……なんかからかいたくて」

江風 「にしては少し度が過ぎたんじゃやない？」

「反省はしてる。後悔はしてない！」 キリ

時雨 「提督のそういう所、僕は好きだよ」

「ありがとう！俺もそう言ってくれる時雨のこと愛してる！」

時雨 「あつ……／＼／うつ……／＼／」

「でだ。鈴谷さん。とりあえず謝ればいい？ W」

鈴谷 「当たり前です！」

「本当にすいませんでした。それとーっ」

鈴谷 「何!？」

「鈴谷つてもしかして触られたかつ」

その時、俺の頬に強い衝撃が飛んできて……

「あいつってええ!？」

パンっ！という音と俺のそんな叫びが鎮守府全体に響き渡ったのだつた……

「ひふあふあつた（痛かった）」

『お主の自業自得じゃ。』

いやー、まさかビンタをくらったら思いのほかの勢いで2階から吹っ飛ばされて砂浜にズザアアつてしていくとは思わなかったぜ！砂浜まで500mちよいあるのになあ

「艦娘の力恐るべし！」

『なぜお主が生きてるのか不思議なぐらいじゃ』

「んまあー確かになwまあー深くは考えないでおこうやw」

『そうじゃな……』

つと、俺は砂浜から立ち上がる。潮の風が頬を撫で、少し久しぶりな気もする。

「……ん？なんだあれ？」

視線を遠くの方に向ける。なんかクラゲみたいな帽子かぶった白髪で体も白い女の子がどこぞの鉄血団団長みたいに倒れてる。

「止まるんじゃねーぞ」

そう言いながら俺はその子の方に駆け出していく。

「なあー、この子大丈夫かな」

近くにあつた岩がけの日陰に連れていき、今現在俺の太ももに寝そべらせてる。

『お主本当に知らんのだな……』

「へ？何が？」

『その子はな……』

つと、爺さんから話を聞こうとした時に

??? 「！」パチ

「お、起きた起きた。どう？調子は大丈夫？」

瞳は赤色ですね。つてそんなことはどうでもいいか

??? 「クッ！コ！コロセ！」

何それ？エロ同人誌なの？まあーいいや

「急になにを言い出すんだお前は……まあーいいや。ほら。足出して」

そう言つて、足の傷に何故かポケットに入つてた包帯を足にグルグルして固定する。

「よしつと、これで止血は大丈夫かな。大丈夫？歩けるか？」

??? 「……オ、オマエハ……」

「俺？ただの提督だよ。そんな事より君、名前は？」

……あれ？俺が提督だよつて言つた瞬間なんか凄い殺気が……

「あ、あの……どうかしたか？」

??? 「…………私ヲドウスルツモリダ…………？」

「は、はあ？どうするもこうも、歩けるならすぐさまお帰りになって欲しいんですけど」  
そう言うとは次はキョトンとした顔をする。あれ？なんか変な事言った？

??? 「…………ゴ、拷問シタリ…情報ヲ吐ケトカ…」

「あん？なんでそんなことしなきゃいけないえーんだよ？女の子痛ぶるぐらいなら死んだ方がマシだなw」

そう言うとは、先程よりキョトンとした顔になる…………あ、あれえ？

??? 「…………ヲ級」

「へ？」

不意にそんな事を言ってきた彼女にめちやくちや素っ頓狂な声出ちまったwやだ、あたし恥ずかしっ／＼／＼

『可愛くない帰れ』

(うっせ黙れ)

『てか急にオカマになるなや』

(すまないとは思ってる。でも出ちやうw)

『ある一種の病気だな』

つと、またも頭悪そうな会話をしていると、彼女の口が再度動いた

ヲ級「私ノ名前……ヲ級」

「…不思議な名前だなW分かったよ」

そうして手を前に出す

ヲ級「!?何を」

「ただの握手だよW名前まで聞いて聞いた仲になつちまったらただの他人つて訳にはいかんだろ?」

そう言うのとヲ級は俺の手をじつと見つめて、そつと俺の手を握り返す。俺は満面の笑みで握り返す。彼女の手は冷たいけど、その分だけの温もりのような温かさを感じた。

「それじゃー俺はそろそろ持ち場に戻るよWヲ級も、気おつけて帰るんだぞ?」

そう言つて立ち上がつて岩崖を後にしようとしたら

ヲ級「……オマエハ…変ナ奴ダナ」

「よく言われるよWじゃーな」

そう言つて俺は立ち去つた。

ヲ級「………変ナ奴……」

あれから、15分ぐらいかけて鎮守府へと帰つてきて、現在なんかでつかいグラウン

ドを歩いて俺の部屋に向かつてる途中、

『よオ生きておったな』

不意にそう言ってきた爺さん。

「はあ？ 艦娘っぽいから確かに殺されたかもしれないけど……話が通じる良い奴だったぞ？」

『お主はなあ……あやつは』

つと、次は前から慌てて走ってくる鈴谷によってまたも爺さんの言葉が遮られる

(お前本当運悪いな)

『……うるさいわい』

鈴谷「提督……!!」

「おぉー鈴谷、こんなにちうぼあつ!」

ダツシユの勢いそのまま、鈴谷は俺に抱きついてきた。危なかったぜ。危うく肺がベツチヨリする所だった!

「な、何すんだ……」

鈴谷「ごめんなさい!ごめんなさい!私が提督のこと……ごめんなさい!ごめんなさい!!」

あーあ、こりゃ責任感じてますね。

「…よしよし」ナデナデ

鈴谷 「ふえ……………」

「別に怒っちゃいねえーよwだからそんなに責任感じなくていいからwな？」ナデナデ

鈴谷 「て…提督……………で、でも……………私は……………」

うーん……………どうしたのか……………あ、そうだ！

「はーい！悩むのはそこまでー！」ムニユリ

鈴谷 「ふにゅあああつ!?／／／て！提督!?／／／」

不意に俺は鈴谷の胸を鷲掴みにする。ふむ。なかなか柔らかい。初めて女の胸を触ったが悪くない……………でもただの励ましだしいやらしい気分にはならないですなはい。

「責任感じるのは分かるけど！俺本人が気にすんなって言ってるんだから気にすんな！分かったか!？」ムニムニ

鈴谷 「わっ!／／／わかったから!!／／／胸!／／／胸から手を離して!／／／……………」

あっ／／／

「ほい！分かれればいいのだよ！」パッ

鈴谷 「あつ……………うう……………」

「残念そうにすんな。お前のあだ名をビッチに改名すんぞw」

鈴谷 「!?だ！誰がビッチですって!?!」

「そうそうw何時ものノリでできるようになったじゃないかwよしつ、書類整理行くとしましようかw」

鈴谷 「ちよ！て、提督！そんな事より！なんで私胸揉まれたの!!」

「さあーw何ででしょうwさあーてと、書類整理書類整理つとw」

鈴谷 「！提督ー！！」

「あwやべつw逃げろーw」

追いかけてくる鈴谷から逃げるために、俺は全力疾走で提督事務室…俺の部屋へと向かった



「……例の鎮守府はどうなってるんだ？」

「そ……それが……書類だけで……戦闘報告なんかは……」

「何……?」

白いくて長い髭を、手で遊びながら厳つい男は少し怖い顔をして

「……遊びではないのだぞ？」

「っ！そ！それは充分分かっております！……ですが……」

懐から1つの封筒を取りだし、それを厳つい男に渡す。それを受け取り、目を通した

厳つい男はさらに怒りを表した

「舐めるのも……大概にしろよ……?」

そこに書かれていた紙には一言、長期休みと書かれていた……それがさらに男の怒りを  
買う事になるのだった……

よっしやあ!俺らしくないことするぞーw

霞「このクズ!」

「ええ……」

なぜ俺がこのようなことを言われてるのか、それは数十秒前に遡る

『いやそれ遡るいm』

いつものように書類整理をしていた。今日、鈴谷は

休みますね♪

つと言って休み、天龍は

木刀がオレを呼んでいる!!

つて言って事務室を飛び出して、夕立に關してはバンっ!つと勢いよくドアを開けたかと思うと

提督さーんっ!!

っと思いつきり抱きついてきた。思わず臓器が口からポロリしてしまふ所だった。吐血が1番近かった。そんな出来事があつて少ししたあとの事だった。コンコンっというノック音が聞こえてはいよーと声をあげれば

??? 「このクズ！」

っつと罵倒を受け、それをスルーして

「名前は？」

っつと聞き返すと

??? 「霞」

っつと真顔で答えて

「なに用で？」

と問いかければ

霞 「このクズ！」

っつと答えてくる

『ごだまでしようか』

(やかましいわ黙ってる)

『A～C～♪』

(黙れw)

とまあー、このような感じで

「出身は？」

霞 「このクズ！」

「クズ言つてて楽しい？」

霞 「このクズ！」

「俺の事からかって楽しい？」

霞 「このクズ！」

「楽しいようですね」

霞 「このクズ！」

もうここまで来たら壊れた人形さんだよ。ふむ…どうしたものか…あ、そうだ

「お前の方がクズだよ」

霞 「……」

………おっ？

「だいたい挨拶もなしにクズ呼ばわりとはお前何様のつもり？」

霞「……………」

「これはもしや？」

「そもそも礼儀としてどうなの？ノックしたのは正しいけど、失礼しますとか、そういう言葉はないわけ？」

霞「……………うっ」

「……………う？」

霞「うるっさいわね!!私だって混乱してるよ!!いきなり休みだなんだ言いやがって!このクズ!変態!」

「待って待って!百歩譲ってクズは認めるが変態じゃねえぞ!」

霞「うっさいバカ!死んじやえ!」

「酷くない!?!……………あ!そういうことか!!」

霞「!何よ!?!」

「クズと罵倒するのは前任にそういえば自分にヘイトを集められて、自分の仲間には手出しされずに自分だけされようと…そういう事だな？」

霞「っ!」

ふむふむ、眉が一瞬ピクリと動きましたね。これは凶星って奴だな!やはり!所詮は

子供!だぜ☆

『精神年齢幼稚園児が何言ってる』

(うっさい黙れ。てかそんなに頭悪くねえーよ)

『頭の問題じゃない。行動の問題じゃ』

(……………ああー)

『否定しろ』

(いや…確かに思いたったら行動しちゃうし、興味あるものは探っちゃまうし…あながち間違いじゃないのかなって)

『おい』

いやいや、そんな事より霞の問題を取り除く事だな

「それじゃー霞。約束しよう」

霞 「つ……………何……………よ」

「俺はここにいるもの達に手出しは絶対しない。絶対にだ」

霞 「!どうせ口だけの!?!」

そう言い放った瞬間、俺は自分の首元を浅く机に置いてあつたカッターで切りつける。

「もちろん、破ったら煮るなり焼くなり好きしても構わない。無論、殺しても構わない」

そう言つて頭に恐らく護身用であろう拳銃を自分自身で突きつける

霞「！まっ……」

「俺は……本気だ」

そう言つて拳銃のトリガーを引く瞬間に

霞「やめてよ!!」

「……………」

霞「もう……………やめてよ……………お願い……………だから！私のせいで！誰かが犠牲になるのは

もう嫌なのよ!!」

やつと、本音が聞けた

霞「だから……………やめてよ……………これ以上……………悲しい想いにさせないでよ……………お願い……………」

「っ。」

俺は膝について、優しく霞を抱きしめる。抱きしめるまで俺に気付かないあたり、相当参つてるんだなつて思った。そんな霞の頭を優しく撫で、背中をポンポンつてしながら

「俺にはその気持ちは分からねえーし、分かつてつもりで知つたかして傷つけるつもりもねえーよ。でも、これだけは言わせてくれ」

そう言い、より一層優しくぎゅつと抱きしめて

「今までお疲れ様…でも安心しろ。俺が、お前の仲間もろとも守ってやる。救ってやる。」

そう言放つと、俺の体の中で小さく震える霞が、掠れた声で言葉を放った

霞「……どうせ…また裏切られるんではよ?」

「裏切らない。言っただろ。約束をやぶったら俺を殺してもいいって」

霞「……信頼しても…どうせ…居なく…なるん…でしよ?」

「居なくならないよ。ずっとここで、俺は君たちを育て続けるよ。それで君たちが強くなるにつれて、俺もどんどん強くなるからさ」

霞「………裏切ったら…許さないんだから……」ギョツ

「ああ。約束しよう。君を、君たちを守ると」ナデナデ

霞「………」

「…もう、抱え込まなくていいんだよ」ポン

霞「!!」

「疲れただろう? 苦しかっただろう? ……もういいんだよ。もう、我慢しなくていいんだよ。」

霞「…ほ…んと…に…?」

「ああ、よく頑張ったね。これからは…素直に生きていいんだ。今までお疲れ様…そし



て、これからもよろしくな。霞」ナデナデ

その瞬間

霞「……………ひぐつ……………うっ……………」

霞の今まで押し込んでいた感情が

霞「うっ……………うっ……………うわあああんっ!!」ギユウ

溢れ出るのであった……………

「……………」ポーン……………ポーン

あれから数分、泣きじゃくっていた霞の背中をポーンポーンしていると落ち着いていった。正直こんな少女でも重い悩みがあるって知った瞬間、前任の提督を全裸状態で思いつき金的100回蹴りたい気持ちだが、そんなことしても何にもならないよな。うん。でも、これで少しは紛れるといいな

霞「……………いつまで抱きついてるのよ……………クズ」

「……………抱きついてるの霞なんだけど……………」

現に俺の左手が背中を撫でてるだけで右手はプラプラプララーナだ。地面にぺたりと

してる。かく言う霞はがっちり手を後ろまで回してホールドしている…俺の胸に顔を  
ずくめてるし

霞「言い訳は見苦しいわよ。クズ」

「じゃー無理やり離れようか?」

つと、立とうとした瞬間、ぎゅつと抱きしめる力を強くした霞は弱々しく

霞「もう少しだけ……こうさせて……」

つと悲しげに言ってきたので、はあーとひとつため息をついて、頭に手を乗せる

霞「!」

ビクツと体を震わせたが、嫌がる素振りをしないのでそのまま頭を撫でて

「あと少しだけな」 ナデナデ

そう言うのと、もそもそつとしながらも

霞「……このクズ……♪」

つと罵倒を言ってきたのだった。最初のやつより穏やかに、そして、優しげで、心を  
踊ってるような声で……

結局開放されたのは頭を撫でてから10分の事だった。俺の腕が木偶の坊になる所

でした。いやならねえーけど。今？今は書類整理してるよ。

「……………」カキカキ

霞「……………」

俺の膝の上に座り、足をプラプラとさせている霞がいるけど…………いやね？本当は帰ると思ってたんだよ？でもね？

「落ち着いたか？」

霞「…………うん」

「そっかwならよかったよw」ポーン

そう言つて、頭をポーンポーンつてして、書類を書き始めてたのだが、一向に帰ろうとしない霞。帰るどころか

霞「……………」チヨコチヨコ

2分から3分おきにこちらに近付いてきて…気づいたら俺の膝に座ってた。何を言ってるかわからねえーと思うが俺も何してるのか分からねえ！ただ1つ分かるのは今俺は書類整理してるってことぐらいだ！

「……………あの、霞さん?」

霞 「なによクス」

「帰らないの?」

霞 「何?帰って欲しいわけ?」

「いや別にここに居たいならいてもいいんですけど」

霞 「はあ?じゃー別になんも文句なんてないでしょ?」

「あーいや…俺の膝の上以外に座るって選択肢ないんですか?」

霞 「は?これは座ってるんじゃないわよ。踏みつけてあげてるの。どう?嬉しいで

しょ?」

うーんこの

「ものは言い様だな。じゃー別に何されても文句は言えねえーだろ?」

霞 「はあ?!いいわけないでしょ!」

「あつそ。それじゃーなでなではいらなくてことね」

霞 「!?……………え!ええ!別にいらなわよ!変態でクスなあんに頭撫でられたら頭が

腐敗しちゃうから触んじやないわよ!」

つといいつつも少ししよぼんつとして、下を俯く…あーもう可愛いなあ……………なんで艦

娘ってこんなに純粋な子ばかりなんだろう

そうして俺の手は自然に霞の頭に吸い込まれていき……

「……………」ポン

頭に触れてしまう

霞「っ!?……………」ビク

体は跳ねるが、抵抗する気はなく、むしろこちらに体を預けるようにしている……

「あれえ？俺に触られるのは嫌なんじゃないんだっけ？」

霞「!?うっ！うっさいわね！ええ！そうね！嫌だわ！だから早く手を!？」

なでなでを開始する。ふむ。サラサラとした銀色髪。ベトベト感なしで、髪一本

本の繊維が生きてますねこりや

霞「ちよ！触んな！ちよっ……………撫でるなあ！このクス！変態！」

「そんなに嫌なら手で俺の事叩けばいいんじゃないのか？」

霞「うっ……………そ、それは……………」

あ、弱みでた。

「……………そんなに嫌なら辞めてやるよ」パッ

そう言つて俺は霞の頭から手をどけると

霞「えっ……………あっ……………」チラ

首だけを動かして、俺の目を悲しい顔で見つめる。

「悪いが、嫌がつてまで愛でる趣味はないんでね。霞が嫌がることはもうしないよ。」  
そう言つて書類に手を伸ばそうとした時、その裾を掴まれる。

「何?」

霞「あ……………えと……………」

よし、ここらでヒントを1つあげてみよう

「……………悪いが、人つてもんは素直に言われなきや気持ちは伝わらねえーんだよな」

霞「!」

「今の霞は、まるで分からない。ちゃんと口ではつきりと言つた方がいいよ?」

そう言つて霞と目線を合わせる

霞「えつ……………?……………あつ……………// //」

「霞は、どうして欲しいのか。はつきり言つてもらわなきや俺わかんないよ」ニコ

そう言うのと、急激に霞の顔が真っ赤に染まる。……………あれ?これ合つてるよね?なんか昔にじいちゃんから教わつた事をしてるだけなんだけど

そうして、霞が一言

霞「い……………嫌じゃないから……………」

「ないから?」

今更ながら俺って意外と意地悪なのかなって思ってみたり…いやでもただ聞き返してるだけだし…

霞 「っ／＼／＼……その……撫でていいから……／＼／＼」

「いいから?」

霞 「!!／＼／＼……わ、私の頭を……撫でてください……／＼／＼」

「うん!よく言えましたw」 ナデナデ

霞 「あっ……／＼／＼」

「人間素直に言わなきゃならないときもあるからなw覚えておくんだぞ?でも、嘘も時には必要だかな?でも、今の霞の気持ちはいいと思うよwちゃんとまっすぐ言えてたからね。これはよく出来ましたっていう褒美なんだからw」 ナデナデ

霞 「ふわっ……♪……♪」

「どうだ?気持ちいいか?」

霞 「……うんっ♪気持ちいい……♪」

「そっかwならよかったよw」 ナデナデ

そうして、撫でながら書類整理をしていたら

霞 「……ねえークズ」

「うーん?どうしたア?」 ナデナデ

霞に視線を合わせると

霞 「!／／／な、何でもない!」 プイ

「は、はあ? 何だよそれ?」

そっぽを向いてプンプンしてる……なんなんだ?

『お主ってアホなのか?』

(はあ? 何でそんなこといきなり言われなきやならんのだよ?)

『自分の胸にでも聞いてみるとじやな』

(え、ええ……)

霞 「ねえークズ……」

本当は提督って……言いたいけど

「んー?」

私は素直になれないから……言えないけど



霞 「あたしね、あんたのこと大っ嫌いだから」

本当は突き放したくないけど……空回りになことしか言えないから……でも、提督は……

「そっかw俺は霞のこと大好きだぞw」

霞 「っ!?!／／ば!ば!ばっかじゃないの!?!／／／」

そんな私でも好きと……大好きと正面から言ってくれる……こんな感情は艦が持ちやいけないことだってわかる。それが不要ってこともわかる……でもね……許して……

霞 「このクス!!大<sup>提督!</sup>っ<sup>好き!</sup>嫌い!!」

## 新たな出会い……そして幻想

霞「クズ」

「はいなんでしよう」

霞「撫でなさい」

「はい」 ナデナデ

霞「……んんっ♪」

あの件から既に3日が経過した現在。今ではもはやあの頃の霞なんて存在しない。いや、なんかこう……うん。

霞「……クズ」

「んだよ……」

霞「♪クズ♪」

「はあ……」

めちやくちや甘えん坊になった。やっぱり甘えられる環境が今の今まで無かったってことなんだろう。にしてもだよ？ たった3日だよ？ それで俺の膝に座って頭撫でてを要求してくるんだよ？……最近の子は進んでるなあ

鈴谷 「…提督、早く書類を片してください」  
「ウィツス」

ちなみに霞がこんな状態になってから鈴谷さんはイライラしていますね。あれですあれ、嫉妬つてやつです。あらあら、微笑ましいこと

『その中心点お主じやぞ?』

(やめて現実を突きつけないで)

『まあよいわ……刺されるなよ』

(刺されそう)

「あ、そうだ、久しぶりに道場にでも行くか!」

つと、俺の気まぐれで道場に向かつてる最中の事だった

「ぶべらあ!?!」

俺は!後ろから近づいてくる一人の艦娘に頭を殴られていた!!目を開けたら……

「んー☆何処(どこ)？」

なんとっ！見知らぬ部屋に手足を縛られていた!!

『何だこの急展開』

(それは呑気なことと言ってないで励ます言葉とかないの?)

『頑張つてね☆』

(おうくそじじい。一旦表出ようか)

頭の中で何時ものように会話していると、目の前の扉がガチャリと開く。入ってきたのは少女。紫髪をツインテールに結んで、中学生みtainな制服着てる。いかにも駆逐艦ですよって感じ。なんか霞と同じ感じがする

???' 「気分はどうかしら?クソ提督?」

あ、同じ匂いじゃなくて同じだわwあ!この子って確か夕立に剣術かなんかを教える時に居たな!てかそう言えや霞もその場にいたよな:~:なんで俺名前忘れてたんだろ……あ!あれか!もう関わらないと思つてたから頭の中で抹消してたんだな!そうだそうに違いない!

『それはそれで失礼だな』

(確かにな!否定はしないぜ!!)

『お前のあだ名をこれから問題児に改名しようか』

(おいおい照れるなあw元からだろ?)

『なんだ、自覚してたのかw』

(あたぼーのパプリカマンよw)

『なんだコイツ』

??? 「聞いているの!？」

「あべし!!」

少女が持つてるなんか木の棒みたいなので殴られた。あー痛い……

『誰に会いたいの?』

(はっ倒すぞw)

っと、その前に話を聞くとこからだよな。

「で?なんの話してたの?」

??? 「つ!!この!!」

「なんで?!」

ただ何を話してたのか聞いただけなのに木の棒で頬をぶん殴られてしまっただ。  
わあー痛い。口が切れて口の中鉄の味しかしねえ……

「ぺっ!あー痛い」

口に溜まった血を吐き出す。まずなにに怒ってるのか検討がつかないですね。とりあえず

「確か……曙って名乗ってたよな。どしたん？そんな怒って」

曙「つ……と！とぼけないで!!」

「とぼける？一体なんの話しをしてるんだ？」

まじで会話が見えない。そもそも俺は練習を見に行ってからこいつとは一度も関わってない。怒ってる事がまじで不思議の不思議ちゃんだ。

曙「つ！霞に！何をしたの!？」

「あ………へ？」

そう言えや霞と曙はあの時俺のことを睨んでたな……そうか。お互い同じような性格だから意見が合いやすいのか。恐らく俺の悪口を言ってたのに、昨日か一昨日か分からないけど、霞が俺の所に行くようになったかなんだで心配してるのか……なんだ。良い奴じゃないか。まあ俺にこんなことしてる時点で責任は後でおってもらうけど

(……あれ？今ひよつとして俺って刺されてる?)

『これから刺されるの間違いじゃないのか?』

(………これってフラグ回収……?)

『お疲れ様あ!☆』

こいつ本当に楽しそうだな。はっ倒したい☆ってそんなこと考えてる余裕なんてねえーな……1つでも選択をミスればサンズの川じやなかった、三途の川を渡らなきゃ行けねえ。誰も地獄の業火に焼かれたくはないので俺はクールに逃げのドアを選ぶぜ！

「えーと……何もしてないぜ？」

曙「嘘よ！ だつたらなんで毎日クソ提督の部屋に向かつてるの!？」

「いや、それは俺も知らない！ マジで！ えーと……ついこの間……つても3日前の話なんだけどな？」

俺は3日前に起きた出来事を曙に話した。叱ったことやら、俺が臭いセリフを言ったことも全部。いや正直なんで黒歴史まがいなことをわざわざ言わなきゃならないのかと頭を頭の中で抱えるが、みるみる啞然として行く曙の顔を見ていたらおもしろくてつい話しすぎちゃったぜ

「……まっ！ そんな所だなwだから別に俺は霞に対しては1ミリも手を挙げてない。もちろん、体にもだ。それが事実だよ」

曙「……う！ 嘘よ！ そんなこと全部!!」

一瞬後ろに足が下がるが、それでも強い言葉を使ってこちらに向かつて、木の棒を固く握りしめる

(あー……こりゃフルボッコされて死ぬパターンだな……)

『まあーどんまい☆』

(出来れば刺されて死にたかったなw)

『それもそうじゃなwでも…ラツキーじゃないか』

(ラツキー？何がだよwたく…)

俺は静かに目を瞑った。殺させる事には変わりないんだ。ならばせめて目を瞑って、身を捧げようと

曙「っ！このっ！クソ提督!!」

そうして、恐らく曙が木の棒を上段に上げた時……だと思う。そんな時にガチャリ

そんな音が聞こえてきた。それと同時に木の棒がカランと落ちる音が聞こえた。何かと思い、俺は片目だけを開ける。その場にいたのは

霞「……………てい……………とく？」

唾然とした顔を浮かべた霞がこちらに目を向けていた。そんな霞に対して

「おう…:すんごい偶然…」

そんな声を上げたあと、聞こえた声は

霞「っ!?!提督!!」

足早に俺の方に駆け寄ってきて、拘束された手をいつの間に取り出したのか分からない



い機銃みたいなのでといてくれる。

霞 「大丈夫!? 血! 血が! 痛いよね!? ねえ! 提督!」

「落ち着けて……別に死ぬ訳じゃ」

霞 「バカ言わないでよ! 提督が死んだら! 私……私は! 誰を信用すればいいのよ!」

「……………」

霞 「お願いだから! 死なないで提督! 嫌だよ……! もう……大切な人を……無くすのは……嫌なのよ……! ねえ……ていと……く?」

俺は霞の頭に手を乗せて、精一杯笑顔を向けて

「だから死なないってw……それに……言ったら? お前やお前らは俺が守るって……

こっちは命かけてんだ……そんな簡単に裏切やしねえよ……」ニコ

霞 「ていと……く……♪」

そう言葉を発したあと、霞は静かに立ち上がると、先程の雰囲気から一転

霞 「あんたが……やったの?」

曙 「っ!」

ドスの効いた声で、曙を睨みつける霞……あ、これはまずい

曙 「あつ! あたしは! あんたのことを思って……」

霞 「私の大切な人を傷つけておいてよくそんなこと言えるよね?」ジャキ

そう言って手に持つてる機銃を曙に向けた

曙「ま！待ってよ！」

霞「……あんたはもう……友達じゃない」

曙「まっ……まっ……」

そうして……撃たれる瞬間

「ぐっ！あああっ!!」

霞「!?提督!？」

俺は、自分でも驚くようなスピードで動いたかと思うと、自然と曙を抱えながらスライディングしていた。もちろん、撃つ瞬間ということもあったのでノー被弾とは行かなかった……2発のうち1発が……俺の腹を貫いていた

「くはああっ！いつてええ!!」

脇腹を抑えながらそんな事を叫ぶ……かぁーマジで痛てえ！

曙「あ！あんた!?!馬鹿なんじゃないの!?!」

霞「提督！なんで庇ったの!?!」

「約束……したからっ……うぐっ！」

霞 「約束って！こいつは提督を！」

「だったら……引き金を引く時に……悲しい顔すんなよ……」

霞 「!!」

俺は見た……曙を助ける際に、目元に涙を浮かべていた霞が……

「悲しむくらいなら……殺そうとするな……よ……おかげで腹に弾痕できるだろうが……」

……

霞 「でも！そいつは提督を!!」

「それでも……この鎮守府の艦娘なんだ……俺ら提督つてのは……艦娘の面倒を見る義

務つてのがある……だから……助ける」

曙 「っっ……」

霞 「だからって！」

「それに俺は言った……お前の……仲間……1人……救えなかったら……自害……するつて

……

霞 「!!」

「だか……ら……破ら……ないっ……て……いった……ろ……」ドサ

目の前がぐわんぐわんする……体が寒い……最後に映ったのは……涙を流しながら俺を呼

ぶ霞と、横で俺に笑顔なのか、それとも悲しみなのか、分からない笑顔を向け、涙を流している曙が映っていた……そうして俺は……意識を手放した

「……………どっだっだっ」

目が覚めると、そこは夕焼け空に近いような場所だった。足元には霧なのか、スモークなのか分からないふわふわとした物体が広がっていた

??? 「きたか……」

そう言い、こちらに振り返る男…白髪のに、左目に大きく出来てる傷跡、それを隠すように眼帯をしており、赤や青、黄色といった混合している目の中、白いコートに包まれて、横には何か缶バッチの様な物に、『元』という文字に金が入ったとても高そうなものを付けている

「……………誰？」

??? 「はっはw確かに自己紹介がまだだったねw私は新郷しんごう 王蛇おうだ……なーに、ただの戦場に散った老いぼれさw」

そう言つて、彼は笑つた………ん？待て？

「戦場で……散つた？」

そのまんまの意味としたら、既に死んでいるということになる……いやでも目の前に確かにその男はいる……

王蛇「言葉通り、私は既に朽ちた身だよwこの体は死ぬ前に、神様という訳分からん男が復元した奴なんだと。正直さっぱりさw」

ごめん、俺もさっぱりだわ

王蛇「それでもつて俺は、ここで管理人をしているんだ……で、私の私情でお前を助けたということになるなw」

し、私情？

「それっていいのか？」

王蛇「ダメに決まつてるだろw死ぬはずだった人間を感情論だけで助けるなどwましてや神に仕える身だw神に逆らうと同じだからなw」

ダメやん……

「でも……どうしてそこまで？はつきり言うが、俺とあんたに接点なんてない気がするん

だが？」

王蛇「はっはっはwそうだねえwでも…一つだけ共通点がある」

「何ですか？」

王蛇「我々が、軍人という事だよ」

そうか…戦場で朽ちたって言ってたもんな…

王蛇「この身を滅ぼしてまで守った大日本帝国…あーいや、日本…なのに、今の社会はどうだ？」

「それは…」

王蛇「やれ、上が不正してるだの。やれ、艦娘を駆使して自分だけ高笑いなど…ふ

ざけるなっ」

「つつ……」

彼がそう言い放った瞬間、ピリピリとした風が頬を伝う…それだけでこの人がどれだけすごい人なのか俺でもわかる…

王蛇「政治の問題はどうでもいい…問題は艦娘だ。私も提督をしていた。立場は違かったがね…今のように、人の姿をしてはいなかった…」

「軍艦……」

元の姿……軍艦での…司令官……っ

王蛇「その通りだ……気を抜けばすぐに命なんてこの世行きさ……なのに……今の軍人は腐っている。自分だけ安全地帯で、艦とは言え、女の子を酷使するっ！男として有るまじき行為！……しかし、私にはそれをどうにかするほどの力など元よりない……」

「……………」

王蛇「でも、そこで君を見つけたんだ。艦娘を人間と同じように接し、軍人達に対して反発を起こす君を……」

「なるほどな……」

王蛇「今後、日本は確実に落ちる。深海棲艦という未知の化け物によってな……しかし、君なら、君のその力なら……この状況を覆せるかもしれない」

「俺の……力？」

王蛇「君も薄々気づいているだろう。急に体が軽くなったり、急に力がみなぎってきたり……それは、提督にとって必要不可欠の物なんだ」

「そ、そうなのか？」

王蛇「元々提督という物は戦闘しつつ部下に指令をする……言わば司令塔と役割だったのだよ。ひとつ違うのは、戦場に身を置か置かないか……それだけの事……でも、提督には不思議な力が備わってる。昔、私達はそれを抗う力……またの名を『オーバーフロー』と……そう呼んでいた」

「オーバーフロー……」

王蛇「絶対的ピンチでも……それを使いこなせれば、チャンスに変わる。ある者は雷のようなジクザクとした歩行と、速度で相手を切り刻み、ある者は、屈強な赤い体で前線を切り開き、またある物は、聡明な策略で相手を騙し、気づかれるまま拠点を奪還した。そんな物が昔、6人いた。」

「なんか……すごい壮大ですね。」

王蛇「嘘だと思うだろう……しかしこれは全て事実……そして、不完全ではあるが……君はそれを使える……一点条件下でだが……」

「俺に……?」

王蛇「……だから、俺は、昔の力をお前に授ける事にしたんだ……お前ならきつと使いこなせる……」

そう言って、右胸についてる缶バッチをこちらに付けてきた

「これは……」

王蛇「餞別さwまだ第一歩を進んだに過ぎないw次会うときは……またお前がレベルアップした時さw」

そう言って、有無も言わずに肩を押されると、ふわりと落ちる感じがした……否、落ちていた



「ほへ？」

王蛇「精々死ぬなよ……お前がこの日本を変えるんだ。俺の力は……速度だ」  
そんな言葉を最後に、俺の視界はまっくらになる……

イケイケのダンディーなおっさんから救われた後説教とか休ませる気ねえーだろ!?

鈴谷「てい……とく……」

あれから数時間、提督は未だに意識を戻していない。ここは病室、そばに居るのは天立や天龍、時雨といった剣術でお世話になった3人。そして、半分秘書である鈴谷。最近よく出入りするようになった江風と山風、そして、霞と曙であった。曙は深く反省しているのか、ずーつと下を向いたままだった

時雨「なんか……言ったらどうなんだい？」

少しキツめの口調で曙に言う時雨。無理はない。この状況にしたのは間違えもなく曙だ。その事を十分に理解してる曙は握りこぶしを作って、その拳の上には数滴の涙が零れ落ちる。

天龍「…泣いたって意味なんかねえーぞ」

天龍は駆逐艦にあまり強く言えない性格なので、優しくめに言うが、怒りが隠せてるわけではない。あまり怒らない天立でさえ

天立「提督さんに何してるっぽい？」

元々数日前までは普通の女の子ぽかった夕立は、少し背が伸び、胸も膨らんでおり、長い金髪の先端は紅くなっていた。後に妖精がこう言葉を漏らす

「改二ズラー」

霞「曙を……責めないでください…わ、私にも非があるから…」

曙の気持ちをやんと理解してなかった霞のせめてもの罪滅ぼしなのだろうと。この時の霞は、曙が解体と命令されたら、自分もするつもりでいた。そんな時だった

「んっ……んんっ……」

「[[[!!]]]]」

「ふわああっ……んんっ?あれ?つてあのクソじじいっ!!」

「[[[!?!]]]]」

「くっそ!言いたいことだけ言って突き落とすやがって!次会ったら千切りピーマンに

してやるぞゴラアア! ってあら? なんでこんなに集まってるの?」

夕立「て……」

「へ?」

夕立「提督ううう!!」ダキ

「うぼわ!! な、何?」

いきなり抱きつかれてびっくりしたんだけど……な、何ですか?

時雨「心配……したんだよ?……提督……良かった……良かった……!」ギユ  
時雨が俺の左手に手を合わせると、そのままぎゅつと握り始めた……あー、そう言え  
や俺死にかけてたな……文字通り三途の川渡りかけてたしな……

山風「パパ……パパアア!」ダキ

夕立が前にいるか知らんけど後ろから抱きついてきた山風……やめろ。なにがとは言  
わんが当たってるぞ! なんて今の雰囲気可言えるほど俺はKYじゃないのでされるが  
ままにしておこう……

江風「良かった……た……本当に……良かった……!」

ポロポロと涙を流してくれる江風……相当心配かけたんだろうな……となると……

鈴谷「でいどぐう!! 無事で良かったよおおお!!」

涙を滝のように流しながら肩にスリスリしてくる鈴谷……この際何も言わないでおこ

う。決してこの状態でお前の泣き顔ブツサイクだなあwなんて言ったら命がまためされる。

天龍 「くそ……あんま心配かけんじゃねえーよ……たくよ……」

そう言いながら目を隠してる天龍。お前そういう所ほんと可愛いよな。なんて口が裂けても言えない。言ったらまたあのダンデーでハードボイルドなイケイケなおっさんに助けられてしまう。しかし、霞や曙からは嬉しさよりも罪悪感の方が多いだろう。よし。この提督さんにおまかせあれ！

「さてっと……まだ所々痛むが……心配をかけたな。すまん」

そう言うと、みんな安心した顔になる……しかしここで際も真面目な鈴谷が話を持ち出してきた。お前さつきまでめちゃくちゃ泣いてたやん。いつキリツとした

鈴谷 「……それで提督。この2人は……」

「っ……」ピクッ

「うん？……うん。そうだね……それじゃ……伝えるよ」

俺は2人に向き直って、言葉を発する。

「それじゃ……まず、霞から」

霞 「っ……は……い……」

相当震えてますね。俺が一体何を命令すると思ってるんだ……まあ俺はナニを命令

した

『だまれ童貞』

(はああっ!?!どどど童貞ちゃうし!ただその……大人の階段登ってねえーだけだし!)

『人はそれを童貞と呼ぶ』

(つつ!!?いいもんいいもん!そんなのなくなつて人生楽しいもん!)

『本音は?』

(こんちくしょう羨ましいなコノヤロウ。爆発させつぞ)

『素直でよろしい』

つと……またバカみたいな会話に花を咲かせてしまった……てか俺があつちに飛ばされてる時こいつ全然喋んなかつたな……まあ……いいか

「……俺の言う事を1回だけ拒否権なしで何でも言う事を聞くこと。それだけでいいや

W」

霞 「ふにやつ!?!//」

なんだいその反応は。まるで俺が変なこと言つたみたいじゃないか。ん?なしてみんなそんなに俺を見るの?へ?俺本当になにかおかしいこと言いました?なんで無言で見てるの?普通に怖いんだけど……

「……異論はないな? W」

霞 「は……はひっ……／＼／＼」

「よろしいw」

何故か下を向いて耳を真つ赤にしてる霞。何を想像しているのだろうか……別によくあるエロ同人みたいな事はしないさ。きつとおそらく。

『する気だろお主』

（ぶっちゃけ肩たたきとか、飯作るとか、そういう系しか考えてなかった）

『変な所で欲がないのなお主……』

（命令してまでシたいとは思わないしな。だいたいそれをしちまったら前任の同じ事してる様なものだ。）

『……ふっwそうかいw』

「んじゃー次、曙な」

つと、そう言うのと曙が下げていた頭を思いつきり上げる。ふむ。しつかり自分が何をしたのか、どれぐらいの事をしたのかってのは分かっているらしい。それに反省の色も見える……もう何言われてもそれを受け入れると顔が語ってる……なーんかなあ……これで罰出すとか俺罪悪感しかないんだけど……いや！心を鬼にするんだ！よし！

「曙……自分が何をしたか……分かってるかい？」

曙 「つつ……はい……わかってます……」





曙 「えっ……え？」 キョロキョロ

曙が周りを確認するようにしているので、俺も周りを確認してみる。鈴谷は口元に手を当ててクスクス笑ってるし、時雨、夕立、江風や山風は何故かニコニコしてて、天龍はニカツと笑っていた。霞に関しては胸に手を当ててニコニコ笑ってた。なんだコイツら。気持ち悪

『おい、気持ち悪いとか思うなよw』

(いやだって何この状況。気持ち悪いやん)

『それだけお前の返答が意味不明ってことじゃなw』

(酷い……)

つと……今は曙の件だな

「で……だ。辛かったのか？」

曙 「えっ……えと……」

「……別に怒ってなんかないよw曙は確かに上司である俺を殴って……殺そうとした。」

曙 「っ！」

「……でも、ちゃんと理由があるんだろ？」

曙 「!!」

「……話してくれないかな？俺さ、要領わりぃーから話してくれなきゃ分からないんだ

よw……だからさ、曙がなんでそうしたかったか……そうしなきゃ行けなかったのか……話してくれないかな？それを聞いた上で……ちゃんとした対応をするからさw」

そう言うのと、曙がパアアッと風にも当たったかのような晴れた顔になったかと思うと、ゆつくりと言葉を紡いでいった

曙「……私……さ……怖かったのよ……一部のみんなが……あんたに……ついて行くのがさ……」

曙「提督なんて生き物は……自分中心的で……欲望的で……頑固で……なんでも自分が優先に考えて……そんな人間に……私の仲間が……友達が……親友が……ついて行って……いつ壊されるんじゃないかって……いつ殺されるんじゃないかって……いつ……捨てられるんじゃないかって……怖くて……恐くて……」

曙「それで……私が助けなきゃって……みんなあいつに騙されてるんだって……だから代わりに私がみんなを救おうって……でも……違った」

「……」

曙「あの時……霞に銃口を向けられて分かった……理解しようとしてなかったのは私なんだって……今までがそうだったように……今回の提督もって……勝手に決めつけて……勝手に暴走して……それで……」

「……………もういい」ギユツ

曙「……………ふえ？」

俺は優しく、それでも強く抱きしめて、曙の頭を撫でていく。

「もういいんだ……………もう分かった……………確かに……………俺も曙に余り関わらなくなったのも悪かった……………俺の悪い癖だ。相手から接してこなければ、接さない……………今回それが、曙の不安を爆発させてしまった……………本当にすまない……………」ギユツ

曙「……………ちがう……………よ……………全部私が……………私がいけなくて……………全部私が……………」ならさ……………え？」

「この件はお互いに半分こにしようぜ！w」

曙「っ!!」

「俺が曙にもっとコンタクトを取らなかつたのが悪かつた。そして曙は、決めつけて行動してしまつた……………形は違えど、お互い、相手のことを知ろうとしなかつた。なら半分こにして、それを解消してけばいいんだよw」

曙「……………私を……………許してくれるの？」

「許すも何も、俺は最初つから曙に対して怒つてはいないよ。曙はあの手しか思いつかなかつた……………みんなを守るためにはね……………でもね、それをするだけで曙は立派なんだ」

曙「私が……………立派……………？」

「ああw俺なんて見てみる。ろくに何も考えないで行き当たりばったりで行動して、んで、異常事態になったらその場で考える…曙は今後の皆の未来も考えて実行した。それは、誰もできると思うが…実はそうではない。曙のが皆を本当に思っているからこそ出来た…曙にしか出来ない強さなんだ」

曙「!!」

「……だから…本当にすまない…俺は曙の事を何も知らなかった…曙はみんなの事を思って行動してくれたのに…俺は曙の事を思って行動しようとも思ってなかった。それは皆にも言える事だ。事件が起きてから俺は動いた…それじゃダメなんだって曙のおかげで気づけた。本当に…ありがとな」ナデナデ

俺は抱きしめながら、頭を撫でる。ぶつちやけ提督嫌い人間にこんな事したらんなもんどOTAMAがポーンっ！って行くと思うが、そうなったら…まあドンマイだ

曙「…私…あんたを殺そうとしたのよ…?」

「それが、曙が考えた最善の策だったんだろ?…良く考えたね」ナデナデ

曙「みんなに…迷惑…かけたんだよ?」

「それはこれから返していけばいいんだよw迷惑をかけたならそれ以上の働きを示す。ここではそうなのだろう?w」ナデナデ

曙「……………わ……………たし……………は……………」ギユッ

「……もう、一人で抱え込まなくていいんだよ」 ナデナデ

曙 「!!」

「ここにいる艦娘の悪い癖だ。なんでも一人で抱え込む癖がある。そうならない為の仲間、提督なのにな……まあその提督が一番そういう原因にさせたんだけど……俺もあまり人の事は言えねえーけどよ………信じろとまでは言わねえーよ……ただ……相談には乗れるからよ……一人であんまり抱え込むなよ」

曙 「っ!」

「俺がここの提督になったからには、ここにいる皆の命を守る義務つてのがある。一人もかけさせやしない。曙、お前もその中にちゃんと含まれてるんだからな?」

曙 「っ!!」

「あまりかかろうとしなかったけど……過去は変えられなくても……未来は……変えられるだろ? だから……さ、俺に最後のチャンスをくれないかな? 曙と仲良くなれるチャンス……さw」

曙 「……さいつ」ムギユツ

「おわつちよつ……急になんだよ?」

曙 「責任……ちゃんとりなさいよ? / /」ムギユツ

「……ああw絶対に守る。それじゃー曙。お前に罰を言い渡す」

曙「……………うん」

「一週間、俺の秘書として任務をまっとうしてくれ。……………できるかな？w」

曙「……………♪…任せなさい！あんたが口だけじゃない人間だと！私に証明しなさい

！」

「……………ふっwお手柔らかに頼むよw曙」

曙「覚悟してなさいよ……………クソ提督♪」

俺の頭の中に住んでるおっさんがロリコンだと確信して  
しまった

曙に秘書を任してからもう1週間はたった。ぶつちやけ期間が来ればすぐに辞めると思っていたのだが、最後の秘書活動の際に、曙に言われた言葉

曙「ねえ、クソ提督」

「ホイホイっと。どしたー?」

書類のカキカキをすませて、今は曙がいれてくれたお茶を飲んでいる。最初の頃はアツアツのお茶を入れてきて、熱に耐えれなくなったコップが割れたっけなwいやー懐かしい。いやまあー1週間前だけど

曙「今日で1週間……私もあんたみたいなクソ提督の傍に居れるのは今日で最後……」

「ん。そうだね。曙はよくやってくれたと思うよ。最初の2日はあれだったけどw」

曙「なっ!?お、思い出させんじやないわよ!クソ提督!」

「へいへいw悪かったよw」

慣れない仕事をさせてる訳だから、そりやもちろんミスだっていっぱい起きる。で

も、曙は元々プライドが高い子らしく、そのミス挽回しようとして、ミスして、それの繰り返し。俺が笑って許してはいたが、いつもくつついてる鈴谷はカンカンしてたな  
w

「本当に、お疲れ様。こうして曙と一緒に時間過ごしてよくわかったことがあるよ。曙はすごく真面目で、思いやりがいい子だったねw」

曙「はあ?! // // わ、私はそんなこと」

「いやw 沢山してくれたさ。些細なことでも、何でもいい。曙のいい所をいっぱい知れたからね。本当に、この一週間お疲れ様」ニコ

曙「つつ………その事………なんだけど……… // //」

「? 何かまだあるのか?」

曙「そ………その………し………仕方がなく! 本当にどうしようも無いクソ提督だから! 私  
がこれからも秘書艦になってあげてもいいのよ!」

『ほう。これが俗に言うツンデレというやつじゃな?』

(ツンが強すぎる気もするがな)

『だかよいではないか! わしはこういうのはタイプじゃぞ?』

(ロリコンガングロジジイ)

『変なあだ名をつけるでない!』



つても確かにこいつはツンデレだな。自分は自覚してないっぽいけど、言動や行動がまるつきりそれだ。それに、正論を重ねまくると素直になるのは、曙特有だろう。ここ一週間で曙の事はよく理解したつもりだ。今回も同じように虐めてみようw

「……………曙」

曙「!?な、何このクソ提督!」

「素直になつたらどうだ?」

曙「っ!?べ!別に私は本当の事を!」

「嘘だなw素直になれよw離れるのが寂しいんです、これからもそばにいさせて下さいってなw」

曙「っ!?／／だ!誰がそんな事!」

「本当にいいのかな? w今だけだよ? w」

曙「っつ……………だ!だれ……………が……………っ!」

「……………曙?」ニコ

曙「っつ!?／／／／／!」

「素直になつて……………いいんだよ?」ニコ

大抵こう言えば素直になる。つてツンデレ評論家が言つてた。いや誰やねん

曙「……………さい……………」

「へ？なんて？」

曙 「……私を…提督の傍に…いさせて下さい……／＼／」

「理由は？」

曙 「もつと……もつと提督の事…知りたい…一緒にいたい……だから……」

「素直でよろしいw」 ナデナデ

曙 「つつ……／＼／＼／」

「でも、秘書艦は無理だな。やかましい奴がいるからw」

鈴谷とか鈴谷とか鈴谷とかね。ただでさえこの一週間曙ばつか構ってたせいか機嫌が悪いというのに

曙 「そーそれじゃ私は……」

「そんなしよぼくれるなってw何も俺との交流は秘書艦だけとは限らないだろ？」 ナデ

ナデ

曙 「つ……じゃー……」

「いつでも遊びに来いよw待つてるぜw」

曙 「!!／／／」

「仕事だけが関わりじゃない。プライベートであったり、暇つぶし相手になったり…きっかけは沢山ある。だから暇つぶしここに来ればいいさw」

曙「で……でも……仕事の邪魔に……」

「何言ってるんだw提督の仕事は何も書類整理だけじゃねえよ。こうして、曙や他の艦とのコミュニケーションも立派な提督の仕事なんだwだから遠慮せずに遊びに来なwそんな時は人生ゲームでもトランプでも付き合ってるよw」ナデナデ

曙「つ……うんっ♪……分かった……♪……っ！頭撫でんじやないわよ！クソ提督！！」パシン

「あいてw……ほら、もう勤務時間は終了だw帰った帰ったーw」

曙「っ！何よこのクソ提督！もう知らない！」バンツ

「……ドアぶっ壊れてない？大丈夫？」

なんかすっごい勢いで閉めて言ったな。バンというかバキって音聞こえたんだけど。

え？大丈夫？俺の扉

『少なくとも骨組みの何個かは大破したじやろうな』

（なんで艦これ風に言うんだよ……てか毎日書類書いてるけどこれもう提出期限過ぎてるけど書いてる意味あるのか？）

『意味あるじやろ。書いてる内容はほとんど前任の戦い記録じゃ。自然と戦術ややり方は覚えてくるじやろ？』

（駆逐艦を囿らせた戦艦での一斉射撃。駆逐艦に人権がない戦法を学びたいとは思わ

ないけどな)

『……すまん。もつと考えて発言すれば良かったな』

(いいよ。そのお陰で駆逐艦の運用法は沢山出たし)

『ほへ? そうなのかえ?』

(ああ。まずは遠征。これは機動力が高い駆逐艦が最善だ。それに軽巡洋艦や重巡洋艦を1人か2人パーティーに入れば、その1人がお姉さんのな役割になってくれるし、何しろ心強くなる。それに火力も引けを取らなくなるからな。万が一敵会しても、ある程度持つてる資材を捨てれば戦闘には遅れを取らない。それぐらいここの鎮守府は強い)

『……よく、そこまでの情報量を資料だけで取れたな』

(やると決めたらとことんやる。それが俺だからな。)

『そうじゃったなw』

ガチャ

『ん……?』

扉が空いたと思ったら、ドアの半分から少し赤い顔を出して来た曙

曙「……また、明日ね……おやすみなさい……/ /」パタン

そうして次は優しくドアを閉めた曙

「……なあーじいさん。ひとつ言っただいいか？」

『……なんじゃ？』

「艦娘って生き物はなんでああも全員純粹で可愛いんだ？」

『ワシにもわからん…思わず頬がゆるんでしまった』

「キモイ」

『キモイ言うな』

「んー……んんー……」 カキカキ

鈴谷「さっきからうるさい……何ずっと唸ってるのよ……」 カキカキ

「なあー鈴谷さんや。毎日毎日カキカキしてる俺が言うのも何だけどさ……くっそ暇!!」カキカキ

毎日毎日提出期限が切れた紙ゴミを整理する日々! 飽きた! 飽きたアアつつ!!

鈴谷「……………」ジトオオ

「なんだその顔わアアつつ!! まるで俺がダダをこねるガキみたいじゃねえかよおつ!」

『事実今のお前はまるで駄々をこねるガキやぞ』

(うっせええわ! まじひまなんだよああんっ!?)

鈴谷「……………あのさ、前から思ってることなただけどさ」

「おうなんだ言ってみてくれ」

鈴谷「提出期限切れてるんだからわざわざ書いて整理する必要ないんじゃない?」

……………

「そうじゃんつつ!!」

『お主馬鹿じゃろ』

「いやー悪いな2人とも。手伝わせちまって。せつかくのオフなのに」

天龍 「良いって！オレはあんたに返せねえー恩があんだ！こういう時、いや、何時でもオレを頼ってくれよな！」

「ありがとうな天龍。響もわりいな？稽古の練習邪魔しちまって」

響 「ハラシヨ。問題ないよ」

「ハラ……え？」

『ハラシヨ。ロシア語の形容詞ハローシイ(хороший、「良い、偉大な、仲の良い、可愛らしい、素敵な、(時に皮肉をこめて)結構な」)の中性形呼格。形容詞の中

性形は副詞にもなる為、幅広く賞賛を表す感嘆語として用いられる。なお、口語では「了解」「分かった」くらいの意味にも使う。要は相槌じゃね？」

(相槌は分かったが、どこのサイトから持ってきたそれ)

『偉大な Wikipedia 大先生』

(偉大だな、Wikipedia)

Wikipedia 先生に敬意を表してる現在、鈴谷に言われた衝撃な新事実

『(ペラペラ) ね。紙だけに』

(黙れ)

新事実に驚愕して腰抜かして頭をブリッジしながら打ち付けたあと

『正確には腰抜けて椅子に座っただけどね』

(そこら辺は面白くするのがギャグフィッシュの俺やねん)

『お前釣りしたことないだろ』

(吊りはしたことあるけどね)

『(へへへへへw)』

(やかましいわ)

『乗ってやったのに………』



まあ、書類を持って外に出ている時、たまたま散歩してた天龍に話しかけられて、そんなときに

「焼却炉ってどこだ？」

天龍 「焼つ?!……あー、それ燃やしに行くのか？」

「そーそー。ついでに暇なヤツいたら誘つといてくんね？」

天龍 「なら響だな。あいつ悔しくてあれからずっと素振りやら、自主練やら折り込んでいるしな。日々時雨の研鑽し合ってるぜ？」

「どおりでここの『一応』提督やつてるの俺が重症で目を覚まさなかつた時も駆けつけなかつたわけか」

天龍 「一応を強調すんじゃないよw……でも、あの子の響は可愛かつたろ？w」

「そりゃーもちろん。天使だと思つたね」

天龍 「あははwそれじゃー私も手伝うかね。響も誘つとくから早く終わるぜ！」  
「あー頼んだ！」

と、2人に協力してもらつて紙を燃やしたのさ！あ、ちなみにその時にちょー気まぐれ妖精さん（自称）が数名俺の所に来て

（これ、全部使わない？）

「うん。使わないよ。何かに使うのか？」

「こんだけのゴミがあつたら……そうだね……2万ぐらいかなあ……」

「？何の話だ？」

「私達つて特殊な妖精さんでね？普通の妖精が出来ないことを私達なら出来るの。まあー私達よりも凄い妖精さんがここには何十人もいるから私たちが霞んじやつてるんだけど……」

「まず妖精さんの基準値がわからねえーからな……んでも、そんな特殊な妖精さんがこのゴミを何に変えるんだい？」

「資材だね。鉄や弾薬は無理だけど、燃料とボーキになら……これだけの数だと2万ずつ増やせるよ。明日には倉庫に運べるかな」

「お願いできるかな？出来ればいいんだけどね」

「任せて！提督さんの力になりたいからさ！」

「俺はもう十分君たちに助けられてるけどねw……うん分かった！それじゃー君達にその命令をしようかな！報酬は金平糖1袋！しかも業務用だ！」

「ラジャー！」

「頑張りますっ！」

「運べ運べー！」

〔それじゃ、出来たら紙に書いて机に置いてくね。〕

「おう。……ありがとね」

〔ふふっ。大丈夫だよ♪〕 ニコ

そういつて、大量のゴミを妖精さんは持つていった。

天龍「な、なあ提督……もしかして妖精の言葉が分かんのか……?」

「ん?普通に喋つてんだから分かるだろ。」

響「……普通の人は、妖精さんの声は聞こえない。私達だつて聞こえる人は少ない

よ。唯一会話できるのは空母や軽空母とかだよ?」

「んー……でも俺は普通に聞こえるしな……」

天龍「ち、ちなみになんて言つてたんだ?」

「んあ?ああ、あのゴミは私達で資材に変えちゃうけど問題ない?つて聞かれたから、資

材にしちやつていいよつて」

天龍「資材に!?あんなゴミがか!?!」

「何でも特殊な妖精さんなんだと。彼女らが稀と自分から言つてたのに、ここにはそんな稀な妖精さんがわんさかいるんだと」

天龍「は……はは……信じられねえ……つい1か月前までは無能にこき使われて、妖精の存在をおとぎ話としか思つてなかつたのに……それも特殊個体……1つの鎮守府に1

人いたら戦力が倍なようなもんな存在がここの鎮守府に何十人も……はは……」ド  
ヨーン

「なあなあ響。あれは大丈夫な人なのか？」

響 「正直大丈夫じゃないね。私も正直驚いてるから」

「そか？にしては顔色ひとつ変えてねえーけど」

響 「私は表に感情が出にくいだよ」

「ふーん」ガシ

響 「な……なに……？」

俺は響の肩に手を置いて、目線を合わせてジッと見つめる。

「……………」ジーツ

響 「あ、あの……提督？な、何してるの？」

「響を見つめてる。」ジーツ

響 「そ、それは見てわかるよ。な、何故に私を見てるのかって」

「響、綺麗だぞ」

響 「はひっ!?!//////」カアアツ

「なんだ。ちゃんと感情柔らかいじゃねえーか」

響 「そ、そんな事のために!?!//////」

「そんな事のために響を見つめてたWいやーいいもの見れたWあばよーW……あべしっ!!」

なんか頭にとんでもねえーの飛んできた気がするんだけど  
「てえ!なにしゃがんだ!」

響 「提督のせいだから!／／このバカバカア!／／」

「んだと馬鹿だど!?!その通りじゃないか」 キリ

響 「本当にブレないね提督は……」

「ブレたら負けだと思ってる」 キリ

天龍 「………あっ!なあなあ!提督!食堂行こうぜ!」

響&俺 「あ、復活した」

天龍 「あん?何の話だ?ってんな事より食堂行こうぜ!食堂!さあー行くぞー!」  
つと歩いていった。

「これ俺Uターンして提督室に帰ったらどうなるかな」 スタスタ

響 「恐らく顔真っ赤にして飛び蹴りしに行くと思うよ」 スタスタ

「うわおう…天龍が真っ赤になった顔を見たいが飛び蹴り飛んでくるならやめた方がいいな。んじゃ行くか」

響 「相変わらずむっつりだね提督は……」

そう言いながらも俺の斜め後ろをちよこちよここと着いてくる響に少しほっこりしながら食堂に向かった

やっぱり食堂と言ったらカレーだよな！え？そんな事よ  
り雑談だど!?

天龍 「ほら！早く早く！」

「分かったw分かったからあんま急かすなってw」

食堂の入口に手をかけてる天龍……その姿は娘がお父さんに早く早く急かしてるの  
とまるで同じ光景……

『まるでてんりゆうだな』

(それバカにしてね？w)

『ま、まさか』

「おうそうだな」

『聞けよ』

響 「……提督は何食べるの？」

「んー？何があるか分からないからな……こつちに来てからはみんなに迷惑や不安を抱  
かせないように、部屋で食ってたからな」

響 「やっぱり提督は優しいね……」

「だろ?もつと褒めてもええんやで?」

響「そういう所も好きだよ」

「自分に素直なところか?俺もそう言ってくれる響が大好きさ☆」

響「……うん♪……ありがとう……♪」

つと、響とそんな会話をしていたら、いつの間にか食堂についていた。中はとても綺麗な白で、テーブルや椅子も白で統一してあった。窓ガラスからは海の景色が見え、とても綺麗な場所だ。

「なんか……すっげえー綺麗だな」

天龍「これも全部提督のお陰なんだぜ!」

「そうなのか?」

横にたつて肩を組んできた天龍に聞いてみる。

天龍「ああ!……元々ここは食堂って言えるほど綺麗でもなかった。カビは生えてるし、湿気もすごくて、床も壁も黄ばんで……とても今みたいに居心地は良くなかったぜ」  
「んー?じゃーなんで今はこんなに綺麗なんだ?」

天龍「……提督がこの鎮守府に来た時に言っただろ?妖精さんって人達が頑張るって言っただけだ」

「んあ?……ああ。んでもあれは風呂だけって言っただぞ?」



天龍「やつぱりw提督についてる妖精さんもあんたの事が好きなようだw」  
「は？……へ？どういうことだ？」

天龍「普通、妖精つてのは気まぐれなんだ。気まぐれに現れて、気まぐれに離れていく。たまに気に入ったやつがいれば、その場に住み着く。んでも、一生ではねえーけだな。」

「…それになんの意味があるんだ？」

天龍「自発的に人に、あれして来るって事を言わないんだ」

「そうなのか……てか自分からしてくるって言うてきたのは風呂だけでここの事とかマジで知らんぞ俺」

天龍「それが妖精さんに好かれてるもうひとつのポイントなんだwその時、たまたま空母の何人かが聞いてた事なんだけどな？そんときの妖精さん達は、こう言うてたらしいぜ。『暇になっちゃったからついでに食堂も手直ししよう』ってね」

「ほへー……こりやー日頃の感謝も込めて金平糖たらふくあげなきな……」

天龍「それにつけ加えてこうも言うてたぜ。『提督さん、喜んで貰えるかな♪』つてさw」

「………はあー……いかんね……俺は支えられてばかりだwまさか妖精さんにも知らないうちに助けられて、支えられてたとわね……こりやーちゃんとお礼をした方がいいな」

W 離れないためでもなく、働いてくれた報酬でもなく、俺個人からの感謝の気持ちさを  
W」

天龍 「……ああ!そういう事を考えてくれるから、オレらもあんに、提督について  
行くのさ!これからもそんな感じで頼むぜ?」

「……ふつ W 上官に大して舐めた口を聞きすぎだ W」 ナデナデ

天龍 「……♪へへっ!どこのどいつが上官だっつーの♪」

……あれ?叩かれない:いつもなら叩いてくるのに:

「……ふつ W それもそうだな W」 ナデナデ

天龍 「……へへっ♪そうだぜ!♪」

つと、食堂に来てた本来の目的を忘れてたぜ……俺とした事が!くっ!

『見てみてー、あそこに食堂をお喋りばだと思ってる陰キヤが居るよー』

(やかましいわ!てか陰キヤって言うなあ!結構傷つくんだぞ!)

『すまんすまん W……で?天龍はどうじゃ?』

(……あー……あんたがそう言うことは……やっぱり天龍にも心境の変化、もしくは

俺に対する態度変わった……とか?)

『おっ?よく気づいたのう』

(流石にこれが3回目だもんな……嫌でもわかる)

『……はて？ワシがお主にいつ助言したかのう？』

(とぼけんなじじいコノヤロウ……一回目は鈴谷、2回目は霞。んでもって今は天龍……心境の変化か俺に対する態度を変えた時、表した時、表す瞬間に、あんたは何らかのヒント、もしくはイタズラ混じりの提案をしてくる……そうだろ?)

『ワシには覚えがないのう……なんの事じゃか……はあ……歳はとりたくないものじやの  
』

(うっせw……いつもありがとな)

『……なんじや急に……気持ち悪い』

(ただの気まぐれさw)

『……まあー感謝されるのは悪い気持ちではないがの』

(そりやよかつたwロリエロガングロじいーさん)

『おい待て撤回させろ！やつばお主最低じゃろ!』

(へへw俺が真面目話で終わると思つたか?w)

『つつ……お主と言うやつは本当に……』

さて、俺の気持ちと爺さんをいつも通り弄んだところで現実世界に意識を戻す。食堂は食券タイプらしいので、俺はカレーライスを頼む。天龍は天そば、響は……うん。なんかすつごいからそうなやつ。

間宮「はい。カレーライスうっ!?」

なんか俺と目を合わせた瞬間に目を丸くさせて、変な声出したぞ?

「おっ、なんやかんやちゃんと役割してくれてるw助かるわあ」

間宮「て、ててて!提督!?!…あっ!?!それ!返して!」

つと、俺のトレイを奪い取ろうとしてくるが、ひよひよいとかわす。

「やーだよwせっかくこんな美味そうなカレーなんだw奪われるなんてゴメンだねw」

間宮「違うんです!そ、それは他の子達と同じ奴で!」

「なんだ?そんなめんどくさい仕組みにしてるのか?いいじゃねえーかwカレーライスはカレーライスでひとつにしてよwんじやwあばよーw」

つと、スタスタとその場を離れる。先に席に座ってた響達に合流する

天龍「あはは…提督は相変わらずだなw」

「なんだ人をトラブルメイカーみたいにwてか提督と艦娘でわけないでいいと思うんだけどな?手間が増えるし、何しろめんどくさいしな。」

響「…なんも思わないの?」

「何がだ?」

響「…艦娘が…作ってる料理なんだよ?」

「うん?そんなの毎日食ってるから気にしねえーつて。そもそも毎日食っても気にし

ないってw」

天龍 「あんっ!?! 毎日だア!?! 提督! 誰に作ってもらってんだ!?!」

「へ? 鈴谷だけど…え? なんで?」

天龍 「つつ?!? …… だあー …… くそ ……」

「え?」

響 「…てっつきり私は自炊してるのかと…」

「いやな? 俺も最初はそうしてただけどな? パク。鈴谷が急に作り始めるとか言ってる」

カレライスを口に頬張りながら話を続ける。

間宮 「はああっ!?!」

響 「…それはまた…なんで?」

「さあ? なんかウキウキで作ってるぞ? 鼻歌までしてるしな。」

響 「…前クツキーを焼いたことがあるんだ」

「へー。それは気分転換にか?」

響 「うん…まあー前任にバレて殴られたけどね…」兵器は兵器らしく大人しくしてろ

「! …… ってね」

「つくづくひでえー奴だ。料理をして何が悪いと言うんだ…今の時代、AIで飯作るのもざらだつてとによ。」

響「……………提督は…:さ。」

「うん?」

響「もし…もしだよ?私がクッキーを作ったら…:さ。食べてくれる?」

「……………何言つてんだ!そりや食うだろ!w嬉しいからな!w」

響「!!……………今度…:焼いてみるね…:♪」

「おう!そんなときまで楽しみに待つてるよ!」

響「……………うんっ…:♪」

なんだ、やっぱり女の子じゃないか。兵器だとか道具だとか、それ以前にこの子達には意思があるんだ。心があるんだ。まずそこを見て、向き合っていかなきゃなんの意味にもならんだろうに…:こりやーあのダンディー爺さんがつかつかするわ…:

? 「ここにいたアアアっ!!」バンッ

「「へ?」」

なんか急に食堂の扉をバンッって叩いて現れたのは曙だった。俺に指を突き立てたか

と思うと、俺の方にグイグイ歩いてくると、俺の座ってる机をバンッと叩く。

「こんなにちわ。どつたん？気が荒いぜ？」

曙「どつたん？じゃないわよ!!また明日ねって言ったよね!!」

「うん。言ってたね。良かったじゃん。あえて」

曙「他人事みたいに!!……もうもう!!」

若干キャラ崩壊してますねこの子。まあー既にキャラ崩壊してる子いるから気にならないけど……

霞「へっくち!」

夕立「どうしたっぽい？風邪でもひいたっぽい？」

霞「……これは……あーそういうこと……」

夕立「？」

霞「ごめんごめんw気にしないでwどつかのクズが私の噂をただけだからw」

夕立「提督さんの事っぽい?」

霞「……勘……だけどね……♪」

「おおっ……なんか急に寒気が……」ブルブル

曙「ちよつと?ちゃんと話聞いている?」

「聞いている聞いている。それで?冷蔵庫の中身が全部パピコになってて冷凍庫に入れてよ!……って叫んでからなんて言った?」

曙「ぜんっぜん話聞いてないじゃない!?舐めてんの!?!」

アベシ

現在俺は、3人と飯を食っていた時に、突風のように現れた曙にカレーをそのままに手を引つ張られて言ったので天龍たちに「俺のカレー食つといてねー」つと大声出して連行されて、ここ、俺の家、あーじゃなかった、提督事務室てか名前長えーな。まあー



いつもの場所に連れてこられ、ソファーに座らされ、手早く曙がお茶と和菓子を揃えて俺の隣に座つてる状況だ。

しかしまあ一週間秘書やってただけあるな。元々この子達は容量がいい子ばかりだからな。いやまあこれは俺の関わつてる艦娘にしか言えない事なんだけど、まだまだ俺の知らない艦娘達は鎮守府内にゴロゴロしてる。んでもまあ：教えた事は何でも短時間でこなせちゃうし、料理も教えれば直ぐに出来る子ばかりなんだよな…

「……なあー曙」

曙「何？なんか文句でもある訳？」

「…いや、曙は俺と一緒に楽しいのになつて」

今ふと思つた。元々俺は普通の人間で普通の生活をしてたから、あのダンディーなイケメンに付けられたこの金パッチやら、特殊な能力やら、それがいまちパツとしない。確かに以前に比べて体が少し軽いのと、息切れがしなくなつたぐらいで、特別な実感はまだまだ全然だ。：そんなよく分からない人間のそばにいて、皆は楽しめてるのかな

曙「は？………はあー…いい？何も理解してないようだから言つとくけど、私はこれでもクソ提督のあんたに感謝してるのよ？最初は確かに恨んでたし、殺そうともしたけど。私が思つてるような人間じゃなかった」

ニコツツ笑つて、そのまま言葉を紡いで言つた

曙「何もかもが新鮮で、私がハマしても怒るわけでもなく、殴る訳でもない。ヘラヘラしながら笑ってるアンタと、逆にカッカツしてる周りのみんな。それを諫めたり、時に笑ったりするあんた…以前よりも少し…ううん。だいぶみんなの感情がよく分かるのよ。全部あんたのお陰だわ」

「あはは…：…なんか照れくさいなw俺はただの一般人で君達が嫌いな提督なのになw」

曙「むしろ一般人だから、救えたんじゃないの?」

「んー?どういう事?」

曙「元々提督って生き物は、特別な能力を判断基準にして、ある程度ランク分けをされるって聞いた事があるわ。そして教育…その教育には私らを人間扱いする説明はない。元より兵器、道具としての使い方だけを教える…みたいな感じね」

「……」

曙「…でもあんたは、私達をまず人として見て、その次に艦としてみてくれる。だから人として接して…海の上では艦として接してくれる。そんな人だからこそ、私や、あんたの周りにいる子達はあんたについてくるんだと思う」

「まっwそう聞くと俺は大したこととしてないって事だなw皆には助けて貰ってばっかりだし、俺はからつきしだしw…：…んまあ、俺はここに來れて良かったって思ってるよ」

w

曙「……?」

「分からないって顔だなw…俺がのほーんと実家で暮らしてたら分からない事を、ここで沢山学べた。ぶっちゃけ提督ってのは、俺も最初は女の子とキャツキャツうふふ出来るって聞いたからなつたんだ。んでも現状を知って、ここがどういう所か知っていくうちに思ったんだ。…あー、この子達にはもつと幸せになつて欲しい。いや、幸せになつてもらわなきゃダメだ……つてねw」

曙「……」

「だから俺はこうして、逃げ症な俺はここに今も居る。他でもない、ここにいるみんなが笑顔に笑つて、誰一人も沈めずに、笑つて帰れる場所に…そんな場所にしたいから、今も頑張つてる。今はダメでも、1年後…5年後…10年後…そんなときには結果が変わつてるかもしれない。そんな未来のために、俺は今も頑張れるwそんな夢物語を、俺は叶えたいと思つてるんだw」

曙「……え…えへへ…そつか…それなら私らも黙つて後ろをついて行くだけじゃダメよね…覚悟してなさい?今のままのクソ提督なら、私達が先にずつと進んでいっちゃうんだから!」

「ああw俺も死ぬ気で走つて追いつくつもりさw」

曙 「そっか……♪……ねえークソ提督……」

「ん?」

曙 「!……もし……この戦争が終わったらさ……私の事……」

「「「ちよつとまつたああ!」」」 バンツ

曙 「ふえ?……!?あ、あんたたちいつから!?!/ /」

「おお。よおー。茶でも飲むか?w」

鈴谷 「ちよつと曙!!さっきの何よ!?!」

曙 「へっ!?!/ /いや!それはその!」

霞 「抜けがけなんて許さないわよ!?!分かってるんでしようね!?!」

曙 「ぬ!抜けがけなんて!あ、あたしはクソ提督のことなんて!」

夕立 「それでも今のムードはそれにしか聞こえないっばい!!提督はみんなの提督っばい!!」

時雨 「夕立の言う通りだ。……それに……1人だけなんてそんなのズルくないかい?」

曙 「い!いや!私は!」

「……」 ニコ

賑やかなのは嫌いだ。自分が居なくても、周りが盛り上がるから……自分はいない方がいいと思ってしまうから。でも今は……

鈴谷「ちよつと!?!笑ってる場合じゃないですよ提督!これはあたし達にとって大事な話中なんですから!」

夕立「そうっばい!提督さんは耳を塞ぐっばい!」

みんなが笑つて、怒つて、どうでもいい事で笑いあつて、それを見てる自分が、どうにもどうにも嬉しくて楽しくて…どうしようもない

「うっしwとりあえずお茶出すからwそれから話をすればいいじゃんかw」

天龍「ういーす…おっ?wなんかおもしろいこになつてんな?w」

響「提督…大丈夫…?」ヒョコ

「おっ…2人も混ぜられ混ぜられ!面白事が起きるぜ!」

曙「ちよつ!?!//」

俺は、まだまだみんなのこと知らないし、理解できないけど

鈴谷「……さあ!曙!」

夕立「私たちと勝負っばい!」

天龍「だはは!!やれやれ!」

時雨「僕が審判を努めようw」

曙「ちよっ!?!あんた達ねえ!?!」

霞「何ぼさっとしてるの!?!はやくクズも来なさい!」

「へいへいw」

響「面白そう」チョコチョコ

みんなの笑顔を絶やさないことが、はつきりと分かる。そんな気がするw

『……………これからじゃぞ？……本当に大変なのは……のう？』

どいつもこいつもネガティブすぎい!!砂糖貰っていいっすか?

「……………んでむつつりさん」

陸奥「陸奥だ」

「え?むつちり?」

陸奥「む!っ!だ!!」

現在、俺は椅子に座りながら、いきなりコンコンしてきた陸奥を虐めてるところだ。え?あー大丈夫。後ろでしっかり俺の頭をがっちり捕まえてる山風と鈴谷が居るからうん。全くもって大丈夫じゃないな。凄い俺の頭からなつては行けない音が聞こえる。なんかメキメキって聞こえる。

『その後…彼の頭部を見たものはいない』

(勝手に碎くな勝手に殺すな)

『にしてもお前の頭部は丈夫じゃの……陸とはいえ、艦娘じゃぞ?』

(まず陸とかこいつらに関係あるのか?陸での基本訓練を入れてるこいつらに)



『なかつたわ』

(でしようね)

剣道組以外にも、最近は他の艦の子達も陸訓練を取りえてるようだ。ちなみに山風と江風はサッカーしてる。ま、まあ遊びも立派な訓練ですから。ちなみに曙と霞でキヤツチボールしてるのを見かけて、何してるの？と聞いたところ

霞「なにつて…訓練よ」

曙「見て分からないの？遊んでるのよ」

つと言われた。とりあえず曙には嘘を吐くという事を教えたい。霞がわざわざ嘘ついた意味ないやん。顔真っ赤にして俺に豪速球投げてきたからね？危うく頭部に当たって脳震盪起こす所だったわ。てか俺頭運なくね？今も頭蓋骨悲鳴あげてるし

「えーとだね、それで？陸奥さん、なんか御用で？」

そういえや弄ってるだけで肝心な内容を聞いてなかつたわ。あれ？これワンチャンセクハラでは？

『セクハラだな』

(でーすよね)

陸奥「……一部の艦が言うように……提督は相当自由人なのですね……」

「は？俺が自由じゃなかった時なんてなかったような……」

陸奥「そうですね……いきなり自己紹介をすと言って集めたり……そうだと思いますたら風呂とか、自室が綺麗になったり……本当自由でしたね」

「そうだろうそうだろう！ま、一応陸奥とは初対面な訳だしね、礼儀は必要だろう。」

山風「初対面相手にいきなりむっつり言い出すのはパパぐらいだと思う」

鈴谷「ついでにむっつりもね」

「……あのですね2人とも？そろそろ俺の頭から手を離してくれませんか？俺の頭が破裂しないうちに」

山風&鈴谷「ならいつその事……破裂させろ？」

「何恐ろしいこと言ってるの!？」

つと、渋々と言った感じで手を退けてくれる。いやなんでそんな微妙な顔しながら手をどけんねん。普通違うだろ。いやてか普通は頭を砕く勢いで頭を握らないからね？常識的に！

陸奥「えと……」

「あーごめんごめん。この2人の事は気にしなくていいからね。ね？」

山風「それは無いんじゃないかなあ……パパ？」グギギ

鈴谷 「どういう事ですか？それは……」グギギ

「あいたたた。痛い痛いから。離せっていだだだ!!なんで力強くするの!?!痛いから!マジで!ほんと!マジで!いでで!!」

とりあえず2人を引き剥がして、手足縛って、口縛って、部屋の端っこに正座させておく。とりま紙にペンで『私は提督に反抗したので罰を受けています』と書いて、降ろしておこう。タコ糸でいいかな

陸奥 「い、いいのか?その……」

「いいのいいの。こうしても許してくれるし、何なら喜んでるから。」

陸奥 「そうなのか!?!」

「うん。多分。恐らく。きつと」

陸奥 「ダメじゃないのか……?それは……」

「いや現にほら、さつきより暴れてないでしょ?」

本当に先程より全然動かない。いやてかビクともしない。てかなんで2人ともそんな火照った顔こちらに向けてんの?何?マゾなの?マゾっちゃってんの?気にしない

でおい

陸奥「て、提督? 私の目がおかしいのか? どこか2人の顔が赤くなってるように見えるのだが」

「気の所為だ。」

陸奥「だ、だが」

「気の所為だ」 ナデナデ

とりあえず2人の頭を撫でておく。よし。これで解決。

陸奥「あの………2人の体がビクビクと痙攣してるように見える気がするのだが」

「気の所為だ」 メツムリ

陸奥「いや、前……前を見ろ。目を瞑ってるんじゃないやなくて……」

「気の所為だと言ってらるだろおおい!」

陸奥「は、はいいいっ!」

とりあえずお茶を準備して、前に出す。一応せんべいも置いておこう。

「ほい。どーぞ」

陸奥「あ、ありがとうございます……そ、それで提督……」

「お話だね。うん。何かな?」

陸奥「私を……」

「うん」

陸奥「……………私を……」

「うん？」

陸奥「……………解体……………して欲しいのです」

「……………陸奥」

陸奥「……………はい」

「かいたいってなんだ？」

陸奥「ズコーー!!」

「いやーわりいーわりいー。その何だ？かいたいってのか？それは何か艦娘に利益があるのか？俺はそこら辺の事はからつきしでな」

艦これ自体は知ってても、俺はゲーム自体やアニメ自体を知らないんだ。解体などと言われても、わからん。マジで基礎的な知識しか知らない。え？解体も基礎的な知識なの!？俺が知らないから基礎じゃねえーな（暴論）

それから、陸奥から解体の事を聞いていく。つまり手っ取り早く言う……

「私を殺してくれという事か？」

陸奥「……………」コク

陸奥はゆつくりと、首をうなづいた。…………なら答えは簡単だな。

「…………嫌だね」

陸奥「ーわ、私は！」

「理由はどうであれ！俺は艦娘を解体する気はねえ。本人がどれだけ許可しようともな」

陸奥「!!私はまだ！疲れたんです!!」

「……………」

陸奥「毎日毎日…………最前線で戦って…休みもなくて…………最近、むしろ休みの方が多いいですが…………どうせまた…また同じ繰り返しで最前線で戦って…………仲間を…………皆を……………」

「あー、なんかわからんから、一応言つとくけど…………別に皆を酷使しようとはサラツサラ思つてねえーよ?」

陸奥「…………え…い、いやしかし！提督は」

「?階級と勲章の事か?いらんいらん、そんなもんより守りたいものがあるからな」

陸奥「そ、それは……………」

「てめえーらの命。俺は勲章よりも、階級よりも、そんな事よりもお前ら、艦娘の命が最優先だ」

陸奥「!!」

「それに、今後の事はまだ分からねえーし、固まってもいねえーけど、防衛がメインになる。アホみたいに最前線に凸る程効率が悪いもんはねえ。それに、最前線ばつか突き進んでも、防衛が追いつかなきゃ開拓していく意味が無い。……つてのは建前で、実際は俺がめんどくせえーってだけなんだけど」

ニコツと笑って、陸奥を見る。

「俺はな、勲章何てもの必要としてない。階級なんてものも別にいらぬ。必要なのは、ここの子達が、笑顔で帰れる場所を作りたい。ただそれだけなんだよ。皆の笑顔が見ればそれでいい。誰一人かけないで、平和な世界を築く。新米の俺に出来るなんて到底思つてねえ。それに、俺じゃなくても役割を果たせるやつはいくらでもいるんだ。俺らが焦る必要はねえ。着実に、1歩ずつ進めればそれでいいんだ」

陸奥「わた…わたしは……」

「だから陸奥、そんな夢物語を完成させるには、陸奥も必要なんだ」ニコ

陸奥「!!」

「陸奥が居なくなるだけで、俺の誰一人もかけないと言う夢が途絶えてしまう。……だ

から、死にたいなんて言うなよ。辛いなら言うてくれ、愚痴なら聞いてやる。疲れたなら言うてくれ、すぐに休ませる。そうやって支え合つて……この鎮守みんなで、明るく馬鹿みたいに騒げる場所を作りたいんだ」ニコ

陸奥「……………」

「…………えと…何か言うてくれない?一人で語つてる変人だと思われちゃうんだけど…………」

陸奥「…………絶対よ」

「へ?」

陸奥「絶対…成功させなさいよ?…………裏切るんじや…ないわよ?」

「…………もちろん。自分の言葉には嘘をつかないさ」

陸奥「…………ふつ、それならいい。」

そう言うて、清々しく立ち上がった。陸奥

「…………悩みは解決出来たかな?」

陸奥「…まあ…私が思っていたのと180度違つてはいたがな」

「それもはや回れ右してね?意味あんのか?」

陸奥「ふふつ…意味はあるだろう。…………少なくとも、私は提督の言葉で救われたよ。」



「……そつか。ならよかったよ！」

陸奥「ああ。噂通りの男で…私も安心したよ」

「おう？そつか！」

陸奥「うん！それではまたな！提督！」

「おう！いつでも遊びに来な！」

陸奥「……………うむ…♪」

そう言っ出ていった。

「さてっと。」

鈴谷「んふっ……………んんっ……………」

山風「んっ……………んんんっ……………」

「こいつらの処理どうすつかな……………あ！そうだ！困った時の天龍だな！」

天龍「……で、提督、これはどういうことだ?」

つと、縛ってる鈴谷達を指さす。

「大人しくしてくれなかったから縛って撫でて放置した。そしたら」

鈴谷「んふっ……んんっ……♡」

山風「んっ……んんっ……んふっ♡」

「発情した」

天龍「意味がわからん。」

「な?俺もそう思う。」

天龍「……はあ……とりあえず救援を呼ぶか……」

「え?誰?」

江風「はあ…何やってるの？早く部屋帰るよ…」

山風「やああつ！提督とイチャイチャしてからかえるのおお！」

江風「わがまま言わないでください…すいません提督…迷惑かけてしまったみたいで…」

「ん…俺も江風が助けに来てくれて嬉しいよ。今度お礼として俺のできる範囲でなんでも聞いてやろう」

江風「！……それは本当ですか？」

「？おう。本当だ。男に二言はないよ」ニコ

江風「んふふ…えへへ…♪…うん♪分かった♪ほら、帰るわよー♪」

山風「いやあああ…ズルズル」

「しっかし艦娘って力強いな」

天龍「まつ、艦娘だからな！」

「それで？鈴谷の方はどうすんだ？」

天龍「熊野に頼んだ。」

「熊野?」

提督「鈴谷と仲のいい艦だ。」

「へー」

? 「……えーと……なんかよく分からないんですけど鈴谷さんを引取りに来ましたー

……」

「君が熊野かい?」

熊野「……え?……あ……はい。熊野……です……」

「はいじゃーこれお願いね。」

そう言つて縛つたままの鈴谷を手渡す。

熊野「……」

「……?……あ!勘違いしないでね!?!別にいかがわしいことは一切してないよ!?!マ!ジ

!デ!

熊野「分かってます……知ってるから……全部知ってるから……」

「そ、そう?ならよかつ」

熊野「私が…相手になるので…鈴谷には手を出さないで……ください……」  
 うーんこの。どつかで見たことある展開だ。

「…あの熊野さん？なぜいきなり脱いだんですの？」

てか君達の服ってそういうふうにできてるの？何時いかなる時も全裸になれるとか……それなんのため？

熊野「鈴谷には手を出さないでください…私で…私で満足して……ください……」  
 ／／

そうやって胸をこちらに突き出してくる。うん。良かった下着つけて。流石に下着すら取ってたらテンパって天龍に助け求めるところだった。天龍の方をチラリと見る。なんかすごい期待の眼差しなんですけど。「オレは提督のこと信じてるぜ！」ってヒシヒシ伝わってくる。俺別にそんな大して凄いことしてないんだけどな…

「…熊野」

熊野「んっ……ていと……く？」

俺は自分の羽織ってる上着をフアサリと熊野に被せる。

「風邪ひくぞ。」

熊野「て、提督……わ、私は……」

「あのかな熊野。前の奴がどうだったかはあらかた知ってる。だから今の対処も立派な対

処だと思う……でもそれは、前だったらの話だ。」

熊野「!!」

「今はそんなことしなくていい。100%信じる……とまでは言わねえーさ。んでも……俺は絶対に君たちには手を出さないし、手を挙げたりもしない。約束だ」

熊野「やく……そく……」

「ああ。約束だ。もし破ったなら……そうだな。俺の事を殺しても構わない」ニヤ

天龍「んな!?!提督!?!」

「大丈夫だ天龍。……それぐらいの覚悟がなきや納得してくれねえーよ」

熊野「……どうせ……裏切るのでしょうか?」

「……へー」

熊野「そうやって人間はすぐ嘘を吐く……その場しのぎの嘘を!!」

「なら」

俺は素早く机に置いてあったカッターを手に取って。

「今すぐ、死んでやろうか?」

首元にカッターナイフを添える。

熊野「つ……どうせ口だけの」

「分かった」

そう言つて首をかつ切ろうとした瞬間

熊野「!!?」

熊野は明らかに動揺した。そりやそうだ。俺は今…死のうとしてるんだ。言葉通りな…まあでも

天龍「っ！この！」パシン

天龍に目にも止まらぬ速さで手を蹴られる。その衝撃でカッターナイフを手放す。

鈴谷「提督!!」

いつの間にか解いたか分からないが、すぐさま俺を抱きしめて地面に吹き飛ばした。

「あいつってえ!!」

その衝撃で後頭部を少し打った…

天龍「バカか提督!!? あんたが死んだらてめえーの夢物語は閉じるだろうが!! 無茶すんな!!」

鈴谷「提督! やだよ! 死なないですよ! せっかく皆に笑顔が増えてきたのに! なのに!」

「だあ…くそ…いてえーな。大丈夫だ安心しろ。俺は死なねえーし死ねねえ」ナデナ

天龍「はあ!? 提督またいい加減な!」

「いい加減じゃねえーさ。死のうとしても皆に助けられる。なら死ねないだろ?」

鈴谷「うう……もう……!ばかああ……」

熊野「……………どう……して……」

「死ななかつたのかって?」

熊野「違うー……どうして……どうして……私のために命を捨てられるの?そんなの……  
おかしいよ……だって私は」

「化け物……なんて思ってるのか?」

熊野「……………」

「はあ……いいか熊野。俺はお前を化け物とは思ってねえ。」

熊野「……………じゃー何よ……」

「へ?」

熊野「あんたにとって!私は!私達は何よ!!」

「んなもん決まってんじゃん」ニコ

俺は熊野の頭に触れて

熊野「っ!?!」

「仲間だよ。大切な、仲間さ」ナデナデ

熊野「なか……ま?」



「いいか覚えとけ熊野。俺はお前を沈ませない。絶対にな！みんな生きてこの戦争を終わらせる！それが俺の夢さ！」

熊野「……………（ああ…：そうか…）」

「だから、勝手に死のうなんて思うなよ？俺がここに来たからには…」

熊野（この為の不幸……………この為の…：試練…：だったのですね……………）

「みんなぜつてえーに死なせねえ！逆に笑顔にさせてやるよ！熊野もだかんな！」

熊野「……………は……………いつつ！（この人に……………この方に…：会うためだったのですね……………）」

私の……………ううん…

私たちの……最高の提督♪

なんか今日は疲れてるみたいだわ：明日は頑張る！

「……あ、仕事終わっちゃった……」

いつぞやに天龍と響と一緒に焼却炉にぼぼぼーんしちまったからやるのが少ない。あ、その数時間後ぐらいに机の上に魔法の言葉

〔換金できたよ！資材倉庫に運んでおくね！〕

っと手書きで書かれてました。てかあの妖精さん達すごいな。あの小ささで文字かけるのか：驚きだ。

「……あ、そういえや空母の人達が言ってたな。妖精の言葉は幼稚っぽい喋り方……本当にそうなのか？」

加賀「え？……ええ。まあ。普通なら……」

空母代表の加賀さん。たまたま歩いてたら暇そうに座ってたので、おにぎり作って釣つたらすぐ釣れた。物凄い勢いで釣れた。入れ食いである。

んで、そんな加賀さんをズルズル引きずりながら連れてきて、書類作業を手伝わせたのだ。我に返つた加賀さんは最初こそ戸惑っていたが、10分も経てばそんな迷いもなく、パパッと動いてくれた。

「普通ならっ?」

加賀 「はい。普通は、妖精というのは気まぐれと言われてますよね?それは子供っぽい性格にあるんです。何事にも興味があって、フラフラとそこら辺をふらつく…見方を変えれば、無邪気な子供のようなんです。」

「……そういうものなのか?」

加賀 「はい。恐らく提督が不思議がるという事は、そういう言動をした妖精さんがここにいない…という事ですよね?」

「まあ、喋り方も幼稚っぽくないし、大人の女性っぽいからな。」

加賀 「それが特殊な妖精さんなんです。普通の妖精さんが特殊な環境や技術を極めたなどで変化する特殊個体。それがここに居る妖精さんなんです。」

「だったら、普通の妖精さんってやつも、そういう特殊な環境下に置けば特殊妖精になるってことか?」

加賀 「恐らくは…でも、それは出来ません。」

「………なるほど。気まぐれな性格上…その場に留まってひとつの事に集中できないってことか…」

加賀 「察しが良いですね。」

「ならここに居る妖精全員がその特殊妖精ってのは…少し不思議じゃないか?そもそも

妖精つてのはその着く人の人柄で決めているんだろ？俺の人柄なんて少なくとも妖精さんに好かれるような人柄ではねえーと思うが…」

加賀「確かにそうですね」

「おい」

加賀「……まあ、ですが、悪い人ではない……ですから」

「ちなみにそれどこで判断した？」

加賀「美味しいご飯をくれる人に！悪い人はいません！」キラキラ

「そう言うと思った。」

ガッツポーズまでしてらい……そりやおにぎり一個で釣れるような奴だもんな……飯で買収か……ハハ、なんか笑えてきた

加賀「……提督は、いい人ですよ……♪」

「……そうかい」ニコ

なんだ、綺麗に笑えんじゃねえーか。凝り固まりすぎて石かと思つたが、ただ単に感情を表に出さない性格なだけか

加賀「……提督はどう思いますか？」

「どうって？」

加賀「この鎮守府の事です。」

「そうだなー……個性的としか言えないかな。俺はまだここに居る全員と仲良く話してないんだ。中身なんて分からないし、みんながどういった境遇なのかも分からない。ま、聞いた所でぶつちやけどどうでもいいんだが」

加賀「それはどうして?」

「昔の記憶を忘れるぐらい、ここを面白おかしい鎮守府にしてやるからさ!」

加賀「!」

「過去の記憶は確かに消えない……んでも!未来の記憶はまだ知らない、知りもしない!だから面白おかしくしてやるんだ!過去の仕打ちがどうかそんな軽い事を忘れるぐらい!皆が笑顔で、笑って帰れる場所を作る!それが俺の、この着いた俺の夢さ!」

加賀「……叶うといいですね。その夢」

「そうだなあ。叶うといいな。……なあ加賀」

加賀「……はい?」

「俺は絶対……その夢を実現させるぜ。加賀はそんな夢を馬鹿にするかい?」

加賀「……馬鹿にはしないよ。……無理だとは思いますが」

「言ってくれるじゃんか。じゃーそうだな。加賀の予想が外れた時は、俺のゲテモノ料理でも食わしてやろうかな?」ニヤ

加賀「良いでしょう。その時は受けてたちましよう！」

「おー！いいねその覚悟！」

加賀「……………ふふふっ」

「?どうした？」

加賀「いえ…なんでも……………あはは！久しぶりです。こんなに…気分が向上したのは

…」

「…そんな事がこれからも毎月、毎週起こるんだぜ？ついていけるか？」ニコ

加賀「ふふっ…楽しみにしてますね…♪…司令官」

「おうよ！任せろ！」

加賀「……………」

『俺は絶対ここを面白おかしい場所にしてやるぜ!』

加賀「……………」

『そんな事が毎月、毎週起こるんだぜ? ついてこれるか?』 ニコ

加賀「……………」流石に気分が高まります……………」

久しぶりです……………」ここまで人を信頼したのは……………」

加賀「約束ですよ……………」司令官……………」 ニコ

曙「見ちゃったのよ! 私!」



「急に来てどうしたよボノたん」

曙 「ボノたん言うな！」

「あいてつ……で？何を見たんだよ……」

曙 「そ！それはね……」

「……え？まじ？」

霞 「あの鬼の加賀さんがニコニコしてたアア！」

曙 「ふふん！見たんだからね！この私は！ちゃんとこの目で！」

……まじ？加賀さんってそんな人だったの？俺が適当に釣った時はそんな恐ろしそ  
うじゃなかったぞ？

霞 「本当に見たのー？ねえークズ？」

「え？あ、おう……本当に見たのか？」

曙 「なによ！クソ提督の癖に疑うわけ!?良いわよ！見せてあげるわよ！今日だつて見  
たんだから！着いてきなさい！」

霞 「にわかには信じ難いわね……ほら、何ぼさつとしてるのよ！早く行くわよこのク

ズー!

「分かった。分かったから押すな…」

曙 「さあー!こつちよ!着いてきなさいクソ提督!」

「分かったから引つ張るな!!」

鈴谷 「で?こんな所で何してるの?」

「俺に聞くな……」

熊野 「す、鈴谷?そんな怒んなくてもいいんじゃないかなー…なんて……」

鈴谷 「怒らないわけないでしょ!」

うん。まさか俺もあの二人にいきなり風呂場に突き飛ばされるとは思わなかった。

曙 「バーカ!クソ提督のバーカ!」

霞 「いいのかな……いいのかな!?!こんな事しても!?!」

曙 「平気よ!あのクソ提督ならあんまり怒らないから平気!」

霞 「そうなんだけど……そうだけどー!」

曙はあれだね。いたずらっ子なんすね。霞はあんな性格だけどいざやると不安が溜まるタイプね。逃げ方がそうだったもん。俺を助けようか助けまいかチラチラ俺の方見てたもん。可愛いやつですわ。うん。

鈴谷「……………見たいわけ？」

熊野「!?」

「滅相もございせん。」

むしろ今ここで「はい！喜んで！」とか言ってみろ。鈴谷の蹴りあげが俺の顎にクリーンヒットするに決まってるだろ。俺が正座させられて、鈴谷と熊野がその前で仁王立ちしてんだぞ？確実に飛んでくる。蹴りが！それに正座してるから前見れねえーし……え？スカートの中見えるだろうが！

『変な所で律儀じゃのう……………こういう時こそ不可抗力で覗いて見てこそ！男というものじゃろう!!』

（そんなにくら命があつても碎けそうな男心今すぐ捨てるわ！顎なんて蹴られたらさすがの俺でも割れる！）

『尻が?』

(だーれが尻の話してるんだよ!それに尻は元々割れてんだろがア!!)

『違う。論点そこじゃない』

(んな事知ってるわ!!てめえーがいきなり尻の話持ち出すからだろお!!)

『……………あ』

(なんだ!?!あつてなんだ!?)

『……………頑張れ』

「(何を頑張れって言うん)……………だ?」

なんだ?この感触。てか俺の手って正座させてるから膝に乗せてなかったか……

「……………は!?!」

爺さんに会話向けてたから全然触られた感触なかったけど……

鈴谷「……………さ、触りたいなら……………素直にそう言いなさいよ……………// // // //」

お前の頭はどれだけハッピーターン詰まってるんだごら!!

「あの……………鈴谷?今俺これ……………何掴んでるのかな……………」

鈴谷「!?!// //わ、私の口から言わせるの!?!……………は、恥ずかしいわよ……………// //」

あー察し。うーんどうしよう。こっからどう言って逃げればいいのか分からない。とりあえず褒めておく?いやそれだと熊野が勘違いする。てかよくあんさん仲のいい

熊野の前で恥ずかしい行為できませんね。惚れるわ。いや惚れんけど

「……なあ熊野？今の状況どうにかしてくんない？このままだと俺の理性はち切れそうだから……さ？」

うん。なんでだろうね。俺の左手が勝手に持ち上がっていくんですけど

熊野「鈴谷だけ……ずるいつ！／／わ、わた、私……だって！触って欲しいもん！

／／

違う。そうじゃない。てかまず俺が振り解けばいいか！

「……おつら!!」

鈴谷「ふえ!!」

熊野「うきやあつ!!」

俺は素早く2人を押し倒して…

「だあークソ！鈴谷も熊野も可愛いんだからそういう事軽々しくやんなよな!!マジで！俺の理性が持たん！」

鈴谷「て、提督……」

熊野「か、可愛いって／／」

「んじゃあばよ!!二度とこんなことすんなよ!!マジで！本当に！お願いね!!」

っと猛ダツシユでその場を離れる。鈴谷は良くああいふ事をするから少しデコピン

すればいいけど…熊野は知らん。つい最近顔合したただけだし。てかその一回で惚れたのか…俺…モテてる!嬉しいような嬉しくないような…わからん!

陸奥「……む? おお! 提督じゃないか!」

「お、お前は?! むつつり!」

陸奥「陸奥だ!!」

「いやー悪いね…お茶出してもらって」

陸奥「なに、気にするな。私は提督の言葉に救われたからな。これくらいはどうって事ないわよ。」

「そか? なら少し休憩させてもらっても大丈夫か?」

陸奥「ああ、構わないよ」ニコ

「よっこらせつと! ……ふう…疲れた…」

久しぶりに畳のある部屋に横になった。子供の頃はよく横になってたが、硬くて寝に

くいと思つてなかつたな…こうして大人になって…改めて横になって見てみると……すげえー落ち着く……

『そういやお主大人じゃったな』

(俺も…今知つたよ。俺大人だわつてね)

『随分幼稚な大人がいたものじゃ』

(男はいつまで経つても少年の心を忘れてないもんなのよ…ま、俺みたいにアクティブに動き回るのは力仕事してる奴らぐらいししかいないが)

『そういやお主、前世では何をしていたのじゃ?』

(あん?じじいは知ってるだろ…俺をこの世界に転生させた張本人なんだからよ…)

『…いや?ワシが知ってるのはお主が謎の病でくたばつたぐらいじゃぞ?』

(………何?)

『いやー、長い事生きてると、忘れることも多いからう。それに、お主の人生ばつち見てはいないわい。』

(………それもそつか。そうだな…俺の前世か…)

『この疫病神! 我が家から居なくなれ!!』

『あれが疫病神か…近づかないでおう』

『だはは!! オラ! オラア! 立てよ! ゴミクズが!!』

『…あんだなんて…産むんじゃなかった!!』

(……………)

『おい? どうしたのじゃ? 急に黙って…』

(いや…何もねえーよ。それで? 俺の前世か?)

『まあーあんまし気にならないのだが』

(んだよそれ、聞く意味あるのか?)



『まあー、気にはなるだろ』

(どつちだよ。……まあ一言で言えば……最悪だったな)

『それは、お主なりのジョークか?』

(いや……マジな方だ。笑いながら言ってるのは、そうじゃなきや俺が耐えられないからだ。)

『……………』

(……まっ!笑ってるのなんていつもの事だろ?そんなに気にしなくて大丈夫だよ)

『……………そうか……』

(ああ!そうだよ!)

『にしてもお主の声色は……』

『恐ろしく震えておる』

「んー！久しぶりに畳に横になったわ！色々スッキリしたわ！あんがとなー！」

陸奥「むっ…もういいのか？まだまだ時間はあるぞ？」

「いいっていいって！それにいつまでも長居してちゃわりーからな！そろそろ事務室に戻るよ」

陸奥「……提督がそう言うなら…今度は私からそちらに行つても構わないか？」

「全然！構わねえーさ！むしろ何時でも来いよ！待つてるぜ！」

陸奥「……あぁ♪分かったよ♪」

「おう！それじゃお邪魔しましたっ！」

「……………くそ…何だ…って前世の記憶を思い出さなきゃならねーんだ…」  
廊下に手を当てる。……………だあくそ…手が、足腰が震えてやがる…はは…俺らしくねえ  
……………いや……………

むしろこっちの方が……………俺にふさわしいのか……………？

「……………」

夕立 「ぼい? あ! 提督さん! こんな所でどうしたつぼい?」

「ああ…夕立か。いや何、少し立ちくらみしたただけだ。気にすんな」ニコ

夕立 「……………提督、どつか体の調子悪いつぼい?」

「はは、俺の体が調子悪いのはいつもの事じゃねえか。んでもなんでそんなこと思っ  
たんだ?」

夕立 「うーん……………わかんないつぼいけど、なんかいつもの提督さんじゃない気がする  
つぼい。」

「何だよそれ。俺はいつも通りだよ。また明日な」ニコ

夕立 「……………どうしてそんなに震えてるつぼい?」

俺は……彼女たちに救われ、彼女は願いを叶える。

夕立「……最近、提督さんの様子……おかしくない？」

時雨「確かにそうだね……確か1週間くらい前からだよね……大丈夫かな……」

夕立「……提督さんと1週間前の日に会った時……どこか様子がおかしかったのよね」

時雨「様子がおかしかった？」

夕立「うん……なんだろう……フラフラしながら廊下を歩いて……どこか虚ろな目をしてたのは覚えてる……大丈夫？って話しかけたら、いつもの笑顔……より引きつってる笑顔だったのは覚えてるっぽい……」

時雨「……少し、聞いてみようか。」

夕立「？誰にっぽい？」

時雨「そんなの、提督にだよ。直接聞いた方が早いじゃないか。」

夕立「で、でもあの提督がだよ？なにか……深い事情が……」

時雨「なんだい。そんな神経質になって……夕立らしくない」

夕立「だって……」

時雨「ほら！ここで考えてても時間の無駄さ！行くよ！」

夕立「わ！わかった！分かったから！引っ張るなっばいいー！」

響「……………司令の様子が変わ？」

天龍「ああ……………こう…なんて言うんだろ…無気力って感じで……………なにか隠してる感じがすごいんだよな」

響「私も、その異変にはすぐに気づいた。すぐに治ると思ってたけど……………」

天龍「……………オレが昨日手伝いに行った時は愛想笑いだったよ」

響「となると…まだ回復はしてないのね……………何日目だったっけ？」

天龍「今日でちょうど、1週間目だな」

響「流石にあの元気な司令が、1週間元気がないとすると……少し心配だね」

天龍「……………なあー響」

響「分かってる。天龍の言いたい事は分かるよ。私達になにか出来ないことは無いかな……………でしょ?」

天龍「はは……適わねえーな」

響「伊達に一緒にいないからね♪……………そうだね……私の提案は、司令にその話を話してみるのが一番かな」

天龍「……………そう……だな! 四の五の悩んでるより手っ取り早いな! 行くぞ!」

響「んっ……」

鈴谷「あー……提督う……」

熊野「まーた提督さんの事想ってるの？もういい加減前向きになりなつて。」

鈴谷「だつてえ……もう1週間だよ？1週間……ろくに部屋から出ないで……ずっとこもつてばかり……前なんて書類なんて終わつたらプラプラ私たちとコミユニケーション取つてたんだよ？」

熊野「まあ……そんなとき私は怖くて近づけてなかつたのですけど……まあー確かに、良く食堂でお見かけはしましたね。」

鈴谷「そんな提督が……ああ……ていとくう……」

熊野「……もういつその事聞きに行けば？」

鈴谷「む！無理無理！あの提督があんなに悩んでるんだよ！？そんなの聞きたい行きたくても行けないわよ!？」

熊野「はいはい。グズつてないで早く行くよー」ズザザザ

鈴谷「いやああ!!はなしてええ!うわああああんっ!」



曙「……………」ポーツ

霞「……………ねえ、あのクズ…最近見た？」

曙「……………見てない……………わね。」

霞「……………そう……………これで1週間……………嫌ってほど絡んできたあのクズが……………1週間も引きこもる……………か」

曙「まつ！あんなクソ提督、部屋から出ない方がみんなに優しいけどね！とうとう空気読んだんじゃない？」

霞「曙」

曙「つ……………仕方がないじゃない……………もう……………1週間も会ってないんだから……………私だつて……………寂しいわよ」

霞「……………よし！決めた！」

曙「ちよつ、ちよつと？どこ行くのよ」

霞「決まってるじゃない！あのクズの所よ！」

曙「い、言つて何になるって言うのよ！」

霞「そんなの！問い質すのよ！1週間も引きこもり生活ですか！つてね！」

曙「……………」

霞「…………正直、私だつて寂しいわよ。以前はうざいつてほど絡まれてたのに…いきなりパタリと音沙汰なくなつたら…心配するでしょ…寂しく…なるでしょ」

曙「あんた…………そうね…そうよ！あたし達だあのクソ提督を問いただすわよ！行くわよ霞！」

霞「っ！…………分かつてるわよ！」

「……………あーだめだ。」

何故だろう。前に前世の記憶が蘇ってくるようになってから…気分が上がらない。それに皆と何故か距離を置いてしまっている。これじゃダメだと分かってはいるのだが…変えようと思えない……

「……………流石にそろそろ俺もガタが来てるって訳か……………」

自分の体は自分が一番理解してるんだ。それは心の、精神状態も同じだ。皆に隠し事をしてる。それが皆との距離を置いてる原因なんてものははなからわかってる。

「……………話さなきゃ……………ならないか。」

隠し事をする……………それはしているだけでとても居心地が悪くなって、周りを敵視してしまう。それが続けば悪循環だ。だから…いつかは自分でそれを断ち切らなきゃならない。それが今日になっただけ……………だけなのだが……………

「……………うーか……………ねえ……………」

放送をかけようとする右手が異常なほど震えて、呼吸が乱れる。視界がぼやけて、息苦しくて……………苦しくて……………

「はあっ……………はあっ……………はっ……………はっ……………はっ……………」

過呼吸……こんな時に……こんな……大事な時に……くそ……思考回路が纏まらねえ……意識が遠のいていくのを感じる。だめだ……みんなに伝えられないまま植物人間にはなりたくねえ……それにここで落ちたら……俺は逃げてることになるじゃねえーかよ!!

? 「提督!!」

「はっつ!?」

鈴谷 「大丈夫提督!」

「鈴谷……? な、なんで……」

時雨 「なんではこつちのセリフだよ。……こんなになるまで自分を追い詰めて……あんまり……心配させなでくれよ。」

「し、時雨? そ、それに……なんで皆ここに……?」

天龍 「提督が最近不拔けてるから心配しに来てやってんだよ!」

響 「天龍の言う通り。私達……仲間でしょ?」

「うぐつ……それも……そうなんだけど……私情に君達を巻き込む訳には……」

霞 「何を今更……あたしはおろか曙の私情に首突っ込んで、勝手に解決してつたクズはどこどいつだったかしら?」

「いやあ……その……」

曙「そ！れ！に！クソ提督がいつまでもこの調子だとせっかく明るくなった鎮守府が暗いままなの！要するに！クソ提督！早く元気にシャキツといつも通りのクソ提督になりなさいよ！」

「……………」

鈴谷「…………事情は知らないよ。それは提督の口から…………自分の気持ちで聞きたいから。でもね…………提督、信じてとはいいいません。それはただの押し売りですから…………ですが」

夕立「響ちゃんか言ったように…………私達は仲間…………そうでしょ？仲間なら…………相談するだけでも…………いいのよ？愚痴でも何でも…………それを笑顔で流したり話し合うのが…………仲間って…………言うんじゃないっぽい？」

「……………ありが……………とう……………」

目元に熱いのが込み上げてくるのがわかる。だあーくそ…………俺はいつから爺さんになつたんだ…………

目元を拭って、ここに集まったみんな、一人一人に目を合わせて、目を瞑り、すうーつと長い深呼吸をして、再度目を開けて、言葉を発する。

「…………それじゃーお言葉に甘えようかな？…………聞いてくれるかな？俺の…………あーいや、この話の場合……………僕の昔話を…………」

鈴谷「っ……………はい。聞いてあげます♪」

響「……………んっ。」

時雨「ああ♪…話してくれないかい？」

夕立「もちろんだっぼい！」

他の奴らも、元気よく答えてくれる。

「ふふ……ありがとな？…それじゃーこれは僕が前におかした話さ…」

僕が小学校の頃からの話。

僕は、一般的にはお金持ちという裕福な家庭で育っていた。親は一流メーカーの社長で、兄や姉、下には妹：弟もいた。何不自由もない暮らしにどこか平和ボケをしていた僕は：あることに気づいた。：気付いてしまった。

兄や姉は僕が小学三年の頃には既に中学生となっていた。そもそも兄や姉は小学生の頃から天才肌で、兄は頭が良く、姉は物覚えがいいほうであった。金持ちの子として、恥ずかしくないように育っていった2人は親にも認められる人だった：いざれ弟や妹もその才能を開花して行った。だが僕は：僕だけは：一向に才能に恵まれなかった。

スポーツも平均レベルで、学力も平均。何をやっても平均レベルで、その平均が家に泥を塗るようになってから：僕は疫病神扱いを受けるようになった。

親に殴られ：蹴られ：しまいには兄や姉は僕を見捨てるようになった。弟や妹も：僕に関わらないようになった。家にいるはずなのに：誰もが僕を無視する日々が続いた。

中学校では、僕は虐められていた。名家の落ちこぼれなどと言われ、椅子で殴られた。体操着を破かれたこともあった。ノートもビリビリに破かれた。先生や校長は味方をしてくれない。それをした途端：権力という名の暴力で解雇されてしまうから。：それに、そもそも助けようとしなかった。仕方がない事だと、落ちこぼれだからと散々言われた。

何時しか、自分がなんで生まれてきたのかも、なんで生きてるのかも分からなくなってきた。名家に生まれたから？自分が無力だから？お金持ちだから？何もが悪く感じて…何もかもが無気力になって…気付いたら……

「俺は…親を殺していた。」

「「「「っっ！」」」」

真つ赤に染った手…握られていた包丁にはトロトロと滴る生暖かい真つ赤な水がぼたぼたと床を汚していく。

目の前を見る。

親父が泡を拭きながら絶命している。

右を見してみる。

兄や姉が青ざめた目でこちらを見つめている。

左を見してみる。

まるで化け物を見るような目でこちらを見ている。

散々獣扱いしてきて、いざ反撃したらこれだ。それに、人の命はなんて脆く、夢いのかと思つた。そんな事を思つた時……

後ろから…突きつけられる。



母親の、狂気とさつきに満ちたナイフが腹部を突きつける。まるで私の愛した人を返せと、目で訴えるように。

口から鮮血が出る。

腹部から鮮血が出る。

意識が遠のいていく…その前に俺は、力を振り絞って手に持つてる包丁を逆手持ちに持った。

次の瞬間……

「真っ赤な噴水が……俺を包み込んだ。」

母親の首に、先程自分の手に持っていたナイフが突き刺さっている。ドサツと音ともに俺の足に生暖かい液体が触れる。その瞬間…正気に戻った。

「あがつ……あつ……ああああつっ!!」

自分が何をしたのかを察した。自分は親を殺した。真っ赤に汚れた手を見つめる。母親に刺された腹部の痛みなんかを忘れて、汚れてしまった自分の手を震えながら見つめる。周りを見る。誰も彼もが…俺を化け物を見る目で見てくる。俺は……それに絶望して…意識を失った。

「……………」

「……………俺は…人を殺した…殺人犯だ。のうのうとこうして君達と触れる度に、何か俺に警告を鳴らすようになった。『お前は、昔を忘れるのか?』とね。」

鈴谷「てい……………」

「無論…忘れてるわけが無い。心で蓋をしても、体が覚えてる。脳が覚えてるんだ。……………俺は……………人殺しのろくでなしだ。実際…つい最近までは…この事を忘れていたんだからね。」

時雨「……………それは……………司令が何歳の頃からなんだい?」

「中学生卒業した時期……としか今はまだ思い出せない……もちろん……俺は入院して退院した後、すぐに少年院にぶち込まれた。……だが、それが俺にとって、いい教育になった。」

夕立「いい……教育？」

「ああ。俺は人を殺した……その罪からは逃れられない。罪を償う。……安く見てると思えるが、本当に俺はそこに入って……反省した。仮にも自分の親を殺したんだ。どれだけ無下に扱われてたとしても……最初の頃だけは……立派に親をしていたんだ。俺はそれをたった一つの違いだけで拒絶して……殺したに過ぎないんだから……」

天龍「……それはちげえー……とオレは思う。話を聞く限り……提督は正しいと思うぜ？もしオレも同じ立場だったら……提督と同じ事をしていたと思う……」

「ふふ、ありがとな天龍？」

天龍「べつに……オレは思った事を言っただけだ……」

「……でもね。それじゃダメなんだ……人の命を奪うと言うことは……多くの人を悲しませる事になるんだ……俺はそれを痛感した。だから……俺はある人に頼んだんだ」

響「誰……なの？」

「……師匠と呼んでいる人さ。俺はその人の元で4年間……世話になった。」

夕立「……何をしてたの？」

「…色んなことさ。人への思いやりなどさ。……は？って思ったろ？でも実際は本当にそういうことさ…ボランティア活動してみたり…そう言うのを積極的にするだけ…それだけなんだ。でも、俺には難しかった。少しなにか言われれば切れてしまうし、自分の不器用さが嫌になって物に当たってしまう…でも、そんな時師匠は…何が行けないかを一からパズルのピースをはめるように教えてくれた。そうして…2年がたった日に…俺は気付いたんだ。俺の弱点を」

鈴谷「………弱点？」

「……俺さ、親に礼儀や常識を教えこまれてなかったんだ。」

「！！！！！！」

「これが弱点ってわけじゃないけど…俺は常識を教えて貰えなかった。通りで妹や弟達と意見が食い違うと思ったよ」

霞「それは……どうして？」

「………はなから俺は、捨て駒何だっけさ。」

曙「なっ!？」

「……師匠がな、調べてくれたんだ。伝を使いまくって…俺の家の資料を漁りまくったんだと。そしたらな…そこの戸籍に俺の名前なんてなかったんだと。」

夕立「……酷い……」

「最初から……存在しない子として俺は育てられた。戸籍にも入ってなければそれは奴隷と同じ……日本では奴隷制度はまだまだ未完成……だから、たとえ殺されても自殺として処理される……俺は……最初からいらぬ子だったんだ。」

そうして、机の上に置いてあつたコップ一杯の水を飲み干す。

「んでも……師匠はそんな俺に新しい名前をくれたんだ。ついさつき思い出した……こうしてみんなに話してるからこそ……蘇ったんだと思う。……改めて自己紹介をしよう。」

いつの間にか頭に被っていた白に黒い線が入った、まるで師匠がつけていたのと同じ帽子をクイツと上にあげて、

「神崎 かんざき 零斗 れいと……それが師匠が俺にくれた……名前……ついさつき思い出した名前さ」ニコ

そうして俺は立ち上がる。

「みんなのお陰で、気分が晴れたよ……若い頃におかした過ちを忘れて……蘇ってきて……それを話すのが怖くて……でも……話したら気分が楽になったよ……君たちのお陰だ……本当にありがとう。」

そうして、俺は帽子を胸に添えて、深深と頭を下げる。再度、顔を上げて、俺は彼女たちに問う。

「……さてつと……それでは、俺の処分を……君達に委ねたい……」

鈴谷「どういう……ことですか？」

「俺は先程も言った通り人殺しだ。それをみんなに隠して一般人のように振舞っていた。許せるはずも無いだろう。俺は……みんなを騙してここを平和に暮らせる場所にしたと言っていたんだから……俺がその平和を乱したというのに……おこがましいだろう？……君たちの判断に任せたい」

時雨「……………」

「俺をここから蹴るか……飛ばすか……」

そうして、帽子をかぶり直す。

鈴谷「……………私達は、提督に救われました。」

「……………はい？」

時雨「多くの事を教えてもらったからね。そこに異論はないかな。」

夕立「夕立も！提督さんに剣術を教えて貰えなかったら、ここまで強くなれなかったっぽい！」

響「剣術に関しては私も同感だね。提督から教わる剣術は分かりやすく、とてもタメになったからね。」

天龍「オレも、提督に教えて貰えなかったら、第六感なんて開花出来なかった……感謝してもしきれないぜ」

「ま、待ってくれ！それとこれとは別だろ!?だ、第一俺は犯罪者で……人を殺したんだぞ」

……?」

霞「私はクズのせいで色々変えられたわね：毎日毎日鬱陶しいぐらい話しかけてきて、絡んできて……でも、そんな生活が私は好きなのよ。犯罪者?それは過去の話でしょ?人を殺した?今は違うでしょ?大事なのは、今よ。」

「なっ!?!」

曙「それは同感ね。散々私達のライフスタイルを変えまくったんだから、今更犯罪者とか、人殺したーとかで、なんとも思わないわよ。」

霞「と、いいつつ実はすぐビビってたり」ニヤ

曙「なっ!?!／／そ！そんな訳ないでしょ!?!／／わ、私がビビるなんてそんな」

霞「あーでも前にお化けに」

曙「わああー!あああ!きこえなあああい!」

「……えーと……」

鈴谷「……過去に提督が悪さをして：捕まってたとしても：私達が知る提督は、とても優しくて、頼りになる：そんな人：ですから♪」

「っ……」

夕立「過去がどうであれ、私達が知る提督さんは優しい提督さんっぽい。そこに変わりはないし、覆せない。」

熊野「それにー？前に言ってたよね？ここをみんなが笑って返せる場所にしたいって……おめおめその夢を果たせないままこのを出ていったって……ここにいる人、まあー私も含めて何だけど♪…納得するはずがないよね？」

「……………」

加賀「……私は期待をしてるんだ。おめおめと返すとは……思わない事だな？」

鈴谷「ぬわああ!!加賀さん!?!いつから居たの!?!」

加賀「っ……し、失礼ね…最初から居たわよ…」

夕立「……気づかなかったっほい……」

加賀「っ!?!ひ、酷い……」ガーン

天龍「加賀は胸がでかい割には結構空気だもん「ああ？」ナンデモナイデス」

「……………」ポカーン

天龍「…提督、うちらにその話をしてくれてありがとな。お陰で、オレらの提督に対する気持ちが変わったよ」

「な、なにをいって…」

鈴谷「どんな事があるうと…私達は提督を見捨てたりしません…それがどんな困難に見舞われようと……」

時雨「決して僕達は逃げださないよ？提督は一度決めたことは逃げないで成し遂げる



人だからね……僕らが提督を信じないで何になるんだい」ニコ

夕立「それに！夕立は提督さんを守るために強くなつたつばい！勝手に居なくなるなんて夕立は許さないつばい！！」

「……あは……あはは……あは……ああ……俺は幸せ者だ……本当に……本当に……」

天龍「……ふっ……なあ！提督！」

「………？」

熊野「これからも！あたしらをよろしく頼むよ？♪」ニコ

「！」

響「司令が居なかつたら……こんなに今が楽しくない……楽しくなるには……司令が居なきゃ私はや……だから……絶対に辞めるなんて……言わせないから」

「……うぐ……あはっ……本当におれは………幸せ者だ」ニカ

俺は席を立って、涙を拭って……

「こんな……まだまだ未熟者で……ダメな俺だけ……そんな俺でも……これからもよろしく  
お願いします！」

天龍「ああ！当たり前だ！」

鈴谷「……提督！」

「「「おかえりなさい！」「」」」  
「つつ！……ああ!!」ニカ

? 『……良かった…元気そうじゃなか…あたしの役目も…これまでかね』

『……良いのか？久しぶりの弟子なのじゃぞ？それにお主もそろそろ時間が無いじやろ  
うて……』

? 『いいのさ…あたしが別れ言葉を言う太刀じゃないさ…それに……』

『むっ？』

？『あたしは……あの子に心の底から笑って欲しくて……今まで接してきたからね……それを叶えられたのがあたしじゃなくて嫉妬しちまうけど……彼女らなら……安心して逝けるよ』ニコ

『……………そうか。』

？『あの子に……レイに伝えておいてくれないかい？ 師匠からの最後の言葉を……………』

『……………分かったわい……元気だな……あめの雨之』

雨之『なんだい辛気臭い。あたしはそう言うのが大嫌いなものよ』ニコ

『……………』

雨之『すぐに戻ってくるわよ♪閻魔様と喧嘩するだけさ♪それに……………』ニコ

『……………』

雨之『…あたしの肩身も…問題なくあの子に届けられたからね…満足さ…』

『……………でも良いのか？ あれはお主が元帥だった頃の…』

雨之『もうあたしは死んだみさ…それに…あれはレイに…わたししてやりたかったの

さ』ニコ

『……………そうか。元気だな』

雨之『ああ！ すぐに戻ってきてやるわ！』

そうして、雨之は白い粒子となって消えていった……………

『……………さてつと、そろそろわしも、正体を明かさなきやならんのかのう…嫌じやのう…めんどくさいのう……………』

ワシはそんな事を思いながら、夕焼けの雲空から姿を消す

なんか偉い人から対戦持ち込まれた。面倒だなあ（小並感）

「演習訓練だあ？」

加賀 「今日、f a xで届いたのよ。」

鈴谷 「…これがそのf a xよ。」

そう言っつて、手渡されたのは、なんか重々しいスタンプが貼られた何か。

「なにこれ？燃やしちやいけないの？」

加賀 「それをやったら国家反逆罪で提督死刑ですよ…」

「うえーめんどくせ。いいじゃん。……開けなきやダメ？」

鈴谷 「開かなきや始まらないわよ……ムカつく事書いてあつたら、その時は燃やせばいいのよ」

「なるほど。それは名案だ。」

加賀 「……………」 スッ

「…冗談！冗談ですから！弓矢こつち向けんな！死ぬ！死ぬうつつ！」

「それじゃー…開けんぞ」

鈴谷 「はいっ♪」

加賀 「んむううつつ！んむうううつつ!!」

「……あの」

鈴谷 「なーに？♪」

「あれは無視で良いんですか？」

鈴谷 「提督にいきなり弓具を向けるバカが行けないんです♪」

「おう拘束解いてやれや」

弓具を向けた瞬間の鈴谷は速かった。すぐに両手の手首を叩き弓具を地面に下ろす

と、すぐさま足をからませ転倒させると、どっから持ってきたんだって思った紐をぐるぐる巻きにしてソファーに寝かされている。

鈴谷「はあ……仕方がないですねー……全く、提督は本当に優しいんですね……」  
「素早く仲間を縛るような奴に褒められてもちっとも嬉しくないぞ……」

と言いながらも、内心結構面白がっていたり

『DSの才能がお主にはあるようじゃな』

(何を言ってるんだ全く。俺がDSだと?……紳士と言いたまえ)

『お主を紳士と言ったらガチの紳士に怒られかねない』

(それは一理ある。)

『あるんかい』

加賀「はあ……容赦がないわね……ほんつとに……」

鈴谷「提督の敵になるようならすぐにその首……ぶっ飛ばすです♪」

「おうおう恐ろしいなおい……」

加賀「き、肝に命じておく……わ……」

鈴谷「んふふー♪」

「仲間恐喝してどうすんだよお前……」

加賀が手首を擦りながら立ち上がるが、先程の鈴谷のセリフで違う何かの震えが来て

いるようだ。分かるぞ。俺もこの鈴谷の笑顔がとても怖い。

加賀「……………そ、それより、その封筒、早く開けたら？」

「んあ？ そうだな。ビリ…あ、やべ、紙ごと逝った」

加賀「何やってるんですか!？」

「でーじよーぶでーじよーぶ。読めれば無問題だよ。」

加賀「……………はあ……」

「さーてさて内容はー？ ないようでええ」

加賀「さっさと読め」スツ

「はいっっ！」

鈴谷「……………加賀さん」ニコ

加賀「ひっ?!…で、ですが！ 今のは提督が！」

鈴谷「武装は……………？」ユラ

加賀「はいっ！ はいこれで大丈夫よね!？」パツ

鈴谷「提督への謝罪は…？」グラ

加賀「つつっ!! す、すいませんでした提督！」

「……………お、おう」

鈴谷「……………」



加賀「……………」ビクビク

鈴谷「……はいつ♪よく出来ました♪」

加賀「……………」ほっ……」

(……なあなあじいさん。ちと質問していいか?)

『……………」なんじゃ?』

(正規空母って、重巡洋艦より強いんじゃないかなかったっけ?)

『…強いのはあくまで索敵や作戦行動に置いての要だけじゃよ。単純な力比べなら、戦艦の次に強いのが、重巡洋艦じゃよ。正規空母はその重巡洋艦と軽巡洋艦の間……と言ったところか?』

(なるほど……それに、鈴谷は陸の訓練を独自に入れてるから、単純に陸での技術は陸練習入ってる鈴谷や時雨、夕立辺りが1歩先に行ってるのか。)

『……まあーそれだけではもちろんないんじゃないかな』

(ゑ?)

『鈴谷、奴は……改2じゃよ。』

鈴谷「……それで?なんて書いてあつたんですか?」

「んあ?ああ。貴殿に演習を申し込む。日程は……まあーいわば、お前、最近調子なってない?ちと、この世界の厳しさ教えてやるから、カモンカモンって書いてある

な。」

いや実際はもっと丁寧で堅苦しい言葉がぶらぶら並べられているが、俺でもわかるところを和訳したら今言ったことになる。そう言った瞬間

鈴谷 「ふ、ふーん？……死にたいわけ？」

つとおそらくこの紙を送り込んできたであろう方角に向けて武装を展開して発射する瞬間だった。

「まあー待て待て。超簡単に言えばつてやつだよ。もうちつと丁寧だよ」

鈴谷 「紙見せてください」

「え？」

鈴谷 「っ！いいからっ！見せて！」

つと無理やり取られてしまった。加賀も加わって2人でゆっくりじっくり読んでいた。…その間俺は暇なので、鈴谷に入れてもらったお茶を飲んでいた。キンキンに冷えた麦茶ほど美味いお茶はない。

鈴谷 「……………提督」バンツ

「うおっ…びっくりした…なに？」

鈴谷 「すぐにこの生意気な司令官…いえ、ゴミを排除しに行きましょう。」

「お前マジで言ってるのか」

加賀「私も賛成です。この不屈き者。我らの司令官にとんでもない無礼を……射抜く。例えて急所を外しても射抜く。」

男の急所に矢を……おっとこれ以上は青いツナギを着たい男がホイホイこちらによつてきてしまう。

？「やらないか？」パンツ

「あ、お帰りください」

？「つれねえーなあ……ホイホイ」パタリ

鈴谷「……え？今の……誰ですか？」

「知らない方がいいよ」

加賀「で、ですか司令官……今は……」

「知らない方がこの世界楽な事がいっぱいあるよ」

鈴谷「で、でも……」

「君たちは何も見ていない。リピート……アフター……『ミー』？」

鈴谷「……私は何も見ていないわ」

加賀「……そう……ね。何も見ていなかった……わ。」

「よくなりました」ニコ

さてつと。つまりはこの先はこの日程までに指摘された6人編成を考えなくてはならないと。…無駄な仕事増やすなよ。いや別にやる仕事も掃除ぐらいしかないから全然いいんだけど。

「それじゃ、メンバーは俺がのちのち決めておくってことでおけ？」

鈴谷「私は出しなさいよ。直々に屠ってあげるわ。」

加賀「司令官、私にも出る権利をください。必ず司令官のお役にたってみせましよう。」

「うん。とりあえず2人とも、顔が近いかな。それと、あくまで対戦は向こうの艦娘とだから、くれぐれも怪我はさせないように。それだけ守れるなら構わないよ」

鈴谷「罪は相手の人間にあります。すぐほります。」

加賀「3秒で装填…2秒で射出…5秒でヘッドショット……」

「うん。わかってもらって何よりだよ（諦め）」

とりあえず2人は決まりつと…あ、そうだ。

「ちと気になる事があるからちと席を外すね」

鈴谷「どこに行くのー？」

「妖精さんがいる所。」

鈴谷「そう。行ってらっしゃーい」

「はいいつてきまーすつと。」

そうして、ガチャリとドアを開けて、ある場所に向かう。

「でことで、改二がなんだか教えてくれないか？」

俺は工房に足を伸ばして、絶賛作業中の妖精さんに話しかける。

「ふえ？改二の事、提督さん知らないの？」

「全然全く。」

そう言うと、数人の妖精さんがポカーンとした顔をしてしまった。……どうやら、結

構初歩的な知識らしい。

「な、なんかすまんね？こんな出来損ないの俺みたいな鎮守府に居てもらって？」

「いえいえそんな！……私たちはこの場所が好きだから、それに何より、提督さんの事が好きだから、ここに居させてもらってるのさ。お礼を言うなら私達の方だよ……。つと、それより、改二の説明だね。ちよつとまつてね」パチン

そう指を鳴らすと、複数の妖精さんが飛んでいくと、奥からガサゴソガサゴソと何かを持ち出してくる。……これは……

「……………何だこれ？……ギア……見たいな？」

普通、ギアと言ったらモーターについてる白い奴を思いですが、妖精さんが持つてきたのは真つ黒で、少し照り輝いている。金属室で、俺の手のひらにずっしりするような重みがあるのが特徴か？

「それは、コアっていう艦娘の子達がパワーアップするのに必要な、言わば素材だね。それで、こつちが」

次は、それこそモーターみたいなのが出てくる。

「これはそのコアを動かす動力源。……凄くわかりやすくいえば、先程提督が言ったギアがこのコア。そのギアを動かすために必要なのが、心臓の役割を果たすモーターの部分。」

つと、呼ばれた部品を持ち上げわかりやすく説明してくれる妖精さん達。

「ふむ。なるほどな。ある程度はわかった。…んでも、改二つて、改一はどこだよ？過程すつ飛ばしすぎだろ？」

「あーつと………本当に何も知らないの？」

「……あれ？」

どうやら本当に俺は、何も知らないらしい。妖精さんが頭を傾げてしまった。

「……えーとね、改二にするには、改造つて工程が必要になつてくるんだ。…練度つていう、分かりやすくいえば皆のレベルかな。基本的には、練度15〜30で皆の改造は出来るんだ。そこから改二に出来るのは、限られた艦娘で、更に改造には2回あつて……それを行うと改二つていう特殊な改造が出来るんだけど……大丈夫？着いてこれてる？」

「ん？おお。ついていけるよ。なかなか奥深いなあーつて思つててね。」

「……あれ？知らない人が聞くと、結構困惑するような内容だと思っただけど……」

「任せろ。そういうのには知識があるんだ。」

主にゲームでだけ。元々艦これつてのもゲームだし、現実と少しズレていても、ゲームだからねとか、2次元だからねで片付けられる世界だ。…ただ一つ違うのは、この世界がリアルであることだ。ゲームのように「あーあ負けた。んじやもつかい行くか。」つとは出来ない。何故ならリアルには感情というものが常に付きまとうからだ。

……彼女らが俺を警戒していたのも、昔の提督に暴力などを振るわれていたからだ。

……道具は感情を持たない。だが彼女らは感情を持って行動をして、感情で人を好きになり、人を嫌いになる。……つまり彼女らは道具じゃないのだ。感情のままにどこまでも飛んでいける希望の鳥なんだ。俺らのような人間如きには出来ないような勇気を彼女らは持っている。……俺ら提督は、その勇気を借りて、知恵を駆使して彼女らをサポートする。それが提督だと……俺は思っている。

（……そつか。でも良かったよ。……提督が、私たちが思う提督のままで）ニコ

「……？それはどういうことだ？」

（提督はさ、彼女たちをどう思うかな。）

ふわりと俺の前にある机に行くと、ペンチをスラーつと撫で始める。

「……どうって……女の子だろ？人間だよ。」

（つー…………ふふっ……私も、そして他の妖精さん達も、同じ考えさ。……人間は彼女達のことを道具や兵器と考えてるようだけどね）

「なっ。……その考え、気に入らない」

（ふふっ……私達も同じ意見さ。……だから私達は、どこか違うあんたに……提督さんに、希望を託したのさ。……それがようやく、真だと受け取ったよ。）ニコ

そう笑うと、ふわりと飛翔して、俺の目を見すえる。



「私、私達の妖精の力、全力で提督さんに貸すよ。提督はいつか、すっごい大物になる気がする。だから、私達はそんな提督さんの言わばスポンサーだ。…もちろん、報酬はちゃんと貰うけどね？」

「…ふっ。当たり前さ。働かず者喰うべからず…逆は、違うからね」ニコ

「…うんっ♪…さーてと！最後に本題の改造の件だけどね。…その事には心配はいらないよ」

「へ？何故だ？」

「（やっぱり…知らないんだ。）…この艦娘は、少しほかの艦とは違うからね。改造するしないは考えなくていいと思うよ♪」

「え、でも貴重な皆の華々しい瞬間じゃないか？」

「だからこそだよ♪…提督は、いつも通り馬鹿してればいいってことだよ♪」

「おいなんだその人がいつもバカにしてるみたいに…まあーあながち間違いじゃないから…否定は出来ないが…」

ふつと鼻で笑い、お札を言って、お札の金平糖の袋を置いていって、工房を後にした。

夕立「あ！提督さーん！」

「おおっ！夕立、それに時雨じゃないか。なんだ？剣道の休憩か？」

時雨 「こんにちわ♪提督。僕達は今はお昼ご飯を食べようって話をしてて」「あーもうそんな時間かー」

夕立 「っ！ね！提督さんも一緒に食べようよ！」

「おお。いいねー。奢るぞー」

時雨 「ちよつと…すいません。急に誘ってしまって…」

「いいのいいの！俺は絶賛暇してたしな」

夕立 「それじゃー！しゅっぱーっ！」 ギュッ

時雨 「あっ…うう…」 シュンッ

「チラ…ふっ。時雨」 スッ

そう言つて、時雨に手を差し出す。

時雨 「っっ！…うんっ♪…提督…♪」 ギュッ

「…ふっ」 ニコ

そうして、食堂に歩いていく。

（提督さんは…不思議な人だ…） ニコ

{…首相、聞かなくてよかったですか？彼の…あーいえ、提督さんの力について…}  
 {ああ…ふつ。あの様子だと、おそらく本人自体も気付いてないよ。聞いても逆にヒントを与えてしまっただけさ。ああいう隠れた才能って言うのは、自分で見つけて、気づいて、育てていかなきゃ意味がないのよ}

私達は、彼の後ろ姿を見ていた。…とても不思議なオーラを纏って、とても不思議な力をもにつけた新人の提督…ね。

{長くこうして、工房に身を置いてきたけど…彼のような提督に私たち妖精が心惹かれるって…結構まれよね}

{……そう…ですね。大抵の提督は、私達の事をこき使いますからね…}

{それに、艦娘達が『勝手に改二になる現象』は、どこを探してもここの鎮守府だけだろうね}

{……本当に、聞かなくてよろしいのですか？}

{さつきも言ったでしょ？…自分で気づかなきゃ意味がないって}

{……}

{あの様子だと…すぐに気づくわよ。…艦娘に愛されて、その衝動で艦娘が姿形をガラリと変えれば…ね。今で言うと、鈴屋さんや時雨、夕立のように…ね。}

昔話を聞いたが、そんなの俺には関係ねえ!行くぞおおおアアアっ!?

夕立「提督さんは何にするのー?」

「俺かあ?……んー……この海鮮丼とか良さげ」

時雨「あーそれ美味しいよ。僕も前に食べたけど、具がすっごい新鮮だったよー!」  
「なら決まりだなー!」

現在、夕立と時雨で食堂に来ております。ごわす。

『何キャラだお主……』

(ごわすキャラ)

『なんだそのジャンルわ……』

? 「はい。お待たせしました。こちら海鮮丼になりますっ♪」

「おーテンキューー」

? 「はいっ♪……はいっ!」

「んー？どうした鳳翔さん。」

鳳翔 「て、ててて提督?! な、何故ここに!？」

「何故って…夕立達と飯食いに…」

鳳翔 「えーと！えーと!! それ！作り直します!!」

「拒否権を使います」

鳳翔 「なっっ!？」

「無念…ほな、さようなら」 ビューンッッ

鳳翔 「あっちよーちよつと!! …… ああ…行っちゃいました…」

「ふいー。何とか逃げきれたぜ」

時雨「本当に提督は……こう……神出鬼没だから、僕達みたいに関わりを持ってない艦からしたら心臓に悪いからね……」

「おいおい照れちゃうじゃないか」

夕立「提督さん……時雨はおそらく褒めてないと思うよ……」

「……ありや?」

天龍「おおっ!提督じゃねえーか!」

夕立「あつ!天龍!こんにちわ!」

天龍「おう!オレもご一緒にしてもいいか?」

時雨「構わないよ。うーん……それじゃー提督の隣に」

夕立「やつつ!提督の隣は夕立の場所つ!」

時雨「………てことなんで、僕の隣でいいかな……?」

天龍「構わないさ!んじや!いただきまーす!」

「うへえ……相変わらずすごい食ってんな……」

天龍「んー?そうか?これでも普通だぜ?」

時雨「七味を蓋ごと外してぶっかけるの天龍さんぐらいですよ……」

天龍 「男気が合って結構イカスだろ？」

「頭悪そう」パクツ

天龍 「なっつー……そ、そうなのか……」

「そもそも……七味は容量守って食うのが美味いんだろうが。かつこよさを求めてぶつかけても寒いだけだぞ？」

天龍 「うぐつつ……」

「……まっ、そこが天龍らしいというか……なんて言うか」ニコ

天龍 「つつ!!／／……あまり……そういうこと言うなよ……／／／」

「んあ?なんでだ?」

天龍 「つつ!／／もういいから!／／」ズズズツツ

「んー?なにか俺悪いことしたか?」

夕立 「相変わらずの鈍感ぶりっぽいっ。」

時雨 「それが提督だ……諦めよう……」

「なんで俺既に敗北者みたいな流れなんだ……」

「「はあっ!?!演習を申し込まれたあ!?!」」

「え?おん。」

あの後、食べ終わって、そのままだべってた時に「あ、演習について聞いたこと」って感じでチヨロつと出したはずなのに思いのほか食いついてきた3人。

天龍「おいおい提督よ!それは一体どういうことだよ!?!」

「知らんよ。加賀が言うには、FAXでいきなり…だとよ」

時雨「相当非常識だね…その人は…」

「んでもちやん正式な演習だと鈴谷は言ってたぜ?」

夕立「……落ちる人は…本当にどこまでも落ちていくっぽい……」

「……んん?」



3人が頭を抱えて頭をフルフルと震わしている。あまりにも不思議な光景だったのでコテつと頭を傾げると、呆れたように天龍が言ってきた

天龍「……………あのなあ提督？これは言わばカチコミみたいな物なんだよ…」

「お前いつの時代の人だよ」

天龍「オレが船だったの頃の記憶は知らねえーよ…大体、テレビつてのがなかったんだから何年かも分からねえーだろうが」

「アツハイソウデスネ」

ネタで言ったつもりがまじ論破されちまった。今後は気おつけよう…

夕立「…演習の事はわかったけど…内容はどんな感じなの？」

「俺が感じ取った感じで言うと、「ハイハイハイ！お主、最近調子に乗ってるの？おっ？おっおっ？人類舐めてんのか？おっおっ？ワシがちとお主を捻ってやるからこの日にやり合おうや！またなあ！」…的な感じ」

天龍「……………殺すか」

時雨「殺しましょう」

夕立「すぐ殺しに行こう」

「何で……には戦闘狂しか居ないんだって待つて待つて！本当に行かないで！待つて！

てかお前ら力強!? 何で俺引きづれてんだよ! 待つてえええ!!」

天龍「黙って居られるわけねえーだろ! オレらが信頼する提督に自分勝手にイチヤモンつけやがって! 殺す! 殺さなきゃ気がすまねえ!」

「待つて待つて! 天龍が俺想いなのはわかったから! 待つて! 本当に待つて! おねがいだからアアアっ!」ズザアアツ

夕立「提督さん、私たちを止めないで。何、安心して。明日には全部終わってるから……」

「何しようとしてるの!? てか夕立ちちゃん力強いね! てかLINEやってるうう!? つてそんなこと言ってる場合じゃねええ! ほんと待つて! ホンマに! ちよ! 待つてんかー!」  
時雨「…提督、さすがに心が広い僕でも、こればかりは許せないかな。だから待つて。何、提督の元に直ぐそのゴミを持ってきてあげるからさ…晒しちゃおう」

「待つて! 本当にそれはシャレにならない! ヘルプ! ヘルプ!! 助けてボノタアアンツ!」

曙「誰がボノたんですって!」バアンツ!

「……………どっから出てきてるんですかあなた」

まさか本当に霞が言ってた事が本当だったとは……

「は？曙にボノたんつて言ったらどこからでも現れる？」

霞「そうそう。いざつてなった時に使ってみな？本当にどっから出てきてるの？つて  
思うから」

「何？壁から頭だけひょっこりはんしてるとか？」

霞「どんな登場の仕方よ!？」

「なるほど……こう出てくるのか……」

曙「誰がボノたんですって!?!」

「とりあえず出てきなよ」

曙「あつ……うん。………はいっ。」

壁を突破つて来ると思ったら、まさかルイージのロケット頭突きみたいに現れるとは思わなかった。船のエンジンなんだと思ってるの?てかどんだけボノたん言われたくないんだ

「とりあえずね、呼んだ理由、あの3人止めて欲しい」

曙「はあ?……仕方がないわね……あんた達!このクソ野郎が困ってるでしょ!さっさとやめなさい!」

「仲間になってくれているのか俺を蔑みたいのかどっちかにしろよ」

時雨「……曙さん」

曙「何よ?クソ野郎が困ってるでしょ?それでもあんたらこのクソの艦なわけ?」

「口悪すぎんか」

夕立「曙ちゃん、ちよつと耳貸して」

曙「は？な、なんでよ？」

夕立「いいから、ほら、貸して？」

曙「は、はあ？」

夕立「……………」ゴニヨゴニヨ

曙「……………」コクコク

「…暇だな。」

現在、夕立と時雨が交互に曙にゴニヨゴニヨと何か言っている。天龍は俺と同じような姿勢で3人を見守ってる。あいつ見た目怖いけど保育士とか向いてんじゃない？

曙「……………」スツ

「あ、話し終わっ」

曙「クソ提督、あんたより最低でクソ野郎な奴…あんたのためにボコしてくるから待ってて」

「おいこら何んて言った」

夕立「提督に宣戦布告した奴をボコすよとだけ」

時雨「提督に哀れにも挑んできた身の程知らずを懲らしめに行く」と

「OKとりあえずお前ら全員落ち着け」

「落ち着きましたか?」

天龍「……すみませんでした……」

夕立「ごめんなさい……」

時雨「ごめん……なさい……提督……」

曙「はい……反省してます……」

演習を仕掛けられたんだから演習で証明すればええやんってのを言っただけなのに

ここまで落ち込んでしまった。まあーこういう時は

「……4人は演習に参加したのか？」

天龍「そりゃ！提督を悪く言うやつをボコしたい！……だけど」

「……およ？」

時雨「……編成が悪すぎるかな…加賀さんと鈴谷さんが出るってことは…火力要員が必然的…私たちみたいな駆逐艦よりも…他に適してる人達が」

「別に？勝てると思うよ？」

曙「………言っとくけどね？あたし達は駆逐艦で、相手は完全火力増し増しの編成よ？ー発でも当たればこっちは」

「なら、当たらなければいい。」

曙「はっ………？」

「何のために陸訓練入れてるんだお前ら…別に当たらなければいい話じゃねえーか。もちろん、当たっても受身を取ればいい。…俺は信じてるのさ。お前らが出来るってのさ。それだけお前らが強いって事を、俺は信じてる」

夕立「てい…とく………」

「負けたら負けただ！今悔やんでも仕方がねえーだろ？だから楽しむのさ！その時を全力で楽しむ！なかなかないぜ？他の鎮守府の子達と演習なんて？………受けてみたくは

ないかね?」

そう言つて、ニヤリと皆に視線を向ける。ハツとした顔になると、クスリと笑い始めると

曙「…ふっ……そうだったわね…あんたは…クソ提督は…そういう人だったわね……」

「どういう事だよ。俺はいつも思ったことしか口にしてねえぞ?」

夕立「駆逐艦でも…分け隔てなく接してくれるところ…ほい。普通なら…駆逐艦は切り捨てるのが普通なんだよ?」

「知るか。無能有能で俺は決めつけたくないんだよ!…そいつにしか出来ない仕事だつてある。隠れた才能を隠したままだなんて…勿体ないだろう?」

時雨「…僕らは、そんなの提督みみたいに特殊能力めいた力は…持つてないよ?」

「俺だつて大したものを持つてないさ。……でも1つ、あるだろ?俺とお前らにある共通点がよ」

天龍「……何だよ。それ」

「……お前らは、人間の知恵を得た」

そう言つと、ハツとした顔をこちらに向けてくる。

「艦のままでは到底知りえなかつた物だ。…それを今、お前らは持つてゐる。…違うか



「？」

そう投げかけると、更にクスリと笑い始める。

「そういうこつた！考える力を身につけたってことは、それだけ自分たちが強くなつたつて言う証拠にもなる！……負けを恐れるなよ。提督のためにーだとか、この際は捨ておけ。心の底から楽しむ事だけを考えて戦えばいいんだよ。いつもみたいに、みんなでワイワイ騒ぐ感じで……いいんだよ。」ニコ

天龍「……提督、オレを……演習に参加させてくれ！」

夕立「……夕立も……夕立も参加させて欲しい！」

時雨「……そんなこと言われて、引き下がるのが無理な話だよ。もちろん僕も演習に参加させて欲しい。……楽しむために……ね♪」

曙「……あたしじゃ力不足……そう思ってたけど、あんたがそう言うならやってやろうじゃない！全力でふざけ倒してあげる！」

「……よし！全員出撃許可よし！日程は先程伝えた通りさ！……全力で楽しもうぜ！」

「「「はいっつ！！」」」

鈴谷「……で、大丈夫ですか?提督?」

「無理……ギブ……死ぬ……歩きたい……」

現在、あれから一週間経ったある日、迎えの車が来たので、その車に乗り込んでどんぶらこーとドナドナじゃなかった。出荷されてるでもなかった。出撃してるとかこれも地味に意味違うね?……まあいいか

加賀「無茶言わないでください。相手の鎮守府まで歩きで行くとすると何時間かかると思ってるんですか?」

「だからって車移動なんてやあだああつ!酔う!吐く!死ぬる!の三拍子セットだぞこの野郎っ!?!」

時雨「だからって僕の方見ながら叫ばないでくれよ……びっくりするじゃないか……」

「そこに時雨が居たから」

夕立「窓際挟んで夕立と時雨の間に提督がいるもんね。そりや、どつちかの窓に叫ぶのは必然だもんね。分かるっばいよ。その考え」

「何真面目に考察してんだ貴様は……てか普通提督って助手席に乗るもんじゃね？なんで鈴谷が助手席なんだ？」

鈴谷「別にいいでしょ……？じゃんけんで席決めただから……文句言わないでっ」

「俺ってじゃんけん弱いってことがわかったよ。知りたくなかったこんな情報……」

車の席でみんなが揉めたので、潔くジャンケンで決めたのだが……俺は完全敗北。助手席に鈴谷、真ん中の窓際に夕立、俺、時雨の順番。その後ろの席には曙、加賀の順番で座っている。てか曙は寝てますね。ちなみに運転手は向こう側から派遣された運転手のうんちゃんだ。俺が勝手にそう言ってるだけけど

うんちゃん「……なんか……すっごい賑やかですね……」

「こんなの日常茶飯事ですよ。逆にそちらの鎮守府はこう言ったことはないのか？……おいこら！時雨ごら！俺のグミとるんじゃねえ！」

時雨「隙だらけの提督が行けないんだよ。……んっ。美味しいね。このグミ」

「……はあ……ほれ。夕立も、やるよ」

夕立「わーいっ！ありがとー！」

うんちゃん「あはは……そう……ですね。こちら……と言つても、ほとんどの鎮守府は恐らく貴方のような方は珍しいと思いますね」

「俺のような……?」

うんちゃん「はいっ。貴方の考えは艦を人として思いやる……そうでしょうか、それは過去の考え方なんです。今は、どれだけ兵器に感情移入をさせないか……それが結果的にぞんざいに扱う……と言つた形になつて言つたんですよ」

うんちゃんはそう語り始めた。……なるほど。時代が変われば、考え方も変わる……か。ガラケーからスマホに、クラブからカラオケに……みたいな物か? いや最後は地味に違うが……恐らくそういうことだろう。

「……そういうあなたは、恐らく人間として接する……に賛成派だな?」

うんちゃん「っ……あはは……そう……ですね。他の鎮守府の方々を乗せることは、この業務に着いてたら多々ありました。……ですが、貴方のように艦娘達と和気あいあいに話し合いながら移動するのは……もう何年ぶりでしょうか」ニコ

バックミラーで確認すれば、少しシワが浮き出ているナイスガイのおじ様はニコリと笑った。

「……やはり、それだけ艦娘に感情移入するやつは愚かと今の時代じゃ考えられてるって訳か……」

うんちゃん「そういう…事ですね。それもきっかけがありました…昔、こちら辺じや有名な提督が居ましてね。…彼は艦娘をまるで我が子のように接してる、とても気さくで素敵な方でした。」

そう言つて、昔話をし始めた。数十年前、深海棲艦が出没した当初の頃、まだ提督の存在が公に明かされていない頃の話だった。ある一人の女性提督がこちら辺に居たと。彼女は、今でいう俺の鎮守府で、艦娘達と日々任務をこなしていた。…そんなある日、ある重大の任務で、彼女は数十人の艦娘が沈没したという。我が子のように思つていた彼女達が海に沈む瞬間を無線で聞いてた彼女は受け入れられない現実だったらしい。

しかも、提督の年齢が今は20歳を超えてなきやならないのだが、彼女はその時はまだ17歳だったのだという。我が子…よりかは、歳近い友達のような関係だったのだろう。…当然、そんな若いヤツが受け入れるはずもなく、自暴自棄になつた彼女は、自分の鎮守府にいる艦娘を全員解体し、姿を消したという。

うんちゃん「…こうして、同じ過ちを繰り返さないためにも…今みたいな方式になつて言つたと…私が知る情報は…これぐらいですかね」

「なるほど…な。…だが、それを聞いたからつて、俺がどうしようかと勝手だ。上が決めたからつて、それに従う通りはねえ。俺のやり方があるからな。」ニク

うんちゃん「っ！…ふっ。暗い話をしてしまいましたね…気分を悪くされたのなら

申し訳ございません……」

「いや……あなたのおかげで新たな目標ひとつ……出来たよ。」

うんちゃん「……と、言いますと?」

「……俺の鎮守府だけでも……昔の鎮守府にしてやるよ」

うんちゃん「っ!……それはなんと……大きな目標ですな」

「大したことないさ。……人間にするのと同じだ。」ポンツ

夕立「んっつ!?!」ビクンツ

「皆が笑って帰れる場所が俺の今までの目標だった。それにただ一つ……」ポンツ

時雨「んんっ!?!……て、提督?」チラ

「皆が楽しくワイワイ騒げる場所……こんな日本の危機が迫ってる中でも……楽しく過ごせる場所を作るが追加されるだけさっ」ニコ

うんちゃん「っつ!!……ははっ……貴方様なら……きつと実現出来ますよ。……私、多く

この仕事をしてますからね。見る目は確かなんですよ」ニコ

「そりゃ、ありがたのお墨付きだ」ニコ

うんちゃん「……着きましたよ。提督殿」ニコ

「ああ。助かったよ。さーてと」

話していて酔いはきれいさっぱり取れた。俺は車から出て鎮守府の中に入る。俺の

後ろに6人が広がる形で着いてくる。ひとつ止まって、皆に目を合わせ…

「んじゃま！ひとつ楽しんでくるか！準備はいいか？」ニヤ

意味ありげにニヤリと笑うと、6人はそれに応じてクスリと笑うと、息びったり元気よく…

「「「「はいつ！何時でも！「「「「」

つと答えてくれた。ニコリと笑って、180度回って、会場である場所に向かって「んじゃ！いっちょ楽しんできますか!!」

そう言って、1歩を踏み出す。

上手く行きすぎて怖いなあ：怖いなあ怖いなあ!後から

(r y

? 「いやはやいはや：わざわざ遠い所から御足労頂きありがとうございます。……  
提督殿?」ニヤ

とてもふくよかな体をしたいかにも「運動できません」って言ってるような体。隣には全然楽しそうじゃない艦娘が立っている。

演習会場に来たそうそう、そう言ってきた男に俺は言葉を交わす。

「わざわざお誘いありがとうございますと。俺は」

? 「君の自己紹介は興味無い。下級の戯言など聞きたくないわ。」

「……そーですか。」

自己紹介を述べようとした瞬間に嫌味つたらしく要らないと言われてしまった。こ  
ういうのはバスや電車に乗る時の意味わからないおじさんお婆さんがいるだろう。そ  
ういうふうな感じに対応すればいいのさ。こつちが折れる：見たいな?

加賀 「……………」スツツ

鈴谷 「……………」ジャキツ



「……何してはりますの?」

後ろからなんかメカメカしい音が聞こえたの振り向いてみる。おいこいつら何武装展開しとんねん。

加賀「……司令官。やはり私は我慢できません。どうかこの醜い豚にトドメを刺す許可を」

「うんダメだね。とりあえず武装を抑えようか」グギギギ

思いつきり加賀の構えてる肩を抑える。全然ビクともしないよこの子。やだあたし、握力弱すぎ?」

鈴谷「離してください提督。こいつは私が直々に屠るんです…提督はそこで見ててください。今私達の提督をぞんざいに扱ったことを後悔させますから」

「ストツプストツプ!とりあえず待て!事実その通りだから!一旦押えて!ヘルプ!ヘルプ!こいつら番犬すぎる!」

とりあえずこいつら2人は特殊な糸で全身ぐるぐる巻きにしてし解決。ふう

「……えーと、こちらの艦が失礼をしました。申し訳ありません」

そうして頭を下げる。

?「……貴様、私をバカにしているのか?…私は大将だぞ?…滑稽にするとはいい身分ではないか?…ええ?」

別に大將が凄いか全然知らんけど、おそらく凄いらうな。…あれ?前にじいさんが元帥が最高とか言つてなかつたつけ?……忘れたからいいや。

「……とりあえず、演習を始めましょう?…私たちはそのためにここに来たものですからね。」ニコ

大將「……忘れてはいないか?……貴様が負けたら、貴様の艦を全てこちらに譲ると……まさか、忘れてるわけでは……なからうな?」ニヤ

夕立「つつ!?て、提督!!」

「あー。もちろん忘れてませんよ。…私の艦は強い。…だから恐れることはありません。私が彼女たちを信じるように…彼女たちもまた、私を信じてくれる…変な不安でコンディションを汚そうとするのは、浅はかな考えだと思いますよ?」ニコ

当然、そんな事どこにも書かれてはいない。おそらく不敬を働いた俺の艦をそのまま奪い取つて、俺に絶望を味合わせたいんだらう。…別に俺も、好きで提督になつたわけじゃない。提督の地位を剥奪されるぐらい何も怖くない。……だが、彼女らをぞんざいに扱おうとするこいつの下にだけは…絶対に置かない。それだけはハッキリしてる。

大將「もちろん…貴様は俺より下。…俺が貴様に出すものは何も無いと思えっ!」

既に敵意むき出しか……ならこちらもそれに従おうか。

「はなからそんなものは期待してない。俺らはてめえーの首取りに来たんじゃねえ。い

つも通り楽しく遊ぶために来たんだ。……てめえーが俺にどんなもの要求しても構わねえーさ。……ただこちらも、些細な願いだけをお願いしたいな」

大将「ほう？……まつ！それぐらいなら構わん！……言ってみろ？それだけ俺の艦に勝てるとは思えんがな」

笑いながら俺を見下してくる。俺の要求はただ一つさ

「演習は艦と艦での模擬戦だ。……そこにただ、俺の艦隊の方にだけ、指揮をとる司令官を追加したい。指揮は俺だ。……下級なんだ。それぐらいのハンデはくれなきゃ……俺すぐに負けちゃいますよ」ニコ

大将「はっ！流石は下級の雑魚が申し出しそうな内容だな！それだけで戦況が覆ると！おもうなよ!!」

そう言つて、男は待機室……というか、観客席に歩いていった。男の後ろに着いて言った艦達は、俺を申し訳そんな顔で見つめていた。

「……同情なんていらねえーよ。全力でかかってきな！てめえーらの司令官の教育が強い！俺が指揮する艦隊が強い！……楽しんでいこうぜえ？」ニヤ

大将「聞くな。ただの負け犬の遠吠えだ」

「……チエックメイトだ。胸糞わりい爺さんよ」ニヤ

俺は小さくそう呟き、俺らも反対の扉に向かう。

『それではこれより!西鎮守府と、雨之鎮守府との模擬戦を行う!西鎮守府が勝利の場合、雨之鎮守府の解体、艦娘の委託、雨之鎮守府が勝っても何もなし!双方!リーダー艦の名前を述べよ!』

金剛「西鎮守府、将艦!金剛、デース!」

夕立「雨之鎮守府将艦!夕立っばい!!」

大将「はっ！将艦が駆逐艦！それも雑魚の夕立じゃないか！……やはり、下等な生き物はこうしたミスを繰り返すのだな……全く愉快だ！」

「って……おっさんは思ってるんだろうな……悪いがおっさん、てめえーの相手は艦娘なんて優しい生物じゃねえ。……俺らと同じ、人間だよ。」カチャカチャ

プールサイドにセットされたマイクや電子機器をつける。同時に無線式のヘッドセットを装着する。

『あーあー！こちら提督、マイクチェックー』

夕立「こちら夕立！聞こえるっばい！」

時雨「同じく問題ないよー」

『よしきた。作戦は先程伝えた通りだ。』

鈴谷「本当に…よくもあんなふざけた作戦を思いつけるわね…」

『いやー!照れちゃうなあ』

鈴谷「貶してんのよ!」

『…まっ、もちろん作戦は上手くないかないのが100パーセントだ!臨機応変に対応出来るよう、何かあつたら遠慮なく俺を頼ってくれ!無論!俺もお前らを全力で頼る!!』

天龍「かつこいいこと言ってるのか情けないこと言ってるのか…ハッキリさせたらどうなんだ…?」

『何事も経験!なーに!ちよつと俺のこれからの人生とお前らの人生がかかっているだけだ。気にすんな気にすんな』

曙「気にするわよ!このクソ!!」

『よし!元氣な罵倒を貰った事なんでね!…楽しんでいこうか!』

そうして、無線が終わる。

曙「つたく…あのクソ提督は…こんな無茶苦茶な作戦考えられない…」

鈴谷「でも、私達には思いつかない、実に提督らしい作戦内容です。シンプルかつ大胆…的なの?」

天龍「なににせよ、これはオレらと提督の命がかかった模擬戦だ!楽しく勝とうぜ!」

加賀「…簡単に言ってくれますが…本当に先のプランで行くんですか?」

夕立「何よ加賀さん！提督さんのいうことが信じられないっばい!!」

加賀「い、いえ…そうでは無いん…ですけど…」

時雨「……………僕も不安さ。でも提督は、自信を持つてこの作戦を組み立てた。それもあんな短時間で。…提督が僕達を信じてくれるように、僕達も提督を信じよう。それが今、僕達に出来る最高のやる気の材料さ。…………提督が僕達を見てくれる。そう思うだけ…やる気が出ないかい？」

加賀「っ……………ふっ。無駄口でしたね。忘れてください」ニコ

『それでは!!始め!!』

「さてと、始まったか。さあーとと、驚いてくれよー?」

金剛「……………」

比叡「本当に…やるんですか？」

金剛「やらなきゃ…私らが捨てられるだけです。それに…向こう側の提督にも言われませんでしたでしょう。全力でこい…つてき。」

榛名「……………」

霧島「私の推測からすれば…相手側の勝率は…たったの5%だけです……」

陸奥「それでもやらなきゃならないのがあたし達よ。」

長門「ああ。」

比叡「……ですが……」

霧島「つつ！皆さん警戒！こちらに物凄い勢いで向かって来てます!!」

金剛「つつ!? 誰です!?!」

霧島「あれはつつ……!?!」

夕立「あ! 見つけたっぽーい! それじゃ! 戦闘開始っぽい!!」

時雨「さあ! 止まない雨は! 止ませちゃおうね!」



曙 「ちよ！あんたらああ！早すぎんのよ!!」

霧島 「将艦を含めた駆逐艦3人！こちらに急接近!!」

長門 「なつつ!?将艦がわざわざ!?!」

金剛 「っ！いいから迎撃準備でーす!」

夕立 「あははっ！全員ちゃんと固まってるっばい！提督さんの言う通りだっばい!!」

加賀「……将艦事速攻をとる……ですつて?」

「そつ! 初動の初期値は決められている。相手が分散して自陣を固められる前に、機動性の高い駆逐艦3人に突撃してもらおう。」

天龍「んでも提督、それだと将艦を変えた方が」

「いや、将艦は夕立で行く。この中でのスバしっこさなら夕立がナンバーワンだからな。駆逐艦の中でも火力が出る時雨や曙も適任だ。それに…夕立だけじゃなくても、球を避けるのは得意だろ?」ニヤ

時雨「ギク……それ……どういふこと……かな?」

曙「今絶対違う球を想像したわよね!? 悪かったわね! 霞の野球ボールは早いのよ! ばーか!」

「つて訳だ！」ニコ

鈴谷「……艦がただ投げるボールと……武装から発射される球の速度は桁が違うんですけど……」

「そこはもう！勘だ！――発当たつたらおしまいだと思えよー？……当たつた奴は昼飯抜きな！」

夕立「ぜ！絶対に避けるっぽい！」

時雨「さ、さすがに演習後のご飯抜きは……勘弁かな……うん……」

曙「あんたさいつてい！？それでも金〇ついでるわけ！？」

「女の子が気安く金〇つて言うんじゃありません……」

夕立「あははっ!遅い遅い!!」

時雨「本当に当てようとしてるのかな?…軌道がバレバレさ!」

曙「危な!?!うわああ!?!危なああいつ!」

榛名「つつ!?!ぜ、全部よけられちゃってますう!」

陸奥「…疎らな機銃でもダメ…長門!」

長門「主砲用意…発射アア!!」

ドカンっ!と豪速球で夕立めがけて飛んでいく。

長門「よっしや!とつつつ…!?!」

天龍「……ふっ。提督の言う通りだ。……今の所は……プラン通りだな」  
夕立「グツチョブ♪天龍さん！」

天龍「砲弾はオレに任せな！機銃ぐらいなら……」

紫色のブレードを構えて、目を瞑る。

天龍「オレでも……捌ける。提督の稽古より……簡単に……」スウウ

霧島「1人！1人どっからか増えました!？」

金剛「落ち着くです！仮に増えてもこちらは6人！相手は4人で！確実に仕留めるですよ！」

加賀「……ふっ。司令官……貴方はどこまで……」スパンツツ

榛名「キヤアアツツ！」ドカンッ

陸奥「っ!?榛名!大丈夫ですか!?!」

榛名「すみません…油断してました……」

『榛名被弾!判定、中破!砲塔に損傷あり、機動力低下!』

長門「つつ!!そこかああ!」ダダダ

空中に向かって機銃を放つ。小さな爆風が当たりを包み込む。

比叡「今のは!?」

霧島「光学迷彩型零式!?!なんで!?!それは前に開発出来なかつたって!」

金剛「そんな事は今はどうでもいいです!目の前の敵に集中してください!!」

鈴谷「……通達。敵のほとんどがパニック状態になってます。…畳み掛けるなら今よ！」

天龍『了解！』

夕立『分かった！暴れちやうつポーーイ!!』

時雨「さあ……本降りはここからだよ！」

曙「か！活躍したアアい！」

鈴谷「加賀さん、空爆は落とされてしまいました。ですが機銃の位置は割れていません。そのまま待機命令をお願いします」

加賀『了解したわ。頼りにしてるわよ。』

鈴谷「頼られてあげます♪……まさか、私が第2の司令役なんてね……でも……あんなこと言われたら……納得せざるをえない……かな♪」

「さてと、今の作戦のままだと、ただの援護無しの無謀な突撃になってしまう!」

天龍「そりゃな。」

「そこで天龍君!」

天龍「へ?お、オレ?」

「そう!君には駆逐艦の護衛役を頼むよ!」

夕立「おお!頼もしいっほい!」

天龍「そ、それは構わねえーが…具体的にオレは何を…」

「いい質問だねワトソンくん」

天龍「誰がワトソンだ!」

「天龍には気配を消していざと言う時に何時でも動いて欲しい。…天龍にしか頼めない仕事だ」



天龍「オレにしか……ああ！やる！やってやるぜ！提督！！」キラキラ

「よし！そして加賀、加賀は得意の特急射撃で何時でも援護できる万能機銃君と爆撃くんを向かわせてくれ。こちらがその零式君ね。」

そう言つて手渡す。零式改。妖精さんに俺のイメージを伝えたら、その名前と共にわざわざ工房から届けてくれた品だ。

加賀「は、はあ……これただの零式……」

「聞いて驚け！やつて笑え！そいつは光学迷彩付きの超万能零式君だ！それに、加賀の練度なら、そいつらをホバー待機するなんて余裕のよっちゃん！スルメイカだろう！」

加賀「色々突つ込みたいけどあえて黙つてあげて……それよりも、光学迷彩……？」

「そつ。よく見るだろ？光吸収して背景に溶け込むあれ。それ。」

そう言つて指を指す。

加賀「……はっっ!？」

今自身の手元にある弓矢を驚愕したように見つめる。

「それで、加賀には敵の上空でホバー待機！そして！射撃の命令をおお!!…鈴谷！君が第2の司令官だ！」

そう言つて光学迷彩型偵察を手渡す。

鈴谷「へっ…へっ!？」

「鈴谷は一番俺の隣にいた艦だ!当然、俺の考えもそこそこ分かるだろう!…基本的にはその偵察機で敵の観察、必要があれば無線で仲間に通達!…裏方作業が地味だし活躍したいと思う気持ちはあるだろう。…だが、裏方の人達が居るからこそ、表の人達が輝けるんだ。表の影幕者、それが鈴谷だ。…君が今日の司令官だ。」ニコ

／／／／／  
鈴谷「つつつ／／／／／…は、はいつ／／／／／て、提督の為に私…頑張りましゅつつ／／／」

加賀（囁んだ…）

曙（囁んだわね…）

夕立（囁んだっぼい?）

時雨（囁んだね…）

天龍「んあ?今鈴谷囁まなかつぶべらああっ!?!」

「…どうした急に」

加賀「提督は気にしないでください」ペシペシ

時雨「そうそう。気にしないで」ペシペシ

天龍「ちよ!痛い痛い!ペシペシって威力じゃない!大破する!試合前から大破する

!!痛い痛い!!」

大将「おの…れっ!!おのれおのれ!!おのれええつつ!!下級の提督があああつつ!!」

「悪いね。妖精さんの言う通りだ。妖精が入ればいるほど」

大将「くそっ!クソが!」

「戦力が倍になる。……特殊妖精さん様々だ。こりや金平糖増量キャンペーンだ。」カ  
チャ

無線のヘッドホンを頭から外す。最後に聞いたのは、鈴谷からの奇襲成功と、今もア  
ナウンズに流れてる大破アナウンズだけだ。

金剛「……………」

比叡「油断………しましたっつ………」

『戦艦 比叡! 砲弾大破! 戦闘継続不可能! 大破!』

金剛「……これが……本物提督……デスカ……」

長門「くつつ！ああああ!!」

陸奥「ここまで……か……つつ」

『戦艦 長門！並びに戦艦 陸奥！エンジン損傷！継続での戦闘不可！大破！』

霧島「すいま……せんつつ……私の……計算が……」

榛名「あうつ……油断……してました……」

『戦艦 霧島！戦艦 榛名！砲弾直撃！大破！』

天龍「さあて？これでしめえーだ。」チャキ

天龍は金剛の背中にブレードを構える。夕立や時雨も同時に機銃を向ける。遠くで

曙はコケていた。

金剛「……カンパイデース……どうして……そこまでつよいですか……?」

金剛の疑問に、三人はあっけらかんと答えた。

『提督が信じてくれる。だから信じる』……と。そう当たり前のように

金剛は悟った。それは負けるわね……と。

艦娘は守りたいものを見つけて初めて真の力を発揮していく。

2つの鎮守府には、明らかな違いがあった。

信じて守りたい存在がいるか、いやいや従ってその存在に尽くすか……たったそれだけの違いだった。

『模擬戦!勝者は!雨之鎮守府!!』

お久しぶりの登場ですね！あいででで！！

演習を終えて、さあー帰りましようつてなつた時

大将「貴様つつ!!よくも私に恥をかかせてくれたな!？」

別に恥をかかせた覚えはないんだけどなあ…勝手に啖呵切つて勝手に轟沈しただけなんだよなあ…

「恥…?貴方のような醜い豚にも恥なんて言葉があるんですね。以外ですわー」  
ぷつと鼻で笑いながら小馬鹿にしてみる。顔真っ赤にしてらい。大の大人がみつともない

大将「貴様つつ……貴様アア!!」

なにこれ逆ギレ?いやー言うことなく怒ることしか出来ない小学生みたいになつちやつてますよ。

手を出そうと俺の方に駆け寄ってくる。あ、まて、そんな事したら

「ちよま、ストツ」

大将「しねええええつつ……えええ?」

鈴谷「……あまり…私達の提督を……」

夕立「…馬鹿にしないで欲しい…かな?」

大将「ああああああ!!」

……言わんこつちやない。そもそも今まで手出ししなかったから、艦と艦の戦いだつたからこそこいつらが大人しかっただけ。個人の、しかも負け惜しみにも過ぎない行為をされたら、こいつが大将だろうが人間だろうが…こいつらには関係なくなつちまうんだよ……

大将「あああ!私の腕がつ!腕がアアつ!」

天龍「…んだてめえ?腕が少し切れただけで大袈裟な奴だな…その口も切るぞ…?」

大将「ひつ…ひいつ!!」

「天龍?」ニコ

天龍「…分かつてるよ!提督がそんな事望んじやいねえーのは!わざわざそんな殺人犯す真似しねえーよ!」ニコ

にしては俺が止めに入らなきゃ危なそうな目をしていましたけど。完全に首を跳ねる体勢してたからね?

「…加賀も、弓具を納めろ。…相手は人間だぞ?」

加賀「……………スツ。…命拾いしましたね。私達の司令官に感謝してください」

何真顔で恐ろしい事言ってるのこの人!?完全に殺し屋のそのセリフだよ!?



時雨「……………」

「…おお。時雨は案外何もしないタイプなんだな」

時雨「僕をなんだと思ってるんだ…しないよ。僕は提督がそんな事望んじやいないつてはなからわかつてたからね。…でも…そうだね」ギロツ

大将「ひいつ!!」

時雨「…僕だって、皆と思ってる気持ちと同じさ。世の中には、あんなに愚かな人間も居るんだね。…僕らが慕う提督を…よりもよつて僕らの目の前で愚弄する愚か者なんて……………」

大将「つつつ!!」

もうやめたげで、目だけで相手殺そうとしないで…てか何時からそんな睨み技みたいな習得したの?あれか?剣道か?てことは夕立もか?夕立もなのか!?

「あれ?てか曙は?」

夕立「曙ちゃんならさつき演習終わった時にトイレ行つてたよ?」

あいつ試合中も結構自由だったよね?何?もしかしたらこのメンバーの中で一番まともなの…あいつなの?意外だわ

曙「…………今無性にイラツと来たんだけど…」

時雨「噂をすれば…だね。」

曙「やーっば噂立てられてたのね。通りでムカツとしたわけね。」ジツ

そう言つて何故俺を見るんですか。俺じゃないかもしれないじゃないか!なんで俺をそんな容易く特定出来るんだ!!

曙「だつてクソだし」

「おいこら。てか俺声に出してねえぞ」

曙「そんなもん…クソ提督の表情見れば分かるわよ…」

うそつ…?俺そんなに顔に出やすいつ…?はっはっはー!…抑えよう(小並感)

鈴谷「それじゃー皆さん揃つた事ですし、帰りましようか♪…演習…ありがとうございまして?」

大将「ひいっ!?!」

何故だろう。鈴谷の笑顔がぜんっぜん笑顔に見えない。むしろ弱者を屠らんとばかりの強い殺気が凄い。

「…鈴谷さん?」

鈴谷「はいっ♪なんでしょうか提督?♪」

WOW。これが営業スマイルって奴なのね。つてなわけあるか。めっちゃ心からの笑顔やん。何?そんなにあのウザイの?ダメよ?我慢つて言葉覚えなきや。なんで

も「気に触るわ。殺す」なんて考え持ってたら俺の周り血祭りパーリナイになっちゃうでしょ？もっと自重と言う言葉を覚えてください。

天龍「んなもん：わかってるよ。だからオレらは提督の言葉でやめもするしブレーキかかってるんだろ？」

もう普通に心の声読まれてるやん。もうずっとこのキャラでいい？喋らないけど皆の心の耳には聞こえてるみたいな感じがいい？

曙「ダメに決まってるでしょ」

「デスヨネー」

まあーなんかやかんやありながらも、無事我が鎮守府に帰ってこれました！いやー白熱しましたねえー。終始なんかボッコボコにしてたけど。そもそも構成が悪かったね！当たれば一発大破判定貰うけど

：ま、世の中には「当たらなければどうということはない」という言葉がありますしね。要はスピード型回避キャラが最強ってね。まあー夕立達は頭おかしいぐらい避けるけど。

え？曙？……あーあれね。まぐれ回避ですね。恐らく幸運EXに違いない。間違いない（確信）

ちなみに将艦を夕立にしてたけど、もしかしたら最後列にいた鈴谷でも良かったかもしれないとちよつと後悔。ま、まあー将艦が開幕凸つてきて動揺を誘うつて作戦にしようとけば無問題。なお、直ぐにバレる嘘だった模様。なんでやつ…

江風「で?その演習つて話、私たち聞いてないんだけど?」

山風「それよか最近出番が少ない気がするんだけど?」

『どういふこと?』グギギギ

「痛い痛い痛い。てか山風ちゃん出番つて言わない。目からタイが落ちるつてあいたた

たた！出る！目からウロコどころか頭からたい焼き出る！いででで！！」

演習から3日経過したそんなある日、山風ちゃんと江風ちゃんが突撃インタビューと称して頭を締め付けられてる。くっそ痛い！てかまじで出る！たい焼き出る！そのまま海に逃げちゃう！俺のたい焼きイイ！！

江風「ごめんなさいっ……」ビクビクッ

山風「も、もうしません……」ビクッ

鈴谷「はいつよよろしいですよ♪」ニッコニコ

皆の悪魔じゃなかった。皆の教育係鈴谷さんが颯爽と現れて江風と山風を締め上げました。日に日に俺に暴力という名の甘えを尽く悪魔のスマイルじゃなかった。教育スマイルで構成させる鈴谷さんまじりスペクト。でもその笑ってない笑顔で皆を恐怖に奮い立たせるのはやめて頂きたい。

鈴谷さんその行為裏でなんて言われてるか分かってます？デス・タイムって言われてるんだからね？ほんっと、自重して？

「鈴谷ー、ありがとなあー。もういいから休暇を楽しんできても結構だぞー」

鈴谷「……べつに……私は休暇なんていらぬのに……」

演習組は少しの間休暇をもうけた。いやまあほとんどのやつ…てか全員に「そんなのいらない!」なんて言われたけど、最近あの子たち俺のために働きすぎなので流石にブラックすぎるから休暇。ちなみに霞に関しては

霞 「つまりその間私がクス提督の秘書官ね!!」

なんて言ったら曙につねられてた。びよんつと伸ばされながらジト目で「い、いふあいつ…」って言ってたな。結構だな可愛かったなあれ。熊野に聞しても

熊野 「んじやつ…久しぶり本気出しちやおっかなあ♪」

とか言ってたらしい。鈴谷に悪魔みたいな目線を飛ばされて「すいません冗談です許してください」って土下座してる光景が見えたのは恐らく私の気の所為なのだろう。いや気の所為であって欲しい。

山風 「こつ…怖かったあ…」

「安心しろ2人とも。実の所俺も怖い。」

鈴谷が退出した途端に肩の力が抜けてソファアーに伸びる2人。お茶を2人に出して、

俺もソファ―に座る。

江風「…本当に…あの特殊能力どうにかならないの…？」

「あれ無意識らしいぞ」

山風「……怖いっ……」ガクブルツ

マジで本人いわく、ただ普通に説教してるだけなのに妙に大人しいのよね…そんな正論言ってるかななんておとぼけ顔で言ってきた。こいつまじかって内心思った。

「それより演習の件だよね。…あれね、本当は2人にも声かけようとしたんだよ？でもね、声かける前に人数集まっちゃったからさ。」

江風「……そういう事なら…仕方がない…のかな？」

山風「仕方がなくないよ!!その話を知らされてたら私がパパのために席奪つてたもん！」

席っていうのは…おそらく演習メンバーの席の事だろう。まあ別に推薦つて訳でもないし、気まぐれで集まった6人だったから無くはない話だったんだろうけど…

江風「ま、まあ…私もそのつもりだったけどさ…でも仮によ？そうなつてた場合…私たちでも勝てる人…あそこに居たかな…？」

山風「………曙ちゃん？」

だつてよ。曙

曙 「へつつくち!!」

霞 「わあおお…今回の噂は特大ね…」

曙 「これは…おそらく提督じゃないわね…」

霞 「いやなんで分かるの!?!」

曙 「んー…勘?」

霞 「…なんか演習に参加してから妙に成長したよね…」

曙 「…まあ…それだけいい経験だったからね♪」

霞 「……いいなあ…」

曙 「霞も出れるわよ!…絶対にね♪」ニコ

霞 「……そうだと…いいなあ…」



江風「むうう…」

山風「ふみゆうう……」

「ちなみに聞くけどさ、普段2人は何して自主練してるの？」

前に2人がキャッチボールしてるのを見た事があるから、それ以外に何かあるのかな

江風「ん…特に変わったことは…」

山風「してないよね…？」

「ふうむ…でも二人共充分強いと思うけどなあ」

俺のスカウターがピンピンだぜ。あ、今違うスカウター想像しただろ。男が誰しも持つてる息子じゃないからな。勘違いしないで頂きたい

江風「…そう？…あ、でも変わってる訓練って言ったらあれじゃない？」

山風「あー…あれかもね」

「……アレ?」

何ですか?下ネタですか?

江風「こればかりは見た方が早いかなっ…着いてきて♪」ギユツ

「うえ?ど、どこに?」

山風「いいからっ♪きてっ♪」ギユツ

2人に両手を抱きしめられながら、小走りでそのある場所に向かう。

江風「強いて言うならこれかな」

山風「これだね」

「何この立体機動装置練習用みたいな装置」

そこには金属製の紐で吊るされてる固定ベルト。まんま立体機動装置練習用やん。

江風「いやー実はさ、私も山風も、素晴らしいほどに平衡感覚がないんだよね!」

山風「あううっ…／＼」

方や大爆笑、方や恥ずかしさでモジモジしてる。…個性あるっついいいよね。素晴らしい。

「んで?これでどう訓練するんだ?…何となく察しは着くけどさ」

江風「まず手本で私が見せるね!」

つと、ベルトを装着して取り付けられてる上げ下げボタンを山風が押す。江風がいいよーと言うと、山風が反対側に移動する。

なるほど。こうして平衡感覚を補うと……たしかに立体機動装置も絶対的平衡感覚を有する訓練とかキースが言つてた気がする。てかこれ大丈夫？今の考え結構他方面に危ない気がするんだけど。……気にしたら負けだな

江風「おっけい！慣れてきたよ。山風！スイッチオンっ！」  
ん？スイッチ？

山風「えいっ♪」

とても可愛らしい掛け声ですね。その瞬間

江風「んあっ！……あああああっっ」ビクッビクッ

「江風ええええええ！」

山風「大丈夫大丈夫。電流が流れてるだけだから。」

「いや何が大丈夫なの！？てかなんで電流っ！？」

山風「少女漫画にあつたの。性感帯を刺激され、それを我慢する事で次のフェーズに行きやすくするって」

「それちゃう！それ同人誌や!!それ行きやすくじゃない！いきやすくや！て何言わせんなん!？」

山風 「パパが今自分で1人言ってたけど…」

「てかそんなん誰から借りてんの!」

山風 「え?…えーと…誰だったっけ…たしかああ…」

江風 「んあああつ!あああああつ!!」ビクンツビクンツツ

「ストップストオオオツ!!これはあかん!放送コードギリギリ!!カメラさん巻いてえええ!!」

江風 「んはつ…はあつ…はあつ…と、…まあ…この…ようにつ…平衡感覚を…保ちながら…性欲…もつ…満たせる素晴らしつ…いいつ…装置つて…わけつ…はあんつ／＼ビクンツ

「よし、とりあえずお前らの思考回路がバクった事はよく分かった。とりあえずこれは撤去な」

山風 「どうして!?!これ気持ちいいのに!?!」

「それがいけんの!気持ちよくなつちやダメでしょ!?!」

江風 「だ…だっひやら…／＼司令官が責任…取つてくれる…のお?／＼」  
「へ?」

山風「あ！確かに！これを撤去するってことは、パパ直々に気持ちいい指導してくれ  
るってことだよね？♡」

「よし撤去はやめようかな。程々にするように。分かった？」

江風「ふぁーいつ♡」

山風「ええー！いいじゃんいいじゃん！パパのスペシャルテク堪能したーいつ！♡」

「鈴谷さん連れてこようか？」

山風「あちよ…勘弁してください…鈴谷さんだけはダメ…それこそ精神的のダメージ  
ががが…」

「だったら俺に欲をぶつけないこと。オーケー？」

山風「むうう…わかったよパパ…あ、でも私が成長したらしてね？♡」

「……………鈴谷さー」

山風「わああ待つって待つて！！冗談だから！冗談だからああ！！」

「まるで冗談を言ってる顔には見えなかったぞ…」

山風「そつ…それはああ……………／＼」

江風「…まああれだもんね。毎晩山風提督のこと想ってシてるもんね。」

山風「違つ!?!／＼そ！それを言うなら江風ちゃんだつて!／＼」

江風「ばっ!?!／＼言うなバカ！そらそりやするでしょ!?!／＼」

「この話はやめようか」

山風 「だいたい江風ちゃんはいつも激しs」

「カメラ止めろおおお!!」

そうして、事なきを得ました。その後の話はご想像にお任せします。

元々工房ってこんな感じなんすね！なんか静かですnee  
！ギヤラル（（殴

「ほう……」が元々工房だった場所か……

鎮守府の中でもあまり……というか全然来ないと言つても過言ではないある廊下の  
いっちゃん奥の部屋。そこには硬い鉄扉に閉ざされた部屋みたいな場所に来た。

そもそもなぜ俺がここに来ているのか……それは言わずもがな、山風から聞いたあの変  
な装置を作った張本人。それがここにいるらしい。

なんでも工作を得意とする艦らしい。まあ、補給艦がいるぐらいですし、工作艦が  
いても何ら不思議ではない。

名前は明石と言うらしい。これ今更に思ったんだけど、皆さん元々存在していた艦の  
名前ですよ。俺社会とか地理とかさう言う世界に関する勉強逃げ続けてここまで来  
ただけど。全っぜん分らない。

「失礼しますっ！」

コンコンつとドアをノックしてから中に入る。ふむ。中はなかなかメカメカしいで  
すね。そりやそうか。元々工房なんだし……

「…ありや?もしかしてお出かけ中なのかな…?」

玄関らしき場所からではあまり中の構造が分からない。少し申し訳ないが中にお邪魔させて頂くとしよう。

「明石さんってここにいらつしやいますか…:…:~?」

俺はそおっと部屋を覗きながら見る。地面にペンチを持ちながらうつ伏せに伏せてるピンク髪の女性…次の瞬間…

? 「あつ…あああつ!」

「つ…:…:~?」

? 「解体いいつつ!」

「うぎやあああつ!?!」

野生の解体に遭遇した! (○)



明石「ごめんなさい！ごめんなさい！私提督様なんて思わず！先程はとんだ無礼を！ごめんなさい！！ごめんなさい！！」

「いっ…いいいって…ちよつと口から心臓ポロリするかと思っただけどなんともないから気にしないでいいよ」

出会った瞬間、思いっきり俺へと抱きつきわんわんと泣き始めたので慰めていたら、突然我に戻ったのか俺から距離を取ると謝り始める。…こう感情が豊かなのね。

そう言えばふと気になったけど最近爺さんが話しかけてこねえーな…まあー有難いのだけども。

明石「…?!?私の知ってる提督様じゃない?!?」

いきなりガバツと俺の顔を見上げると、そう言ってくる。

「ありや？俺確か全員に挨拶した気がするんだけど…」

明石「?!?!す、すいません!?私その時忙しくて！その出れなくて…」

「あーそういう事ね！なるほど理解。あ、そうそう、山風か江風が来た気がするんだけど、覚えてる?」

明石「えっ?…あつ…ああ…来ました…けど…?!まさか2人を解体!」

「しないしない!しないから!一旦落ち着いて!聞きたいことがあるんだ!」

明石「へあつ…き、聞きたいこと…ですか…?」

「そ、そうそう…江風か山風が前にここに来て君に何か依頼しなかったかな…つて」

明石「あー!それなら作りましたよ!なんでも2人は平衡感覚がないから鍛える装置が欲しいと要望があったので!それに見合った物を自作しました!…えーと確かここに…!」

いきなりハイテンションになったかと思うと、ガサゴソと漁り始める。

明石「じゃじゃーん!これは試作品1号!これは少し平衡感覚を鍛えるには疎かだと思つて却下されちゃつて…でもまあ、完成出来たので!私的にはとっても満足です!」ニコ

お、おう…こりやまた濃いキャラが来ましたね…

明石「…はっ?!ご!ごめんなさい!わ、分かりませんよね!こ、こんな事言われても困りますよね…ごめんなさい!」

「いや構わないよ。明石にとつてもものを作る事がそんなに楽しい事だと知れて安心したからさ」ニコ

明石「……………?まるでその言い分だと提督様も何かお造りを……………」

「……明石に頼みたい事がある。こう言うのを頼めるかな？」ニコ  
そう言つて予め作成した設計図を手渡す。

明石「つつ!?わ、私が!?いい、いいんですか!?その!えと!これはっ!」

「いいさいいさ。山風や江風から話を聞いた時、明石に頼もつて決めて持ってきたものだからさ。いくら失敗しても。だから…頼めるかな?」ニコ

明石「つつ!は!はい!!明石!提督様に頼まれたので!誠心誠意!作らせていただきます!!」

パアアつと笑顔になると、そうウキウキ気分で作り始めた。

「ちなみに様付けしなくても、普通に提督でいいからね?」

明石「つつ!……いい、いいんですか?…その…私はただの艦であつて…」

「そんなの関係ないよ。一緒にこの鎮守府で暮らす仲間さ。堅苦しいの抜きに、ラフに接してくれるとありがたい。よろしく頼むよ?」ニコ

そう言つて俺は手を差し伸べる。少し驚いた顔を見ると、ニコツと笑う明石

明石「……提督は、変わり者なんですネ…」

「ははっ!よく言われるよ」ニコ

明石「……っ♪はい♪よろしくお願いしますっ!……まあー私に出来る事なんてあまりないですけど………」

「お?それなら助っ人呼ぼうか?」

明石「…ほへっ…?助っ人?」

「ひまなやつうう!」

そう叫ぶと、ガチャリとドアが空いて

「…:…呼んだ?」

明石「なっ!?!妖精さんっ!?!」

「あれ?今日は1人だけ?」

「他の妖精さんなら皆寝てるよ。私はたまたま散歩してたら呼ばれたから来たの。」

「ありやつ…迷惑だった?」

「ううん?むしろ提督に頼られて嬉しいよ♪…それで、私は何をすればいいの?」

「明石と一緒に物作り。」

「合点承知之助!」

明石「承認早っ!?!」

「ネタ古くない?」

「私の中では最近」

「あー…:…そうか。」

「今確実に引いたよね?」

「引いてない引いてない。」

明石「ちよっ?! 提督?! 妖精さんと会話って?! へっ?!」

「あ、そう言えばここの中にも数人しか分からないんだっけか。ほれ、挨拶しとけ。」

そう言つて、妖精さんに紙と妖精さん用に作ったペンを手渡す。すると、カキカキとかいて

明石「妖精さんが書いてるっ?!」

「そういやこれも不思議な光景なんだっけか。夕立が興味津々に見てたっけ。」

（初めまして。私は提督さんに依存してる妖精の1人だよ。サポートなら任して!）

明石「凄っ?!」

「て事なんで、完成したら妖精さんに連絡してくれれば、妖精さんが伝えに来てくれるから。あ、なんならこいつこき使つて構わないからね。」

そう言つて、俺の肩にチョコンと座つてる妖精さんの頭をつつく。

明石「そっ?! そんな事?! 妖精さんに嫌われるのにつ?!」

さらに明石はメモに書かれた言葉に啞然とした。

（バッチコイツ）

「……まあそういう反応だわな。見飽きたけど。」

口をパツカーンと大きく開けて、完全に停止する。ほとんどの奴らこうだからな……な

んかこう…見飽きた。

そうして俺は、あとは妖精さんに任せて、部屋から出る。

『わああっ!妖精さんまつてまつて!…っ!?す、凄いつ…!!これは…私も負けられませんね!!』ガコンガコンッ

「…ふっ。上手く行きそうだな」

ドアにつけていた背を離して、そのまま歩き出す。

明石&妖精さん…これは最強戦力の予感っ!ピンピンですねぇ!

「あつ、腹減った。食堂行こ。」

廊下に取り付けられていた時計に目をやると、既にお昼時だった。そりやお腹も減るか。

俺は食堂に向かって歩き出す。

天龍「……んっ？おお!!提督!うおおい!!」ブンブンツツ

「はっはっは!天龍くん!ここは食堂なのであまり大袈裟な反応は辞めていただき  
い」

天龍「いいじゃねえか!こまけええこと気にすんなって!……あ、そうそう!新しい  
メニューが追加されてるぜ?なんでもなあ赤城が逃げ出すレベルだとか!」

「へえー。そうなのか」

申し訳ないが、赤城って誰です……?」

天龍「まああの赤城が逃げ出すってことは、相当な…それこそゲテモノ料理に」  
「そうなのかあー」ポチッ

そう言つて、カランカランとNEWとついた札が落ちてくる。

天龍「……提督、オレの目が腐ってるのかな?なんか黄色の札にNEWつて着いて  
る気がするんだが…」

「天龍くん、君の目は素晴らしい目だ。その目が腐ってるわけがないだろう?」

天龍「…あーだよな!そうだよな!…じゃねえよ!?オレの話聞いてたか!」

「あーそりやもちろん、右耳から左耳にちやーンと出ていったよ。」

天龍「それ聞いてない!聞いてた内容そのまま左耳から出ちゃってるから!!」  
「でーじよーぶでーじよーぶ。ゲテモノノって言っても虫までなら大丈夫だから。」

天龍「そういう問題じゃねぇ!?あちよ!提督!？」

間宮「お待ちせしましたー♪」

「おまたせされましたー」ガシッ

間宮「つつ……♪」ニコニコ

「おかしいなあ。間宮さんの手からトレーを引き離せないんですけどー」

間宮「あらあら♪おかしいですね♪接着剤でも塗っちゃったかしら♪」ニコニコ  
「わああすごい。本場の料理人は手から包丁が離れないために接着剤をつけてるんです  
ねえー」

間宮「あはは、そうなのよ♪これがまた良くってー♪」

「……………いい加減手を離そうか間宮さん」ニコ

間宮「……………」ニコニコ

「……………間宮さん?」

間宮「……………なり……………せん」



「へっ?」

間宮「なりませんっ!!こんなお料理をよりによって提督様にお出しするなど!!それこそ反逆罪で一発ポーンです!!」

「そっかそっか。じゃー学べたね♪……俺が好奇心が高いプレイボーイということに……ねっ!!」バツッ

間宮「ああっ!」スポツッ

勢いよく引き抜くと、そのまま間宮さんの手からトレーがすっぽ抜ける。その瞬間っ……ダツシユっ!!

「あばよー!不子ちゃーん!」

間宮「やられた!またっ!またああっ!」

「おまたせ☆」

天龍「なっ…なあ…本当に食べるのか?進めたオレが言うのもなんだが…結構危険っ…て話だぜ?」

「それでも所詮は料理だ。頂きマース」パカッ

蓋を開ける。そこには…マグマが広がっていた。

「……」

天龍 「……つつ……うつつ……」

「……」 パクッ

天龍 「つつ!?!」

モグモグと食べる。…ふむ。要は蛇肉を超超激辛にしてみましたってやつか。んでも味は濃い味にしてあり、旨みもたつぷり口に広がる。蛇にある独特の臭みもなく、少し淡泊な鶏肉のような食感。それに絡まるようなホツトな辛さ。おそらく赤城という人物は辛い物が相当苦手なのだろうを

俺の場合、師匠にゲテモノ料理を嫌がらせて食べさせられていたので、こういう料理には慣れている。むしろ激辛料理なんて大好物にも入る。

「……うん。なかなか美味しい」パクッ

天龍 「んなつつ!?!あの赤城ですら一口で逃げ出した食いもんだぞ!?!それを二口目つつ!?!」

「別に?ただ辛いつてわけじゃないぞー?ちゃんと旨みもあるし、蛇の臭み抜きもされてる。よく出来た料理だよ。さすがは間宮さんだ」パクリッ

天龍 「つつ!?!」

その後、美味しく頂きましたとさ

天龍「……提督、オレはあんたが怖いよ……」

「おういきなり酷いな。そんなにあれ辛いかな？」

俺の場合、The・ソース10滴ぐらいきれない限りは大抵の辛いものなら食べれるぞ。んでもないちばん困るのは、辛いだけで旨味がないやつだな。ありや無理だ。旨味がなきや食えるもんも食えない。

「それよか天龍、失礼な事聞いていい？」

天龍「あんつ……？なんだよ……」

「お前っておっぱいそんなに大きかったっけ？」

天龍「……ぼっ!?／＼てめえーいきなり何言い出すんだよ!?／＼」カアアア  
 「だから失礼なこと聞いていいって言ったじゃん」

謎か天龍の姿は演習の頃とはだいぶ姿形が変わっていた。全体的に少し背が高く  
 なっており、第1…下手したら第2ボタンまで外してる胸元。いつも羽織っていた上着  
 を腰に巻いて、愛用の剣を背中に背負っていた。

それに…なんかこう…色々出てるところが出てる。おぼいさんはもちろんだが…  
 ヒップや太もも、二の腕など…こう、全体的に大きくなった。(大事な事なので)

天龍「だ、だからってお前な!?いきなりおっぱい大きくなった?っていう男がどこに  
 いんだよ!」

「ハハ」

天龍「そっ!そうだけど!そうじゃなくて!!あああもうっつ!」

顔を真っ赤にする。天龍らしくないと言えはらしくないが、今の格好だとクール系のお姉さんが赤面を晒してると思えるから、こう…萌える場所があるね。普段しないやつがするとギャップ萌えて言うやん?それと同じやつやね。

天龍「……改二…妖精さんから話聞いただろ?…それだよ…」

「ほへええ…」まで姿形が変わるのか…なんか、一気に頼れるお姉さん感になったな」  
 ニコ

天龍「だ…誰がお姉さんだ…／＼てめえーのお姉さんになった覚えはねえーよ……」  
「そりゃー、俺一応天龍の上司ですし」

天龍「そこは真面目なのかよ!!…ったく…改二になると姿形…それこそ、言葉も変わるんだよ」

「その点天龍は見た目だけで態度は変わってないね」

天龍「まあ…つい最近…というか、昨日なつたばかりだからな。あたしの思考がまだこの体に慣れてないだけなのかもしれないな。」

「ふーん…そんなもんか。そう言えば、いつの日か忘れたけど、随分前から夕立や時雨もどこか大人びてたよな。それも改二による影響なのか？」

天龍「端的に言えばそうなるんじゃないか？あたしも人生初めての経験だからあまり分からねえーけどよ…こうっ…湧き出る何かがひしひしと伝わってくるな！」

「やっぱり、それだけ改二って工程は凄まじいものなんだな」

天龍「たりめえーだろ！これも全部提督のおかげさ！あたしはもちろんの事！他の奴らだつて提督には感謝してるんだぜ？ありがとうってな！」ニカ

うおつまぶしっ！何だこのスマイルは！まるで上司（大将）とかいうデブを切り刻もうとしていた天龍の面影すらない！かっこいい！姉さんや姉貴って言われそうな人や

！

「…なあー天龍」

天龍 「おう!どうした?」

「肩辛い?」

天龍 「あああ……辛いぞ?なんてったっていきなりの事だしな。体がついていかねえ……それに……少し重くなっちゃったからな……鍛え直さなきゃな……」

そう言いながら、自分の胸をたゆんたゆんと揺らす。

天龍 「……いつその事削ぎ落とすか?」

「それしたら大破で何時間もの間お風呂行きだけどそれでもいいなら」

天龍 「……やめとくか。何も出来ないってのは、案外暇だしな。……いつも通り時雨達と剣を交えるか」ニカ

もはやセリフが剣士なんだけど

「そう言えば天龍、お前下着どうしてんだ?」

天龍 「提督……本当にデリカシーの欠片とかねえーな……」

「別に天龍だからできる接し方だしな。んで?どうなん?」

天龍 「下着の心配なら問題ねえーよ。あたしらはそれこそ艦の力で体にあつた服を自在に生成出来るからな。だから全然大丈夫だよ。」

「ふーん……そっか。それで、胸ができた感想は?」

天龍「うーん…正直言つて…重いな。海の上ではいいが…陸だとしても動きが鈍くなる…ま、これも慣れればなんの問題もないがな」ニカ

だつてよ、曙

曙「ぬがあああ!!大きくならなああいつ!」

叢雲「いい加減諦めなさいよ…:あたしはもうとつくに諦めてるわよ?」

曙「うるさああいつ!大きくなるの!なつて!」

叢雲「なつて?」

曙「あのクソ提督をギャフンつていわせてやるんだからアア!!」

叢雲「……………そつ。まあーせいぜい頑張りなさいよ…」  
曙「ぬがああああ!!」

叢雲「……………提督…か。……………やつぱり…あいつのこと…知らなくちや…いけないわよ  
ね…流石に……………」

ふと、その言葉を漏らしてしまう。過去の苦い思い出がフラッシュバックしてしま  
う。

だけど、これは逃げなんてものと自分でも理解してる…してるけど……

叢雲「……………やつぱり…少し無理…ねっ…」ギョツツ

痛む心臓を黙らせるようにぎゅっと胸を掴む。

叢雲「つつ……………はああっ……………でも、曙も…霞だつて変わってるんだから……………私だつて  
…変わらなきやつ……………」

そうと決まれば…やる事は決まってるっ!



いつもとは違うようでやっぱりいつも通りだけどちよっ  
ぴりいつも通りじゃない

「ですよ？結局のところ人間にガトリング持たしても肩吹つ飛ぶって話」

明石「ですからそういう風にならないために、無駄な出力を外していくとですね？」  
いきなり何の話か分からないと思うが、現在俺は工房に来ております。理由？もちろんありますとも。

前に頼んだ設計図。レベル測定器つてのを頼んだんだけど、それが今日完成したとの事。妖精さんに持って来るように言っていたのだが、その事について明石に聞いてみると

明石「そんな！妖精さんを小道具のように！バチが当たりますよ!!」

なんて言われた。後ろで燃えカスのようにどこぞのジョーみたいにく白くライトで照らされた妖精さんに少し目線を向けると

明石「あ、安心してください。あれは小麦粉こぼしてあぁなってるだけです」

いや絶対嘘だろ。いやいや、妖精さんそこサムズアップしてる場合か。その親指震えてますよ!?!何しでかしたの!?!

「……徹夜とかしてないよな……?」

明石の目元を見ても、クマが見当たらない。んでも頼んでから3日で完成ってちと早すぎる気もする。試行錯誤とかそういうのも踏まえて俺は1ヶ月の計算でいたのだが……何をどう頑張った?

明石「?はい?三徹ですから徹夜では無いですよ?」

「うんごめん。俺の言い方が悪かったね。……寝てる?」

明石「はい?3時間ほど」

「1日7時間睡眠!よくもお前ぶったおれねえな!」

この子そんじやそこらのブラック社畜人じやねえぞ!?パソコンカタカタするより新作の何かを作る方が余程神経と体力を持つてかれるというのにそれをやってたのか!?こいつタフかよ!?

明石「あはは……こんなの前の提督に比べれば朝飯前ですよ♪……前の提督は睡眠って文字がない人でしたから」アハハ

「うんごめん。変な思い出呼び覚ました俺が悪かったからハイライトさんを呼び覚まして?」

あと、朝飯前だけど3日後な。……後で間宮さんに明石の朝食を頼んでおこう。

とまあ、そんなことがあり、例のレベル測定器を手に取る。なんか、どこぞのヤサイ人が着けてそうなやつですね。

明石「使い方はですね？ 視界に測定したい子を見て、ここの横の赤いボタンをポチッと押せば測定できますよ♪」

「それなんてスカウター？」

ま、まあいいや。兎に角まずは実験として明石を測定してみようか。

「このボタンを…カチ…おお！ 本当だ」

測定中と出ると、数字だけがポンツと出る。『66』…なんか不吉じゃね？…いやまあーレベルや経験に不吉と言っても誰しも一回通るし…あまり重要性はないか…

明石「どうですか？ちゃんと機能してますか？」

「おお！ちゃんと機能してるよ！ありがとな！急なお願いをこんな短期間で終わらせてくれてよ！」

明石「いえいえ♪…私は提督に頼まれただけですか…」ニコ

「んじゃ！また何かあつたらそんなときはよろしくな！…あ！そうそう！」

明石「？まだ何…？かつ！/?／／」

玄関で靴を履く前に、くるりとUターンして、明石の頭にポンツと触れる。

「徹夜までしてくれてありがとな。…それとき、俺に頼まれたからつて…そんなにはりきんなくても大丈夫だよ？…明石だつて艦である以前に女の子なんだから、美容には気をつけてよ？…お風呂入つてないでしょ？浴場いつも綺麗だから、気分転換に体でも流してきな。それじゃ、本当にありがとな。」ニコ

そう言葉に出して、ドアから出ていく。何事も、相手を褒める所から。まあ…今に始まったことじゃないけど、根詰めすぎてるから、できる限り優しめに注意したつもり。

あと単純にお風呂に入つて欲しかったつてもある。艦だから臭いはしないけど、それでもお肌なんか少しだけ荒れていたからな。これを機にお風呂のありがたみを知っていたらこう。

「…あ、妖精さんに後で金平糖渡さなきゃな」

俺はスカウターをシャツのポケットにかけて、そう言葉を漏らしながら、いつもの部屋に向かう。

明石「……………つつつ!!／はつずかしつ!?!?!／やだ私!?!?!提督に頭撫でられ!?!?!／つつ!?／／／カアアアアア

先程提督にされた行為を鮮明に浮かべてしまい、体が熱くなつていく…

明石「私の髪!ポンツ!ポンツて!?!?!／うわああ!風呂入つてない髪なのにいっ!?!?!だから風呂入れてこと!?!?!:そういう事!?!?!／ううつ!!恥ずかしいっ!?!?!／」

(提督さん…:なんでそう無意識なの…:)ガク

先程の行為に慌てる明石と、燃え尽きる妖精さんであった…

あ、そうだ。その前にちゃんと間宮さんに明石に飯作つといてくれ!?!?!つてお願いしてから行こう。そうしよう!

「まーみやさーん。」コンコン

コンコンつとノックすると、ガチャつと開く

間宮「……どうしましたか?…提督さん?…」チラ

この際、ドアの隙間からしか顔を出さないことには突っ込まないことにしよう  
「少しお願いがあつてね」

間宮「お願い…ですか?」

「そうそう。明石つて子にさ、なんかガツツリとしたもの作つて欲しいのさ。俺が頼んだ機械を作るために、寝る間も惜しんでたからさ…恐らく彼女、あんまりご飯とか食べられてない気がするから、間宮さんの美味しいご飯を食べさせて欲しくてさ……お願いできるか?」

間宮「……………」

「……………あの?間宮さん?…」

間宮「……提督さん、私の手料理…美味しい…ですか?」

「え?あ、うん。すつごい美味しいけど…え?なんで?」

間宮「…♪……………分かりましたっ♪…明石さんですね?作っておきます♪」ニコ

「お?おう!助かるわ!…あ、良ければでいいんだけど俺の分も作っ」

間宮「喜んで!!」パアアア

ドアをドンツと開けて素晴らしい笑顔をこちらに向けてくる間宮さん

「お……………おう…でも…できる限りでいいからね?本当…無理しない程度で大丈夫だか

らね？」

間宮「はいっ！提督さんのためです！♪」キラキラ

「うん。全然わかってない」

結局…何も分かってくれずに、「早速作ってきます！」と元気に言われて何も言えませんでした…

てか間宮さんがドアからチラツとしてた理由はパジャマ姿だったからのようです。  
…結構びっちりしてましたね。…何がとは言いませんが。あと可愛い服装でした。パジャマの第一ボタンが外れてたのは見なかったことにします。はい。

その後、めつちや山盛りの肉丼が我が部屋に届きました。味はとっても美味しかったです。あまじよっぱいタレが牛肉にいい感じに染み込んでおり、トッピングのネギたまが最高に良い仕事をして、さっぱりと食べれました。でも流石に量が多すぎて、その時秘書をしていた鈴谷と、たまたま暇つぶしで遊びに来ていた江風と一緒に食べ進めました。

ちなみに渡された時に

間宮「…そのっ／＼…今朝の姿は…忘れてください…／＼」カアア  
なんて言われた。ごめんな。もう永久保存しました。

「……………」カキカキ

響「……………」カキカキ

山風「……………」ボオオオ

「……………」カキカキ



響「……司令、チェック」スツ

「んっ………よし。おけ。山風」スツ

山風「はい。……よいしょっと！じゃー妖精さん♪おねがーい♪」

（がってんだー！）ピユウウンツ！

叢雲「………何これ？」

「いや……いつもの事ですけど……てか叢雲からいつもの仕事風景を見たいつて言ってきたんじゃないか。そんな驚くことか？」

響「司令、手が止まってる。」カキカキ

「うっせ。話しながらだと結構きつんだぞこれ？ほら誤字った」カキ……ケシ

山風「パパって本当に2つ以上集中するとどちらかが疎かになるよね」

「それがパパのいい所☆」カキカキ

響「同時に司令の悪い所でもある。」

「んだとゴラア!?!これが個性ってああああ！また誤字ったアアア!!」カキカ……ケシケシ

響&山風「うるさい!!」

「はいすいません……」カキカキ

叢雲「……ええ?……わ、私が来た意味は………?」

元々今日は何が必要がなかったのだが、今もソファアの上で何故か正座しながら俺ら

の仕事風景をまじまじとみている叢雲がいきなり仕事風景を見せなさいと言ってきたため、こうして作業風景を見せている。

俺の部屋には何故か俺以外にも数人いることが多いため、よく俺の部屋に遊びに来る奴らは全員この作業ができる。でも人によって作業効率が断然違う。

今のメンバーで言うと、響が書類の説明や誤字点を修正・補足など。俺はお偉いさんから届いた手紙にサイン&響が修正した書類のチェック。山風は完成した書類・サインし終わった紙を10枚になったら外に待機してる妖精さんに差し出しという形。妖精さんは日替わり。

仮に山風と響の立ち位置を逆にすると、今は1枚2分ペースだか、それが4分ペースに下がる。だから得意分野を活かして私はこれやるあれやるというのを決めている。余ったものはソファアークでくつろぎ、疲れたものはソファアの奴と交代…という形だ。

ちなみに1番早いペースは書類を鈴谷・加賀、受け渡しが時雨だとかくつそ早い。1枚15秒ペースだ。鬼早い。

叢雲「……本当に…真面目なのね…」

「いや最初のとつくみ合いみてた？どこが真面目やねん」

叢雲「あつ…あれは……／＼」

これは叢雲が来る10分前のこと……

10分前

山風「だーかーらー！私はパパの赤ちゃんを作るの！分かる!？」

響「分からない…そもそもパパと呼ぶて事は親子関係…そういう関係で子作りは出来ない。」

山風「でもでもお？血の繋がりはないから実質作れる！パパは呼び名！これで解決！」

響「異議あり…そもそも司令を独り占めにするの…：：：反対っ」

山風「いいじゃん！いいじゃん！それでもいいじゃああん！」

響「だめ。やだっ。それは私が許さないっ…！」

山風「子作りするのお！」

響「認めない…！」

「…：：：あのお、俺の意見いいっすか？」

山風「パパは黙ってて！」

響「司令には聞いてない」

「いや俺の話題やんけ……………」

このふたりが揃うといつもこうだ…仲が悪いって訳じゃないんだけど…何だろうね？まあーそんなことは置いといて

「まあまあとりあえず、ソファーに座んなよ。麦茶でいいよな？」ニコ

山風「つ…………う…んつ……………」

響「……………」コク

よしよし。とりあえず2人をソファーに座らせる事には成功と。

「茶菓子はルマンドとカントリーマアムどっちがいい？」

山風「カントリーマアム！」

響「ルマンド！」

「ぶつ…:はいはい。どっちも持っていくな」ニコ

少しムツとした表情をしてお互いをにらめっこしてる2人に思わず綻んで鼻で笑ってしまふ。茶菓子と飲み物を持っていく。

「ほれ、ルマンドとカントリーマアムの詰め合わせ。…ほれ、響、飲み物だ」コト

響「つ…:あ、あの司令…:これ麦茶じゃなくて…」

「ルマンドには紅茶…:前に響が言ってただろ?…:だから出してみた。…:嫌だったかな?」コト

響 「あつ……／＼うっ……ううんっ……／＼嫌じゃ……ないっ……／＼」  
 「そっ？なら良かった♪……ほれ、山風も」コト

山風 「……あれ？これ緑茶……」

「前にカントリーマアムと麦茶出したら怒ってたじゃんか。だから今回は緑茶！……舌に合うといいな」ニコ

山風 「っ!!♡……あつ……う……ううっ……／＼」コク

さてと、お互いの中立の椅子に座つてと

「でー？2人は何に話を膨らましてるんだ？」ニヤニヤ

山風 「っ!?!／＼……それは……そのおお……／＼」モジモジ

響 「……／＼／＼／＼」カアアアア

「あれれ？おつかしいなあ？さつきまでの勢いとは打つて変わつて静かですなあ？……なんだっけ？俺との子「わああ！わああああっ!!／＼」……ふっ」ニコ

俺が問題の発言をしようとした途端、2人でわあわあど騒ぎ始める。姉妹かつての

山風 「……パパは意地悪ですっ……／＼／＼／＼」ムスッ

響 「……司令はそういう人ですけど……こうもされると……来るものがある……／＼」カアアアア

こう……響が照れてる顔つてのはなかなか拝めないからな……最近なんて剣道しかやつ

てないから、こうして俺のところに来るのも時たまになっちまったし…天龍は天龍で改二になつてから駆逐艦の子の面倒を見るようになったし…前に遠くから見た時だつて

天龍「こおらっ…喧嘩してないで、ほらこうして交代交代にすれば…喧嘩しなくても済むだろ？なっ？」ニカ

つと言う光景を見てから、園長つて言いそうになるんだよね。ない？…ないか。

時雨と夕立はしよつちゆう遊びに来るな。剣道は嗜む程度で、天龍や響よりはガツツリしてないしな。運動程度つてレベル。前に響と天龍が剣道してる時は、あれはもはや剣道じゃなかった。

竹刀で殴りあつてた。…それも火柱を立てながら。竹刀のはずなのにカァンツ！カキンツ！つて音はおかしいと思うんだ。俺。

さながらバトル漫画のボスと主人公との戦闘シーンつて感じがして、すつごいかっこよかった。ちなみに天龍は目を瞑りながらの圧倒的強者感。響は竹刀をふたつ持ったロング双剣みたいな勇者感。てか剣道どこいった。原形壊れてたけどあれ。

山風&響「…むっ…」

「……んへあ？な、何？」

目を瞑りながら考え事に耽っていたら、2人が俺の方にムスツとした表情を飛ばしていた。

山風「私といるのに……他の人のこと……考えてたっ……」ムスツ

響「司令っ……今は私達がメイン……だよ……他の人の事は忘れて……」ムスツ

いやそんなこと言われましても……てか響に関しては何もつちや登場してた気がするんだけど……

山風「つつっ！」

響「……」

『えいっ！』ムギユツ

「ふおおわ?!」ギャフン

唐突に可愛らしい声をあげると、俺の方に覆い被さってくる。

山風「パパには他の人じゃなくて、今は私『達』だけ見て欲しいの！」ムギユツツ

響「……そう……っ……他の人のこと考えてるの……不愉快っ……！司令は目の前の私『達』だけ見てて！」ムギユツツ

「わかった！わかったから！抱きつくくな!?抱きつく意味ないだろ!」

山風「あるもん……っ……、ここうしてればパパに密着できて……そのっ……えへっ……えへへ

へっ♪」ニコオ

響「こうすれば…司令は私達に目を向けてくれる…余計な考えをする暇さえも与えない。つまり私達だけを見てくれる。／／／／／／／／カアアアアアアア

「いや片や顔真つ赤片やデレデレしながら言われても説得力ないから!!?…てか説得すらしようとしてないし!それもはや自己満だろ?!」

『当たり前じゃない!!』

「いやそこは息ピツタリい!!いいから離れ…ぬおわああつ!!」

ガタンつと音が聞こえる。その瞬間に

?「さああつ!仕事の時間よ!!!」バアアアアンツ

「ダイイイオオオオオオオ!!」

?「は、はあ?何を…いつ…:…:…:て…:…:…:」

視線が、俺が押し倒した2人に向く。…なのに2人は弁解する言葉を出さないで…

山風「:…:/:…:/:は、初めてだから:優しく:してね?♡」カアアアア

響「つつつ／／／そ、そのつ:／／／痛いの:我慢するから／:よつ:よろしくお願  
いしますつ:／／／／／カアアアアア

「はっははー……」チラ

?「このつ／／／このつつつ?!／／／／／スツ



あ、これ何言っても無理なやつだ。とりあえず早口言葉で言わせていただくこう。

「安心しろ!!俺は童貞だ!!!」

? 「うるさいバカ!!しねええ!!」

「アフガニスタン!!!」ブベラアツ

素晴らしいかかと落としが、俺の頭上にクリーンヒットした……

んで、色々あつて、今に至ると言うわけだ

叢雲「ま、まあ……その……出会いは最悪だったけど……噂通りの悪い提督じゃなさそう  
良かったわ……安心した……」

「だろ?もつと褒めてもええんやで?」クイクイ

叢雲 「まあ…変態には変わりないけど」

「たはああ♪そこだけは改善して欲しかったあーん♪」

山風 「…むしろパパは意気地無しすぎる…」

「え何それ酷い……」

響 「…あの状況で手を出してくれないのはそれはそれで自信なくす……司令が変態で

も…手を出してくれない司令はそれはそれで嫌だ…」

「おいごらどういう意味だああん?」

『司令（パパ）が初めてを奪ってくれなかった』

「そんなに心安捨てられたら人生苦労しねえーよ…」

叢雲 「……な、なんかすごい…会話…ね…」

「あ、安心してね。いつもはこんな会話しないから。ヒートアップしなきゃこんな下ネ

タパーリナイしないから安心してね。」

山風 「そんなこと言って、いつもしてるじゃん♪」

響 「たしかに。直接的にしないのは新手的調教…」

「とりあえず2人は正気にもどろうか…」 トンツ

山風 「あうっ?……」 パタリ

響 「ひっ?……」 パタリ

「よし。解決。」

叢雲 「ほ、本当に首叩くと気絶するんだ…」

「結構コツがいるけどな。さてと叢雲…だったよな?…これも何かの機会だ。明日から仕事に参加してみるかい?」ニコ

叢雲 「えっ?…ええ…ね、願ってもないこと…だけど…」

「そっか♪じゃ、明日から秘書艦よろしくね♪」ニコ

叢雲 「え?…あーわかつ…………秘書!?!」

「ん?なにか不満?」ニコ

叢雲 「まってまって!秘書ってことはつまり」

「大丈夫、曙も霞も経験してるし、夕立だつてしてる。…行ける!」

叢雲 「なんの自信よ!?!」

「じゃ!あしたからよつろしくう!」

叢雲 「ええええええええええええ!!?!」

秘書艦! 叢雲!! (特に深い意味は無いよ)

「んじやま、今日から1週間!よろしくう!」

叢雲 「あんまりまだ整理つかないけど…うん…やれることはやってみるわよ…」

叢雲秘書艦一日目。

叢雲 「…で?一日目は何をするのよ?」

「ところがどっこい。今日は非番です。」

叢雲 「……………はい?」

「だから、今日非番ね。要はおやすみ♪痛い痛い。肩パン痛い」

無言の肩パン程怖いものはない。

「つてマジで痛い!どんどん力強めないで!ほんとっ!」

ポキ

「えーとですね、簡単に説明すると、今日が非番って言うのは、本元から資料やら作成者やらが来てないのよ。だから仕事をやるにも、その仕事自体がないってこと。あ、時雨、あと少し」

時雨「…こう…かい？」ゴキッ

「おっふー…おっ。入った入った。てんきゅー」

先程肩パンされまくった左肩が不意に外れてしまったので、ちようど遊びに来た時雨にはめてもらいました。

ちなみにはめ方は、まず俺が横になります。背中に時雨が乗ります。おりやつとやられます。終了。

時雨「全く…説明不足で艦を不安にさせないでよ。いつもなら肩を外した子を叱るけど…今回ばかりは提督さんが悪いからね？」

「なんでや…お休みって偉大やんか…なんで肩外されるんや…トホホ」  
肩をブンブン回しながら、違和感を無くしていく。

叢雲「ご、ごめんなさい…その…えと…しよ、処分ならいくらでも受けます…だからっ

…」

「何それヤクザの指詰めかよ…怖い…」

叢雲 「…あつ…あれ…?」

「叢雲は何も悪くないぞー…悪いのは時雨の言う通り簡潔的な説明で叢雲を不安にさせた俺の問題だからな。ちなみにさっきの話はガチね。書類がないから仕事できないってやつ。」

叢雲 「…じゃ…何をすれば…」

「うーん…こういう時の秘書の仕事って…人それぞれなのよね。お暇を貰ったり、遊び相手になったり、逆に遊び相手になってもらったり…とりあえずUNOでもやるか?」

叢雲 「……はい?」

時雨 「いいねそれ。僕夕立と響呼んでくるよ。」

「お、てんきゅー。やつぱUNOは5人以上じゃなきゃな!」

叢雲 「あ、あの…」

時雨 「じゃー準備頼んだよ。提督。」

「あいあいさー。あ、飲み物は紅茶と緑茶のどちらかでもいいよな。茶菓子はつまめる系で」

時雨 「そこは提督に任せるよ。それじゃー行ってくるね」

と言つて、出ていくのでササツと俺も準備する。

…ふと、俺は後ろを振り向く。

叢雲 「つ…あつ……………」

オドオドして手をしてんやわんやとあちらこちらに慌てふためいていた。

「…ふつ…叢雲♪」ニコ

叢雲 「はっ…はいっ…?」

「手伝つてくれるか?…これをテーブルに並べるのさ」ニコ

そう言つて、茶菓子の入ったお皿を叢雲に差し出す。

叢雲 「つつ…任せなさい!」

「ああ♪…頼んだよ。」ニコ

そりや、いきなり秘書艦という役目を負わされた矢先に、「あつ、今日非番つす☆」なんて厄介払いみたいな扱いを受けたら、誰しも自信を無くすし、慌てるに決まつてる。

(…こりや…俺がいい加減すぎたな…反省だ)

その場のノリで決めたと言つても、叢雲にとつては初めての仕事で、俺との初めてのコンタクトだったんだ。相手の表情を伺つて、仕事を率先してしたが。正しく叢雲は、仕事をしに来たんだ。それを俺が突き放したんだ。

「…………」ポソツ

叢雲 「っ!…て…提督…?」 ビクッ

「…悪いな。初めての仕事が、こんな雑用だよ」 ナデナデ

叢雲 「そっ! そんな!? むしろ私としては、ちゃんと出来てるのか不安で…」

もうやだ。なんで艦娘の子達ってこんなにもピュアな精神を持つてるの?

「ごめん! ごめんなあ! ほんつとにごめんなあ! 明日からはちゃんとしたお仕事持つてくるからなあ!」 ワシヤワシヤ

叢雲 「わっ!?! ちよっ! 提督!?! なんで泣いてるの!?! てか髪わしやわしややめ!」

「ほんつとにごめんなあ!!」

叢雲 「わっ! わかった! わかんないけど分かったから! わしやわしややめ! 髪が! 髪があああ!!」

時雨 「連れてきたよー! ……って…何してるんだい…?」

「叢雲がいい子すぎて感激してた」

時雨 「に…に…にしては思いっきり叢雲に固められてるけど…」

確かに、今の俺は叢雲に関節を固められている。ビクとも動けない。

「これは俺が悪いからあまりなんも思っていない」

時雨 「何してたんだい…」



「わしゃわしゃしてた」

時雨「羨ましいじゃない、何をやってるんだい…」

即答で羨ましいって出てくるあたり、相当羨ましかったんだな。

夕立「つつ！提督さんから離れるっぽいー！」ポフツ

叢雲「かはっ!? な！何よ!? 元はと言えばこの変態が！」

夕立「だからつてくつつきすぎっぽい！離れるっっぽい!!」グギギギ

「あいたたたた！夕立ストツプストツプ!!夕立が引つ張る度に叢雲が固めてる場所がいででで!!」

叢雲「っ!? ちよ！この駄犬！離すから！離すから引つ張らないで！」

夕立「ぜええったい嘘っ！嘘っぽい!!離れるっぽい!!」

叢雲「つつ！せえい！」

夕立「わふっ!?」ドンツ

叢雲「あつつぶないじゃない!?提督の骨がまた外れたらどうしてくれるのよ!?!」

夕立「またつてことは一回外れるの!?己叢雲!!提督に何してるのよ!!」

叢雲「何キヤラよそれは!?!」

「ギャーギャー!」

響 「……大丈夫?司令」ポントツ

「oh……あと数秒遅れてたらマジで召されてた……」

響 「……うん。元氣そうで何よりだよ」

「響の眼球にはホコリが詰まってるのか……」

響 「……失礼。ちゃんとメンテしてる。」

「へ、へえ……それと響?」

響 「ん?」

「……女の子がスカート履いてる時に屈んじや行けないんだよ……見えてるからね?」  
無地の何かが……

響 「別に、司令には見られてもいいと思ってるから。平気だよ。」

「俺か平気じゃないんですけど」

響 「司令は私みたいな子供にも欲情しちゃう変態なの?あ、もしかしてロリコン?」

「ロリコンではないけどかわいい女の子の下着を見ると欲情しちゃう健全な男の子なの

で正常反応です。」キリッ

響 「それを真顔つばいキメ顔で言う司令は相当ひねくれた変態だと思っよ……？」  
「……いいから屈むのやめなよ。」

響 「……もつとみたい？♪」ニコ

「あつ、ロリ痴女はNG」

響 「変な所でブレーキはいるんだね……」

「プロですから」

響 「私の下着みながら言われても……」

「仕方がない。体が反動で動けないから、視線あげられないし。」

響 「目瞑ればいいのに」

「確かに」

響 「………バカなの？」

「アホです」キリ

まあー何やかんや、ちゃーんとUNOで盛り上がりましたよ。なんか俺の知らないう



「平常運転です」二コ

玄関に無造作に束で置かれていた書類を妖精さんなんかが運んできてくれたので、それを受け取りながら用意した机に置いていく。

「ドサ……。よし、じゃー昨日教えた通りでいくからなっ！あつ、もちろん分からないところがあつたらじゃんじゃん聞いてちやつて！なんでも答えるよ！」

叢雲「昨日あんなに散々レクチャーされたら……滅多な事がない限り聞くことなんてないと思うけど……」

確かに、昨日は朝の10時から昼の3時まで休みありでやり続けましたもんね。本当に最初の仕事だから、叢雲もてんやわんやで焦っていたが、ちよーつと俺が教えたり一緒に取り組むだけで内容を把握して同じミスを減らして行ったからな。

元々この艦娘の子達は、物覚えがとても良く、同じミスを滅多にしないからな。1度丁寧に教えてしまえば、それ以降は真面目に取り組めるし、真面目に取り組めない子達も、何やかんや自分のやり方で進めて行けるし……ほんつと、皆さん俺居なくてもやって行けるんじゃない？

いやむしろ、俺がいない方が物事を円滑に、なおかつ効率的に回せるんじゃないかな……あれ？俺……要らなくて……？……シヨック。

叢雲「……？提督？何ぼさつとしてるのよ？」

「おっと。悪い悪い。すこーし考え事をね。んじゃ…取り組んでいきますか!」

叢雲「はい。…あ、そうそう。その前に飲み物ね。…コーヒーであつてたわよね?」

「ああ。とびきり目に効くやつね」ニコ

叢雲「はいはい。任せてちょうだい」ニコ

そう微笑んで、キッチンでお湯を沸かしながらコーヒーの粉末をマグカップに注いでいく叢雲。

叢雲「ふんふんっ♪ふーんふーんっ♪」

鼻歌交じりでご機嫌がいいように……………

(……………あれ?俺って本当にいる…………?)

ふと、またそんなことを思ってしまった。

「……………」カキカキ

叢雲「……………」カキカキ

作業を開始して早2時間が経ちました。叢雲は昨日のテンパリが嘘のようにスムーズに仕事をこなしてくれている。チラリと覗く程度だが、何不自由なくペンを走らせてくれていた。疲れた時は1度ペンを置いて、肩に手を置いて首を解したり、背伸びなんかをしてリフレッシュをこまめにするほど、ペースを維持していた。

それに、本当に分からなくなった場所や、確証が持てないものにはちゃんと俺に質問をしてくれた。

叢雲「むっ…提督、これは…」

「ん？あーそれね。それは会計書類と同じ方法でいいよ。…この四角にチェックを入れてサインしてハンコっ！…ね？」ニコ

叢雲「なるほどね。助かったわっ」ニコ

「いえいえー♪なんでも聞いてくれと言ったじゃないかー♪」

その度に俺は優しく、簡潔的に、個人的に分かりやすく説明をする。…ぶつちやけ書

類の整理もやつと慣れ始めた頃だ。最初の頃なんて、艦隊の編成なんかを片っ端から鈴谷に叩き込まれた。

それを知らなくては話にならないとまで言われてしまったからね。…恐らく、孤児院から出て師匠から勉強を学んだ時以来の、ガチの勉強だった。

あとは夕立や天龍なんかに書き方を教わったり、加賀や響に見方を教えてもらったり…そういった皆からのアドバイスや助言、楽の仕方を教えて貰えたから今みたいな作業効率で出来ているのだ。

秘書艦任せた時の曙に言われた「ねえークソ提督?それよりこっちの方が作業ペース良いわよ?試しにその方法で試してみない…?」って、秘書艦の分際で口出しは良くないわね…忘れて「なんて言われた日は、そんな事ないと少し怒ったように言ってしまった。…恐らく、自分よりもその方法を見出した曙に、恥ずかしながらも嫉妬したんだと思う。秘書艦を任せた5日目だったからな…凄いなと褒めることよりも…そんな短期間で把握して提案をしてきた曙に嫉妬して、そして自分の無力さに絶望したんだと思う。まつ、その後ちゃんと爺さんに怒られちゃったけどな。

『人の功績を嫉妬するのは愚か者のする事じゃぞ?…それを褒めてこそ、立派な大人と言うものじゃ』

なんて…柄にも無いことを言われちゃった。…でも、反論は出来なかつたし、スつと



胸にその言葉が落ちてきた。…てか爺さん最近話しかけてこないな。寝てんのか？ 試しに呼んでみるか

(…おーい？ 生きてるかあ？)

ダメだ。返事がない。ただの屍のようだ。んー…留守かな。いや俺の頭の中で留守ってなんだ。俺の頭の中に機能してない部位があるみたいじゃねえーか。…その通りだな！

叢雲 「…あつ」

「…ん？ どうかしたか？」

不意に声を上げた叢雲に俺は視線を向ける。

叢雲 「あつ…いえ…ただ、お昼すぎちゃいましたね…と」

そう言つて時計をみあげる。…確かに今は昼の1時25分ぐらい。そうか。だから通りでお腹が空いてたわけだ。

「…何か食べるか？」

叢雲 「つ…：そうしたい…：ですけど…：あいにく間宮さんの食堂はお昼時間を過ぎちゃうとデザートしか出せなくなつてしまいますし…」

「…さては叢雲、お前間宮さんの常連だな?」ニヤ

叢雲 「…はううつ!?! / / …そ…そうよ!?!悪いっ!?!」

「いや…悪くないよ。…そうだな。…何食べたい?」ニコ

叢雲 「つつ…言ったって」

「いいから…何食べたい?」ニコ

叢雲 「えつ…えーと…とんかつ定食…」

「とんかつ定食な!了解!」ガチャ

そうして、俺は鎮守府内専用の白い電話を手取る。

叢雲 「て、提督…?」

「まあまあーっ♪少し待つてな」ニコ

プルルつとコールがなってコンマ6ぐらい

間宮 『どうしたんですか!?!なにか体調でも悪いのでしょうか!?!』

慌てたように電話の主が出てくれる。てかでの早い間宮さん…まだワンコール  
なり始めやっただぞ…

「そんなんじゃないよ…。…間宮さん、今お時間あります?」

間宮 『えつ?ええ…まあ…ちょうどお昼の時間は終了してるので…』

「あちゃ…じゃー無理かあ…ちつくしよー(棒)」

間宮『あつ、まだやってますよ』ケロ  
ちよろい。ちよろ間宮さんだ。

「…少しですね、間宮さんには俺の方にとんかつ定食とカツ丼をですね…」

間宮『つつ！かしこまりましたア！直ぐにお作りしてそちらに向かいますねっ♪』

「ああ。助かるよ。あ、でも間宮さんのペースでいいですからね？」

間宮『はいっ！♪すぐにお持ちしまーす！でわあ！♪』プチッ

「あつ…たく…間宮さんは相変わらずだな…」ニコ

プープーとなってるしろ電話を元に戻して、叢雲にサムズアップ

叢雲「えっ…な、何？」

「安心しろ。すぐに来るってさ」

叢雲「へっ…？来るって何が…？」

「何ってそりや、間宮さんが作ったとんかつ定食が」

叢雲「つつ!!？」

コンコン

「はーい。どうぞー」

間宮「失礼します♪提督さん♪」ニツッコオオオオ  
うおっ!眩しっ!まるで太陽のような輝きだ!

間宮「でわこちら…とんかつ定食と…カツ丼でございます♪」ニツッコオオ  
そう言つて、叢雲の机に普通サイズのとんかつ定食。そして何故か俺のカツ丼はすき  
家のキングサイズ並なんですけど。

「あの間宮さん。この量は…」

間宮「え…えへへっ…／＼提督さんに頼まれたと思つてしまつたら…その…／＼少し  
張り切りすぎちゃつて…作りすぎちゃいました／＼」

頬を赤くしながらそう言ってくる。…オカンか…

「…」ポンッ

間宮「んっっ…」ビクッ

とりあえず肩に手を置いて…

「美味しく召し上がらせて頂くよ」ニコ

そう微笑む。

間宮「つつっ!!／／／キヤアアアッ!／＼提督さアアアんっつ／／／／／

ビュウウウンツツ

頬を真つ赤つかにさせながら事務室から飛び出していく間宮さん。一呼吸置いて…  
「さてと。んじや頂きますか」

叢雲「恐らく私は、とんでもない光景を目にした気がします。」  
「安心して。山風とかそこから辺も同じことを言ってる。」

叢雲「…はあ…とところで提督、それ全部食べ切れるんですか？」  
そう言つて、既にもぐもぐしてゐる叢雲が器に視線を向ける。

……………

「……………少し食べるか？」

叢雲「…ま、まあ…少しだけなら…」

「……………一緒にシェアしようか」ニコ

叢雲「うっ!?!／／……………はあ…わかりました…♪」ニコ

その後、カツ丼は美味しく召し上がりました。間宮さんは作りすぎちやう癖がありませんから。それこそ、オカンですよ。息子が大好きなオカンですよ。あれは。

はええ…あんたも闇抱えてるんすねえ…頭が痛くなりますよ  
すよ（偏頭痛）

叢雲が秘書艦になってから、あつという間に7日経った。

叢雲「はい司令官♪お茶が上がりましたよ♪」コト

「おとおうつ…」苦労さま。「カキカキ

叢雲から差し出されたお茶を横目に、資料を適当に終わらせていく。

秘書艦を1週間だけだというもの…叢雲は凄いスピードで成長を見せている。…まず、心の余裕が見れるようになってきていた。最初の仕事の二日目の時なんて…

叢雲『うぎやあああつっ!!何この資料の量!?!殺す気なの!?!私を殺す気なのお!!』

『もちつけもちつけ。これぐらい直ぐにおw』

叢雲『餅着いてどうすんのよ!?!私はもちろんこしあん派なのよお!!』

『いや知らがな…』

つと、綺麗なテンパリっぷり。完成されたお笑いを見てるようだった。とりあえずそ

の時はずっと座布団を差し出したね。…逆にその差し出した座布団が俺の顔面にダイソンの吸引力が如く吸い付いてきましたけど。久しぶりに心のそこから『わふっつ!?!』って声が出ましたよ

『いやいつも出しておるじゃr』

(何も聞いてない。…いいね?)

『アツハイツ』

てか久しぶりに話してきたな…家出(?)は終わったのかな?…どうでもいいか。

……と言う感じで、今では…

叢雲 「♪♪」ニコニコ

「…なんか…今日はやけに上機嫌だね。なんかいい事でもあったん?」

叢雲 「え?…あつ…そりゃあ…何も出来なかった私に手取り足取り色々教えてくれて…私も司令官に言われなくても自然と体が動くようになってるんです♪…楽しい以外に、言い表せなんて…不要…でしょ?♪」ニッコリ

「おつ…おうつ…」

なんとということでしょう!初日は罵倒から始まった彼女が!今では笑顔を振りまく天使になってるではありませんか!!…誰この人?(本音)

いやね、そりや言い出しつぺですし、最初に適当にあしらったのもありますよ。だから真面目に：俺には不釣り合いなほど真面目に、彼女と向き合ったわけですよ。

そしたらこれよ。：960度体捻った？綺麗な叢雲になっちゃったよ。いや元が汚いとかそういう訳でもないけどさ。

てかこんな直ぐ変わるものなの？…いや確かに艦娘って人間の子達より成長クソほど早いけどさ、それにしたってよ？こんな1週間のうちに変わる？変わるもんなの？

…試しに頭に触れてみるか。

「…」ポソッ

叢雲「っ！」

…これで以前の叢雲なら…いやてか、事故で触れた時は

叢雲「つつ!?!／＼なっ！何気安く触れてるのよ!!」パシンツツ

「エヒドイツツ!!」

つと、一瞬自分の時点が公転して頭と床がキスして愛の結晶（たんこぶさん）を作り



上げたのがついこの間だけでも、流石に同じかな…いやそれだと俺まだ愛の結晶（たこ焼き）作る事になるの？やらなきや良かったぜ!!

叢雲「……………」

…あ、あれ？まさかの無反応？

「…………」 ナデナデ

叢雲「……………」

WOW、素晴らしき無反応。俺でなきや拗ねてるね！って言ってる場合ちゃうねん。これどうすればいいんだよ。

前はすぐにも

叢雲「しねえええっ!!」

「へぶっつあっ!?!」

つてなつてちゃんちゃんつ★つて終われたけど、こうも無反応だとかえつて触れずらいぞ…

叢雲「…ねえ。」

「あ、喋った。じゃなくって…どうした？」 ナデナデ

叢雲 「いつまで撫でてるつもりなの？」

「うーん…：叢雲が嫌がるまで？」 ナデナデ

思わず素直に答えちゃったよ。こりや腹パンからの股間蹴りあげで『 K O ！  
』 パターンつすね。…今のうちに記憶のバックアップ取っておくか

まあーそんな機能ないんつすけどね★

叢雲 「…悪いけど、司令官がどう思ってるかは知らないけど、それぐらいじゃ私は機嫌損ねないわよ？」

「…え…？じゃー初日のあれは…：…」 ナデナデ

叢雲 「そりやー、嫌いだった司令官にいきなり触られてみなさいよ。ほとんどの子が殺しにかかるわよ。」

「つまり、殺しにかからなかった叢雲は理性が強いと」 ナデナデ

叢雲 「いやまあ…：…そうなのかしら…：…？」

「いや俺に聞かれても…」 ナデナデ

いきなり首をかしげながら訊ねられても、俺にはどうも言えないぞ…

「じゃー逆に何すれば機嫌損ねるんだよ」

叢雲 「…：…無視されること…：…かしら。」

「はい？」

叢雲「っ！……だ……だ……だ……だ……だ……司令官に無視されたら私……どうすればいいか……分らないし……そ、それに……そのっ……／＼……み、見てもらえないとか、接してくれない……その……寂しい……／＼」

「おうふ……」

そんな……顔赤くされながら言われると……したくても出来ないじゃないか……

叢雲「……こんな私……いや……だよ……？」

「……いんや？いいんじゃないか？……素直で」

叢雲「っ！……今の私……素直？」

「はっ……はあ？……いや、素直だろ……初日の頃なんて素直に謝りはするけど、こういうことに関してとはとん話を濁してたじゃねえーか……まあ……初日だし、お互いわからない状態で話を振った俺も悪いけどよ……」

叢雲「……」

「……今の叢雲は、なんて言うか……凄い素直だと思っよ。……うん。」

……なんでこんな困惑してんだ俺……

いやてかさりやそうだよな。いきなり『私……素直？』……って言われたら、同性ならともかく、異性に言われたら「えっ……ええ？」……ってなるわ。こういう感じになるんだな。前

世ではあまり人と関わって無かったからってか、人と関わることを嫌ってた…からか。

叢雲「そつか…♪…素直…素直ね♪…ありがとうね、司令官。」

「はっ？…いきなりどうした…？」

いきなり叢雲は、そう笑顔で俺に言ってきた。

叢雲「…私、素直じゃない自分が嫌いだった。…司令官に会ったあの時も、実は怖かった。こんな態度してたら解体されるんじゃないかと…前の司令官のように…体で黙らされるんじゃないか…とかさ…色々…」

「つつつ…」

前任は…こんな少女にまで手を出してやがったのか…！…そりや、曙や霞と言ったヤツらが標的みたいなものだよな…だって自分に反抗してくるやつが嫌いなんだから。

叢雲「でも司令官はさ、そんな私に色々教えてくれた。色々面白いことをしてくれた。…その全てが前任の時に思っていた妄想で…私の本当の姿だったから…それが凄く当たり前になって…それが嬉しくて…でも…同時に怖くて…」

「……」

叢雲「前任のように…また裏切られるんじゃないかって…また…皆が辛い思いをするんじゃないかって…なのに今の生活に満足して…それを換えようともしないで…私は…私は…」

「……別に、100の信頼を寄せろ……なんて、誰も言つてねえよ」ニコ  
叢雲「つつ!?!」

そう俺が言い放つと、ガバツと顔を上げると、こちらに驚いた表情を向けてくる。

「……何時誰が、信じる……なんて言つたよ」ニコ

叢雲「あつ……ちがつ……そんなんじゃない?」

俺の何気ない発言に、責任を感じてるのか、瞳に涙を浮かべながら、違う違うと頭を横に振るう。

「……叢雲、俺は人間さ」

叢雲「……?」

「人間つてのは不思議なもんでな。……人を裏切る、人を騙すつて事を、無意識のうちにしちまうのさ。……俺だつてしたさ。……俺が殺人鬼だった。……知つてるだろ?」

叢雲「……で、でもそれは……皆が」

「ああ。叢雲が信じる、皆が俺を許してくれた」

そう言うのと、何か衝撃を与えられたような表情を示す。

「……俺はみんなに許して貰えたんだ。……そういうものなんだよ。……俺が勝手に悩んで自暴自棄になつても、みんなは俺を待つててくれた。過労や疲労でぶつ倒れた時、すぐに駆けつけてくれた。それが当たり前のように……な」ニコ

俺は椅子から立ち上がり、叢雲の前で屈む。ずっとふざけて置いていた頭にさせてる手を、叢雲の両手を俺の両手で包み込む。

「叢雲が言うように、100の信頼を寄せるのは怖いし、何しろ、裏切られる。…俺だって、皆に裏切られるのは怖いし、信頼が途切れたら…なんて思ったら、怖くて眠れやしない。…でも…それでも信じるんだ」ギョツ

叢雲「っ…！」

「矛盾してるのかもしれない。いや、確実にしてる。だって、俺は裏切られるのは怖いし、信頼が途切れるのだって怖い。他の皆も、俺が裏切ると思った途端、怖くなるし、不安にもなる。…でも、信じてくれるんだ。提督は、司令官は、司令は、裏切らないって…彼女たちは信じてくれてるんだ。そこまでされて、俺が信じないのは、おかしな話だろう？」ニコ

自分でも、何を言ってるのか分からなくなってきた。でも…これだけは言える。

「…彼女たちは、俺に信頼を寄せてくれる。…そこには少しの疑念があるんだ。そして俺も、彼女たちに信頼を置いている。同時に、少しの罪悪感がある。…どっちが正しいとか、どっちが悪いとか…俺には分からないよ。…何を言ってるんだ俺は？」

思わず、心から思ってる事を呟いてしまう

叢雲「…ぶっ…あはっ…あははっ！」

「わ！笑うんじゃねえーよ！お！俺だつて、なんて説明したらいいかわかんねえーんだよ！信頼を寄せる？なんだそれ！気づいたら勝手に信頼されてたんだよ！！俺は彼女たちを信じてる？そりゃ！信じなきゃ何も始まらないからな！！でも裏切るとはまた別関係だし…だあもう！分からんねええ！」

思わず感情が乱れてしまう…仕方がなくないか？今までの会話を振り返つても…俺の言つてることマジで意味わかんねえーし…軌道修正もくそも出来ないし…やけくそになることしか…

叢雲「…少し…ううん♪…もう全部分かった♪」

「お前頭良くね？」

俺でも分からない言葉理解するとか天才かよ。このまま全世界の言語覚えちゃう？

叢雲「まあーね♪とりあえずは、司令官がアホすぎて皆綺麗に裏切ること出来ないと思鷹をくくられてるんでしようね♪」

「俺めちやくちや舐められてるじゃん…仮にも上の立場なのに…」

マジで？みんなそうなの？『この司令官頭弱すぎwwまじチヨロタンバリンwwww』つて思われてんの？やつべ…普通に傷つく…

叢雲「……だからじゃないの？…皆が好意を寄せるのも…さ」

「こんな頭残念司令官のどこに好意向けれんだよ…」

叢雲 「…私の場合は…ほっとけない…からかな♪」ニコ

「よく言われる」

叢雲 「でしょ？♪この1週間ずっと一緒にいて、思うことがあるのよ。…『もし司令官1人にしたら…絶対にダメだ』…ってね♪」

「うっわ…俺の人間性低すぎ…」

そりや…じいさんにも心配されるわけだわ…言動が子供ぼいって…そりや！ポンコツに見られますよね!!そりやね！ふんつつ!!…はああ…

「…誰しも、人に言えない秘密の隠し事とか…あるだろ。そういうもんだよ」

叢雲 「きゅ、急に何よ？」

俺が真面目なトーンでそう呟くと、首を傾げてくる。やめて、そういう仕草一つ一つが俺のS A N値をピンチにするのであってね…

まあ、意味のわからない言葉を散々並べたからだろうけど…現に叢雲には『ほつといたら飢え死にする残念男（誇張）』と評されてるぐらいだし…

「…要は、信じるのは勝手って事さ。それで裏切られて萎えるなら、最初から信じるなって話だ。よっこらせつと」

叢雲に合わせていた目線を外す。上から手を下げ、彼女の頭をわしゃつとする

叢雲 「わっ！ちよっ！やめ！」



「…それでも俺を信じるって言うなら勝手にしろ。…俺はこれまでと同じように、ここにいる子達を、ここにいる人達を、信頼して、任せるだけだ」ニコ

叢雲「つつー！」

「さつきも言ったが、裏切られるのは怖いし、皆が俺の元から離れる…嫌いなんて言われたら、そりゃ三日三晩何も手をつけなくなる自信はある。…だけど、それがなんだよ。そんなのにビクビク怯えてちゃ、何も手をつけられなくなっちゃうぜ!!」ニカ

この不安の気持ちは、誰だつて持ち合わせてる。人と人が寄り添い何かを成し得ると言うことは、そういうことなんだ。他人を信頼するつてのは、簡単のようで、実はすごく難しい事だ。

裏切られた人間なら尚更だ。最悪トラウマになって、引きこもる…もつと最悪な場合、自殺行為に及ぶものだってある。

…それでも、そんな事をされても、この子達は前を向いて今も歩んでいるんだ。前任の古傷があるにもかかわらず、現任である俺に信頼を置いてくれる。信じてくれる。

それに対して俺が怯えてちゃ、皆に申し訳ないし、俺がひよつちまつたら、皆に要らん不安をかけてしまう。このトップに経つということは、そういうことなんだ。生半可な気持ちで向かい合っても、相手を傷つけるだけだ。相手を心配させるだけだ。

そのふたつをどちらも俺は経験した。曙と霞の行き違いしてしまった時。

俺が不安を一人で抱え込んじゃった時。

「…失敗を経験したからかな…こんな事を言えるのかもしれない。だから叢雲、信じるなら勝手に信じてろ。…俺もお前に勝手に期待を寄せて勝手に信頼してるから」ニカ

叢雲「つ！…司令官は…自分勝手だね…」

「上に立つ者なんだ！それぐらいは許されるだろう？」ニコ

叢雲「…ふっ…確かに…言ってるかもね…」

「だろお!?てか腹減った！飯食おうぜ！飯!!飯が俺を呼んでるぜ！」

…私は、どこか勘違いをしていたようね。

「おお！ちようどいいところにむっつりが」

陸奥「誰がむっつりだ！いきなりセクハラとかどういう心情をしている!?!」

「普通の心情」

陸奥「提督の普通は普通じゃないって常識…知ってる？」

「何それ酷い……」

司令官は、子供のようだった。本能のままに動いて、本能のままに面白おかしい事をする……

嫌なものには嫌とハッキリ言つて、楽しいものには楽しいと心の底から笑う。艦娘であるあたし達に対して心を開いて話をふったり聞いたり……その全てが子供のようです。そしてどこか惹かれる人で……

陸奥「全く……叢雲も覚悟してなさい……こいつは……こういう奴よ」

「なっちははっ♪失礼な奴だな。胸揉むぞ」

陸奥「いや真顔で何やばいこと言つてるのよ!？」

叢雲「……はあ……ほら、さっさと食堂行くわよ……腹が減つてるんでしょ?」

「おうっ! そうだったぜ! どうだ? むつつりも」

陸奥「だから陸奥だ!……そうだな、暇だし、一緒に行くでしょう」

「よしきた!!」

ああ♪……あと一つだけ……肝心な事を忘れてた

「おい(こ)らあ! 叢雲お!」

叢雲「っ!?! な! 何よ!?!」

「叢雲は俺の隣! 秘書だからって一步後ろに下がるなっ! いつも言つてるだろ!?! 叢雲は

叢雲！秘書艦だからとか関係ない！同じ場所で住む家族！はい隣！ほらほらほらほら  
!!

叢雲「わつわああ！わ！分かった！分かったから手を引つ張らなっ！…んもうっ…

♪

知ってか知らずか…行為なのか事故なのか…司令官は我々艦娘が好きなら行動ばっかしてくる…ほんつと…こればかりは慣れなければならぬ…わね…♪

「…何笑ってんだ？」

叢雲「ふふっ♪…さあ？なんででしょーか？」ニコ

陸奥「ああ…あの叢雲もとうとうこちらの世界に…」

「何厨二つばい発言してんだ？」

陸奥「気にしないで…」

司令官…この人は…あたしにとつては少し…眩しすぎる…それほどまでに…♪

叢雲「…えへへ♪」

「…頭打った？つっても、頭に常になんか浮いてるけど」

叢雲「…誰の頭が磁石板ですって？」

「誰も言つてねえーよ？あいたい。槍でつつくな…脇腹つつくな…先つちよが脇腹貫通

して地味に痛……いたたつ……」

「私好みの………司令官♪」

## ある日の日常+あるふあ

「よし。だいたい万事解決やな」

曙「は？」

霞「何が？」

叢雲「…?？」

「そういう所だよ（真顔）」

曙、霞、叢雲。この3人は珍しい奴らだ。何故かって？最初のコンタクトが暴言やら暴論やら暴行から始まっているからだ。

いやー、こうまでアタマオカシイ奴らが仲間になっていくと、面白おかしくなっちゃいますね。

仲間というか、心を開いてくれた子達と言うか…一番まともな奴があ鈴谷と加賀だぞ？

鈴谷「すうう！はああつ！提督！この服ください！」

「それは俺の服だ！てか何堂々と匂い嗅いでるんだ！犬かてめえーは!？」

鈴谷「何を言ってるんです。私は提督の艦の中でも一番に秘書をこなしてきた艦……」

れぐらいは序の口です」キリ

「おうキメ顔のところ悪いが今日の秘書は夕立たぞ」

夕立「…ん?…どうしたの鈴谷さ…あ…痛い…なんで?…?…なんで私の頭掴んで…痛い…鈴谷さん痛い…もげる!もげるっぼい!?!それ以上は本当にやばいっぼい!!」  
「夕立って、ふとした時にポイが帰ってくるよな。そういう仕様なの?」

時雨「違うさ。夕立は感情が高ぶった時しか言わないのさ。…ほら、感情的になってる夕立って、結構言っていないかい?」

「あ、たしかに。言われてみれば楽しんでる時もポイって言うし、怒りすぎた時もポイって言ってたな」

夕立「ちよっ!?夕立を見捨てて呑気に会話してないで!早く鈴谷をどうにかするっぼい!?!つてかまだ力上がって!ぼいぼいぼいぼいぼい!!」

「ついに痛いポイに変換されて…」

時雨「これはあのまま言語がポイになるのも時間の問題…」

夕立「呑気に喋ってないで鈴谷をとめるっぼい!!」

「いつもご苦労様です」

熊野「全くよ：毎回鈴谷がなにかやらかす度にあたしが呼ばれて：結構あたしの居る階からこつち来るのに3分かかるのよ？階段だつて楽になるわけじゃないんだから：」  
「まあまあ。文句言つてても鈴谷が変わらないんだから仕方がないじゃないか。はいこれ、鈴谷ね」スツ

そう言つて、熊野を呼んだ際にぐるぐる巻きにして、何時ぞやと同じようにカンペで『わたしはぼうりよくをふるい、ていとくさんにしばらくられました』とひらがなで書いたのを手渡す。

熊野「：提督、あたしの気のせいかな。今の鈴谷、すつごい嬉しそうな顔してる気がするんだけど。」

確かに熊野に手渡す時にちらつと確認したが、はあはあつといき荒くして、蕩けた顔をこちらに向けていた気がしなくもないが：

「：それは目の錯覚だよ。俺には何も見えないがな」

熊野「：提督それ、ただ単に目を瞑つてるだけだよ」

「何を言つてるか。ちゃんと目を開けているぞ？ほらこのとおり」スツ

そう言つて、紙にペンで目のようなものを書いたのを胸元に貼り付ける。



「…あ、曙ー、セロハンテープ投げてー」

『はあ？…たく仕方がないわね…行くわよー！はいっ！』

「あいたっ…」

熊野「……………見えてるんじや」

「いやいや違うさ。これはあれよ。たまにあるだろ？目を瞑った隙にやられる事。そういうのと同じだよ。あ、霞？これセロハンテープどこ？」

霞「…あんた目を開けなさいよ…足元に落ちてるわよ…あーそこじゃなくて…あーもうーはいー！」パシンッ

「あいてっ…おおうーサンキューー！」

霞「ふんっ！感謝してよね」

「するする。超するさ。ありがとなー」ナデナデ

霞「ふふんっ♪って頭撫で…あちよっ…そこ弱っ…はうんっ…／＼／＼」

「よし、これで解決。」ペタ

熊野「いや提督、今までのコントにも似た茶番劇を0から100まで見てたんだから何も言い逃れ出来ないよ…」

紙の目を胸元に貼って自信満々にそう熊野に言ってみるが、どうやらダメなようで

す。

「…まあ、ですよね。」パチリ

観念して目を開ける。

「…うん。確かに顔が蕩けてますね。」

熊野「…でしょ?」

改めて2人で鈴谷と顔を見てみる。確かに顔が紅く火照っており、目がとろりとしていた。

熊野「…提督…あんたなんかした?」

「人間きの悪い。ただロープで縛っただけよ」

熊野「もはやそれが原因なんじゃない…?」

これが原因?馬鹿言え、よく縛ってるぞ。…いやこれは語弊があるな。悪さした時に縛ってるぞ。軽めにだけど。

「…試しに触ってみれば?」

熊野「え?で、でも大丈夫?…な、なんか爆発したりとか…」

「お前鈴谷が核兵器のスイッチか何かと思ってるの?」

熊野 「そ、それじゃ…失礼しまーす…」 ススツ

「爆弾処理みたいな動きするね」

ピト

鈴谷 「……………?」

熊野 「あ、あれ?」

「ほれみた事か。何も起こらないじゃないか。やつぱり目の錯覚だったんだよ。熊野も  
まかせてますなあー」

熊野 「ま!ませてなんかないわよ!?!/そ!それよりも!提督が触れてみたらどうな  
の!?!あたしのなんか反応変わるかもしれないわよ?」

「はあ?そうやって言い逃れしようとするのは良くないと思うなあー…仕方がない。こ  
れでお前の目が淫乱ギャル目だという事を証明してやろう」

熊野 「誰がギャルよ誰が!!」

ピト

鈴谷 「……………」

「ほーらー!この淫乱伊達ギャル眼鏡!」

熊野 「伊達も眼鏡もどつから来たのよ!?!」



間で全然ウエルカムなんですけど……お願いですから意味のわからない会話から入るのはやめてくれますか……？」

「なんでさ」

明石「いや普通に考えて……」

「ちえー。まあー、気をつけるさ。……気をつけるだけで『やめないとはい言っていないとか言ったら私でも怒りますよ……？』反省してます」

明石「全く……それで？急はどうしたんですか？」

「いや深い意味は無いよ。たまたま近くまで来たから寄つてこうと思つてね。」

明石「……ただでさえここら辺に近づく艦娘が極小数しか居ないのにたまたま……？」

「提督にも色々あるのよ」

決して鈴谷の胸に触れて追いかけてたとかじゃないよ。その際に熊野を囮にしてものの数秒で大破したとかじゃないよ。マジで。

ちなみにその際はダッシュしながら手持ちのスマホで事務室にいる夕立に電話して風呂にぶち込むように言つたから何とかなつてると思う。

俺、変な所で器用なんだ★褒めてくれないか？ニヤリ

『わあー★キモイね★』

(はっ倒す★)

明石「それで？寄って何をしよう？…ハッ！／＼まさか他の艦娘が来ないことをいい事に私にあんなことやこんな事を！／＼」

「お前の頭はエロ同人誌か。んなわけないだろ」

明石「ですよねそうですね…提督は変態の癖にそういう所には一切興味ありませんもんねえ…」

「変態は認めるが、何も興味が無いわけじゃないぞ？…ほら、女だらけの職場でんな伝家の宝刀盗み出すこと出来ないというか。」

明石「提督のそれはなまくらの錆びれ刀ですけどね」

「だまりんす。てか誰の股間が糸こんにやくだつて？立派に秋刀魚だわ。すいすい泳げるわまだ。」

明石「本当ですかあ？泳いだ瞬間溺れるんじゃないですかあ？」ニヤニヤ

「安心しろ。持久戦には余裕がある」ドーンッ

明石「…あまりそこを威張る人居ませんよ…」

「そんな事より、へん…趣味の機械弄りはいいのか？」

明石「今明らかに変態って言おうとしましたよね？」

「そんなことはないぞ。変態弄りも列記とした機会だ。思う存分趣味したまえ。」

明石「わざとですよ？めちやくちや混ぜつてますよ？提督の左腕サイボーグに変え

ますよ？いいんですか？」

「あ、まじい？片手サイボーグとか男のロマンプリプリやん。頼むは」

明石「もうやだこの提督……」

「弓撃ってその矢が偵察機とかになる原理がぜんっぜんわかんないんだけど加賀はわかるの？」

加賀「いいえ。全然全く私にもなんのこっちゃです。」

「即答すんなよ……」

またまた場所を変えて今度は弓道場。その一角で黙々と弓の練習をしている加賀さ

んの横であぐらをかいてその様子を見守ってる。否、邪魔してる。

効果はいまひとつのようだ・・・

加賀「てか珍しいね。…提督が弓道に足を運ぶなんて。…初めて…じゃない？」スパ  
ンツ

「そうだねえ。ここに来るのは初めてだね。お隣の剣道には何度かこんにちわしてるけど」

実は言うど、弓道場と剣道場はお隣さん同士だったりする。んでもって、剣道は夕立とか時雨とか天龍とかと一緒に毎日のように行つてたから、弓道場には初めましてなのである。

「しっかし、弓道場なだけあつて、剣道場より和を意識してるんだな。」

加賀「そう…ねっ。…ここは元々茶道でもあつたから、和の面積が色濃く残ってるのも、そのせいね。」スパンツ

「さ、茶道なんてあつたのか!？」

加賀「随分昔の話しよ。艦娘達の娯楽の場所。…最も、前任が道具に安らぎの空間など要らん!というて、撤去されてしまったのだけだね」

「つくづくクズでアホだな…前任の提督は…」

加賀「それに比べて、今の提督は素晴らしいわね。…少しではあるけど、皆に慕われ



て、施設も料理もお風呂も何もかも完備して、充実して…」

「当たり前な事を褒めてもなんも嬉しくないぞ…?…食が満足じゃなければ人はやる気を出せない。…汗で濡れた体をスツキリ出来ないだけで、清潔感やパフォーマンスが機能しなくなる。…どれも必要なことで、どれも当たり前なことだ。前任が変なところだけちつてたと思つてくれればいい。」

加賀「…だからこそ…よ。…私は提督には感謝しきれないほどの恩がある。…それを返せるかは…分からないけど、返せるようには努力してる…つもりよ。」スパンツツ

「…その練習も、その恩返しするための積み重ねって奴か?」

加賀「いいえ?これは日課」

「そこは嘘でも積み重ねて言えよ…」

加賀「…積み重ねよ」

「もうおせえーわ」

加賀さんつて…クールなんだけどどこか抜けてるんだよなあ…こう…ポンコツというか…なんというか…

?「…あらあ?こんな所になんで提督様がいるのですかあ?」

加賀「…瑞鶴…」ギリツ

「んああ？おつ、君とは初めましてだよね。こんちやー」

お茶を啜ってる時にその後ろから声をかけられたので、後ろを振り返ると、薄緑色の髪を、ツインテールにしたお胸べったんこの可愛らしい女の子が腰に手を当てながら俺を見下していた。

背中にも弓矢を携えてるあたり、こいつも加賀と同じ空母かな？

『いんや？あやつは軽空母じゃよ？』

（いきなりめっちゃ喋るな。…てか空母と軽空母って具体的に何が違うの？）

『…強さ？』

（お前も分からののかいつ）

『正直な所な。…ぶっちゃけ、軽巡洋艦に偵察機能携えましたー！つてのが、軽空母だと解釈してる』

（随分ぶつ飛んだ解釈だな…まあー言うて俺も、そう言う考えなのだが…）

『ワシのこと言えんやん』

（そりやー…まあー…うん。）

瑞鶴「へえー？提督様は随分とお暇なんですなえー？こんなたかが1人の空母に時間を割いて！」

加賀「瑞鶴!!」

つとと、意外と突つかかってくるねえ。…それと様って呼ぶ時に覇気が強くなるのは、煽りとみた。…まあ―スルーしますけど。…気に食わない訳では無いしね。

てか加賀さん、鬼の形相過ぎない?なに?仲悪いの?この2人:まあ―いいか。

「たかが?…面白いことを言うね。俺は仲間の1人である加賀と雑談してただけだよ。

…お邪魔だったかな?」ニコ

俺がそう優しく言葉を飛ばすと、なにか驚いたように目を見開いた。そんな俺おかしなこと言ったか?

加賀「っ!提督!!」

「まあまあ♪そんなに怒るなって♪…眉間にシワがよって大変なことになりますよ?」ニコ

加賀「つつっ!!…:はああ…私が怒鳴った所で何も変わりませんよね…もう好きにしてください…」

「あいあいさー」

瑞鶴「っ?!…ふ、ふんっ!随分落ちたようね?」

加賀「…なんですって?」ギリッ

瑞鶴「提督なんか尻尾をブンブン振っちゃって!そんなにそのへにやちよこがいい

のかしら!？」

加賀「……………」

瑞鶴「…なっ! なによ! なにか言い返してみたら!？」

加賀「…いえ…特に何も。…それに提督の前ですし…言うのも疲れるわ…」

瑞鶴「つつ! あんたは!!」

「あのおー、お取り込み中の所悪いんですけど…」

瑞鶴「あっ!?! 何よ!？」

「…瑞鶴さん…つて名前…だよな?…なんかごめんね? その…君達のテリトリーに勝手に入って…」

瑞鶴「へ? あっ…いや別にそこに怒ってるわけじゃ…」

「え? あ、そうなの?…よかったあ…なんか邪魔してる気がしちやっさ…そうじゃなきゃ良かった♪…ここで見ててもいいかな?」ニコ

瑞鶴「……………すっ…好きにすれば?」

「おう! んじゃ好きにしてるな!」ヨッコラセツト

そうして俺は再度、腰を下ろす。

瑞鶴「……………」スパンツ

「ほお……うまつ……加賀より上手いんじやねえーか？」

加賀「なんか言つたかしら？」グギギギ

「痛い痛い痛い……もげる……耳もげる……」

な、何なのこいつ……提督の癖に私の事ぜんっぜん罵倒してこないし……ぜんっぜん私の事……叱ってこないし……

瑞鶴「……」スパンツ

「うおっ!?また真ん中射抜いたぞ!?おい加賀!すげえーな!瑞鶴つて子!」

加賀「……私にも出来るから。……………」あつ」

「……よーし。何も見てないぞー。うん。何も見てない」

加賀「……うっ……うんっ……た、助かるわ……／＼」

それに……あの加賀よりも私の事褒めて……こんな、初めてだわ……

何をやっても私らは加賀や赤城さんと比べられて……私らは二の次三の次……それこそ、罵倒だつて貰つた。

暴行もされた…嫌なことも…たくさん…たくさん…なのにつ…

瑞鶴「…」スパンツ

「おっしい！今の射抜いてたら3連続だぜ!？」

加賀「…はっ!」

「はいおしおき」コツンツ

加賀「あうっ…じ、地味に痛い…」

「そりゃ、痛くしてるからな」

どうしてっ…どうしてそんなに褒めるのっ…!悲しむのっ…!

瑞鶴「…」スパンツツ

「うがああ!真ん中からすこしずれたああ!てかすごくね?真ん中的確に射抜けるってまじやばくね?」

加賀「…それぐらいの精度がなきゃ、空母や軽空母はやっていけないのよ。」

「でも加賀、さつきからノーコンじゃん」

加賀「…:…:…うるひゃい…:/」

「あ、噛んだ。」

なんで自分の事のように騒げるの!?!やめてよ!これ以上私を…:!!

瑞鶴「…!」スパンツツ

「うがアアア!!外れたアアア!!」

瑞鶴 「うるさいっつ!!」

「えっ……あ……ごめんなさい……」

瑞鶴 「なんなの!?なんなのあんた!!意味わかんない!」

「……え?」

瑞鶴 「っつ!!イライラすんのお!!なんで加賀じゃなくて私を見るのよ!?なんで自分の事のように騒げるのよ!!なんでっ!!なんでっ!!」

「え?だって、加賀のはさつき見てたし、せっかくなら、他の子が撃つ姿もみたいじゃん?」

瑞鶴 「っつ!!」

どうして……

「それに、瑞鶴の撃ち方には加賀と違った撃ち方だからね。見てて飽きないのさ。…それに狙いも正確。時たま外れちゃうけど、ま、そこは人間ですしね。失敗する事もありますって!ね?」ニコ

瑞鶴 「どうして……よ……」

「へっ?」

瑞鶴 「……どうして……私を見るのよ……前任なんて……私の成果なんて見てくれなかった……」

私の努力も…功績も…何もかも…そこにいる加賀に取られた…赤城さんに取られた…お前はこいつらの下位互換だって…だから私は…私は…」

「…前任と俺を、一緒にすんな。殴るぞ？」

瑞鶴 「っ!？」

「前任がクズで最悪なのは分かるけどよ？それを同じ職業である俺に八つ当たりされても困るぜ…」

瑞鶴 「ちがつ…そういうつもりじゃ…」

「そういうつもりだろ？…何も自分が下だって決めつけて、その苛立ちを、その考えにさせた提督って言う俺に八つ当たりしてる。」

瑞鶴 「っ…」

…私はただ…加賀さん達の方が上手いんだって…その言葉が聞きたくて…それで私が納得できるって…

「自分勝手だよ。…瑞鶴は」

…自分勝手…確かに…そうだ…ね。…私は…私を納得させるために…提督を煽って…それで…それで…

「前任に酷いことされてるのは分かってるさ。…だけどそれを俺にも当てはめないでくれよ…。俺はただ瑞鶴の弓道姿がカッコよくて、見てたんだから」



瑞鶴 「っ!」 バツ

「姿だけじゃない。さつきも言ったとおり、射抜くまでの冷静さ、集中。その全てがかっこよかったら、見てたんだ。加賀にはないその顔がかっこよかったから、見てたんだ。」

瑞鶴 「わ…：たしが…：加賀より…：かっこ…：いい?」

な、なんの冗談を…

「それだよ。」

瑞鶴 「へっ…?」

「加賀といっつも比べてる。」

瑞鶴 「だっ…：そっそれはっ…：前任が…」

「俺はお前に加賀より劣ってるなんて一言も言っていないが?」

瑞鶴 「っ!!」

「むしろ今日が初めましてだよ。こんにちわ」 オジギ

瑞鶴 「なっ…：へ?」

「…何が言いたいかって?…：お前は瑞鶴であって加賀じゃない。加賀と比べるより、自分自身で比べろ。…：悪いのを全て加賀より劣ってる。を理由にするな。いいな!?!」

瑞鶴 「えっ…：えと…」

「…：俺はお前の射抜く姿がとても好きだ」 ニコ

瑞鶴 「っ?! /」

「それは加賀には出せない味で、瑞鶴にしか出せない良さだ。…そう言った物を見つけていけ。小さくてもいい。自分は自分だ。自分のいい所をいっぱい探していけ! 瑞鶴を構成できるのは、瑞鶴自身なんだから! 他人と自分を比べるな! はい! 説教終わり!」パンツツ

そう言つて、提督は手を合わせて、パチンつと音を鳴らす…

「…これからは、自信を持つて射抜いてみる。…誰か…なんて想像すんな?…自分自身だぞ?…あと、これはただの応援な。」

そう言つと、提督は立ち上がつて、出入口のドアに手を当てると、私に振り返つて…

一言

「頑張れよ。…期待してる」ニコ

瑞鶴 「つつ!!」ブワツツ

そうして…彼は静かにドアを閉めてその場を去つた…

瑞鶴 「……………」

加賀 「…分かつたかしら? あれが、今の提督よ…」

瑞鶴 「……………うんつ…♪…何となくだけど…分かつたよ…♪」

加賀 「チラ…そつ。…これからは私に当たるんじやなくて、提督に当たる事ね…」

瑞鶴「…んっ…♪…そうする…♪」

期待してる…かっ…そんな事…初めて言われたかも…いや、初めて言われた…

何よっ…なんなのよっ…そんなの言われたらっ…

瑞鶴「…よしっ…♪」スパンッ

やる気…出ちやうじやないっ…♪

シリアスだかシマリスだか分からないけど瑞鶴さんと話してるだけの回!!

瑞鶴「……………」

「……………ん？」

瑞鶴「…?…何よ。」

「いや、なんでいんのかなあって」

瑞鶴「なに?あたしが居たら困るわけ?」

「滅相もございませぬ。」

こちら、先日説教した瑞鶴さん。

平日の昼下がり、今日は珍しく皆非番。そもそも海域の開拓もしてなければ、遠征も全くしないうちでは、非番なんてしよっちゅうなのだ。ただ単に今日は本部から送られてくるはずのゴミが珍しく届いていないため、書類整理をしなくていいというのがでかい。

まあ、秘書艦すら居ないのは初めてなのだけだね。誰かしら居るからね。鈴谷とか鈴谷とか山風とか。

しかしこの扉をノックして入ってきたのは、今も俺の斜め後ろのパイプ椅子に座る瑞鶴さん。なんでも『暇だからきた』との事。…先日会っただけで、暇だからきたと言われるようになるとは、思わなかった。

瑞鶴「…いつもこんな感じなの？」

「いや、今日は本当に珍しい日だな。いつもなら目の前のソファで時雨やら夕立やらがトランプしてたりしてるぞ。」

そう言っただけで目の前の白いソファが二つ並んでるところを指さす。

瑞鶴「…ふーん。結構適当なのね」

「適当…ちやー適当だな。…真面目なら、週に一度君達を遠征に行かせてるからね、」

瑞鶴「むしろ行かせなくていいのかしら？…ここ2ヶ月…いえ、あんたが来てから、あたしらは遠征はおろか海域の1つすら増やしてないのよ？1番の疑問は、そんな長い期間遠征をしてないとなれば、備蓄の方がそこを尽きるんじゃない？」

「それについては心配ご無用！」

瑞鶴「……はあ…？」コテ

俺が歌舞伎っぽく手を突き出してポポンつと裏でSEが流れてるであろう顔をする  
と、すっごく冷たい視線で俺をジト目で見てきた…泣きそう

「…ゴホン。備蓄については妖精さんの方が最近開発した自動増殖機っていうまんまな機械を作ったらしくてな、それで今は余りある資源がわさわさある。」

瑞鶴「……は？」

んまあーそりや、名前通りといえは、無限に資材を生み出す装置を、妖精さんたちが自ら開発したということになる。…口で説明しても、分かるもんも分からないだろう。…なので。

「エビバデイカモン！イエエエエエエエ!!」パチンツツ

瑞鶴「ビクツ

俺がそんなに奇声じみた声を上げながら指パツチンをする。その声にびっくりしてビクリと肩をびくつかせる瑞鶴さん。可愛いつすね。

（ひやつつはアアアア!!）バアアアアアンツ

そんな世紀末の世でモブ粹してそんな声を上げながら窓から現れる黄色い帽子に安全第一と書かれたのを被った妖精さん。

「やあー、作業中呼び出してすまないね。」

（なになに！提督さんの呼び出しなら喜んで！♪…察するに、僕達が開発した資源無限増殖機についてこの子に教えてやってくれと言ったかんじだね）ニコ

わあーすごーい。まるで心を見透かされたような完璧な返答が帰ってきたー。僕怖

い（）

そうすると、先程世紀末のように現れた妖精さんに目を丸くしてるのもつかの間、その妖精さんに『こっちこっち！』といって引つ張られる瑞鶴が『わわわ!?!』と慌てたような声を上げて引つ張られていく。

まあ、妖精さんたちつて、体格で舐められガチだけど握力は成人男性並だからね、そりゃ、それぐらいなきや装備の整備もおろかなにかすることもできやせんぜ。

てか、そうか。瑞鶴つて空母か。だから彼女らの声を多少なりとも判別できるのか。…多分あの世紀末声は言語を理解できなくてもわかると思うけどな…後ろにバアアアッつてテロップ見えたもん。

誰だろうな。空母を軽空母つて言ったやつ。マジで。

『……………』

(なんか言えよ)

どうやら無言を突き通すようだ。そこら辺小賢しいなこの爺さん。

ガチャ

「あ、帰ってきた。おかえりー。どうだった？」

瑞鶴 「…さっぱり全くもって分からなかったわ」

「ははっ☆だよね☆俺もわからんっ！」 キリ

一応、ここを管理するものとして、妖精さんにこういった装置は採用か不採用かってのを委ねられるのだが、機能面では文句なしだったし、何も問題ないのだ。

まあーしかし…なぜその装置を作ろうとしたとかの経緯やらが曖昧というか、よく分からないので、諦めるしかない。

機能面だけ見れば文句無し。だが構造の説明とかされるとパンクする。俺なら尚更だ。

瑞鶴 「…ふううっ」 ボスツツ

目の前のソファーに疲れた…と言った感じで腰を落ち着かせる。随分長い事話してたわけだから、色々疲れたのだろうな…分かるよ。その気持ち。俺も小一時間ほど説明を受けたが、まるで意味がわからなかったからな。

「…お疲れ様です」 コト

瑞鶴 「っ！…あんだ、本当に提督なわけ？」

「へ？何がだ？」

俺がそう一言漏らしてハーブティーを彼女に差し出すと、驚かれた顔をされると、そ



う呆れたように言われてしまった。なんか変なことしたかね…

瑞鶴「……ありがと」スツ

「ん……？おうっ！」ニコ

瑞鶴「……………」ズズズツ

お礼を言いながらハーブティーを飲み込む瑞鶴にニコツと笑って素直にお礼を受け取る。……いやだからなんでそんな微妙な顔するんだよ。

瑞鶴「……んっ……美味しい……」

「だろお？お茶とか紅茶を入れるにはちと自信あるんだぜ？これでも、ここの提督だからね！お茶の1つや2つ、入れられなきゃ困りますぜ！」

瑞鶴「ふふっ……なによっ……それ♪」

「これか？お茶を入れる執事の真似」

瑞鶴「ふふっ……あはは！あんたバカア？♪」

「馬鹿だから出来んだろうが」ニコ

俺の頭おかしい行為に手を口元に持っていきクスクスと笑う瑞鶴。俺もニコツと笑って、そう口ずさむ。

瑞鶴「……あんたはさ、なんで提督になろうって……思ったの？」

「俺？……んー……なんでだろうな……強いていえば……成り行き……かな♪」ニコ

瑞鶴「…はあっ…?」

俺のその返答に、はい?とと言うように首を傾げる。

「鈴谷から聞いた。提督つてのは、素質あるものから選抜されて、3年間の訓練を得て、この職業に就くつてね」

瑞鶴「それが当たり前でしょ?」

「ところがどっこい…俺はただの一般人だよ」ニコ

瑞鶴「なっ!」

「銃の扱いは愚か、君達の専門知識すら分かっちゃいない。…知ってるのは、昔に殺めた人の重さと、その後悔、反省だけさ。それ以外は、本当に人としても分からない」ニコ

瑞鶴「……………」

ここの子達のおかげで、昔の事には踏ん切りがつけた。彼女らが俺を助けてくれたように、俺も、知らず知らずで彼女らを助けていた。

夕立に言われた。提督は優しい人だねって。でもそれは違う。…俺だって優しく生きたかった。過ぎたかった。でも、実際は空っぽで、臆病で、逃げてばかりだった。

時雨に言われた。提督はすごい人だねって。それも違う。元々すごい人じゃなかったんだ。ここにいる子達をまもりたいと、そう思えるから、すごい人になろうと努力しただけだ。

そうさ。努力すれば、人は誰だつて変わる。変わつていけるんだ。どれだけ小さなことでもいい。ちっぽけだつていい。笑われたつていい。ただ諦めなければ、誰にだつて希望はある。

俺は1回諦めて、自分の過ちを忘れた最低な男さ。…でも、だからこそ、俺は彼女らを救えた。同時に、彼女らもそんな俺の過去を聞いても、過去は過去だと割り切つてくれた。

瑞鶴の悩みも、きつとそこだろう。あの時説教をして、晴れたと言つても、何も成果をあげていない人間にあーだこーだと言われても、それはただの言葉でしかない。本当の意味では、この子は、この子にももつと、闇を抱えた子達は分かりもしないだろう。むしろ、何を知つてるんだと怒るだろう。だからこそ…

「…それでも、俺はこの鎮守府につけたことを、誇り思う。提督になれたことを、嬉しく思うよ」ニコ

瑞鶴「はっ…物好きね…提督は。」

「かもな♪…でも、瑞鶴も、元々は鈴谷や加賀も…ましてや駆逐艦である時雨や夕立だつて、提督という名の俺を嫌つていた。人間そのものを嫌つていた。」

瑞鶴「……」

「でもさ、それはあくまで前の人間…前の提督がクソだったからだ。今はそいつはどこ

で何をしてるかも分からないし、知る必要も無い。それでも奴が与えてきた傷は、君達の心に、体に、深く根を張って蝕んでいる。……でも、それでも時雨や夕立達は、俺を信じてると言ってくれた。」

瑞鶴「……」

「加賀や鈴谷は、俺を支えると笑顔で言ってくれた。…それは俺が知らず知らずに救っていた証拠なのだ。…どれだけダサくても、蝕んでいても…救えるやつは救えるんだ。だからこそ、俺は提督で居られる。」

瑞鶴「…意味わかんない」

「だな♪…俺も考えながら呟いて、言葉に出してるが、分からないさ。…それでも、こんなみんなの心が淀んでる鎮守府でも、笑顔は生まれるんだ」ニコ

瑞鶴「…そう…ね。少なくとも、あんたが来てからは、笑顔は…絶えないわね。」  
「…どれだけ小さくてもいいんだ。今はまだ少人数でも…信じてくれる人が居るってだけで、儲け話さ。」ニコ

瑞鶴「…提督は…強い人ね。…私なんて」

「違うぞ、瑞鶴」

瑞鶴「え……？」

「強い人なんかじゃない。…強くなろうとしたんだ」ニコ

瑞鶴「つつ！」

「まつ、ような痩せ我慢さ♪優しくはなかった。でも、ここに居るみんなを笑顔にしたいから、自然と優しくなれた。…強くなれたのも、ここを大切に思うからこそ強くなれたんだ。何より、君達と一緒に歩みたいからこそ、俺はさらに強くなりたいと思うんだ」ニカ

瑞鶴「……」

「君たちを先導するのは我々提督だ。そんな奴が彼女らを人間じゃないと蔑んで何になる？ 疑心暗鬼にさせて何の得が得れる？ ……ないだろう？ ……だから信じるんだ。信じて、信じ抜いて、互いを知り合う。…人外？ 馬鹿言え、考えて行動をしてるじゃねえーか。俺ら人間と変わりねえ。兵器だ？ いいや違うね。君たちはかわいい女の子だ。断じて兵器でも何でもない。君達はかわいい女の子で、一人一人個性がある、大切な仲間だ！」ニコ

瑞鶴「つつ…提督は…本当に…おかしい人…ですな…♪」

「……提督とは、最も頭おかしいヤツがなるに相応しいんだよ。…俺みたいにな」ニコ

瑞鶴「ふつつ…あはっ…あっはっはっ…♪…本当に…変な提督…でも、嫌いじゃないよ…。」

「…なあー、瑞鶴」

瑞鶴「…ん？…なに…かな。提督」

「俺の夢な、みんなが胸を張って、笑顔に帰れる…誇りに思える…そんな鎮守府を目指してるんだ。」

瑞鶴「つつ!!」

「…当然、今の世の中、そんな事を良しとするものは、万に一つもないだろう。愚行と、愚か者と蔑まれるだろう。…瑞鶴はどう思うよ。この考え」ニコ

窓を背にして、そう瑞鶴に問いかける。

瑞鶴「…最高に…素敵な夢…ね♪…むしろ…あたしら艦娘の夢でも…ないかしら？」

「そりゃ、大前提はお前らの笑顔だよ…俺の笑顔だけじゃ、到底理想にはたどり着けやしないさ」ニコ

そう、朗らかに笑ってみせる。ふふつと一呼吸置くと、俺と同じように窓の前に立つと、一言

瑞鶴「…あたしは信じるよ。…なんか、あんたなら出来そうな気がするから…♪…馬鹿な話でも、無謀な話でも何でも無い。現にあんたはここに来て、多くの事を変えてくれた。妖精さんだって住み着いている…♪」

ふうーつと呼吸をまた挟むと、俺に体を向けて…

瑞鶴「…本当は心のどこかで…あなたのような人を待つていた…のかな♪…あたしらを人間とみて、あたしらを一人の女の子としてみてくれる人を…さ。でも、そんな人現れないと、居るはずないと割り切つて、あたしはこの世界を恨んで今まで戦つてきた。…何を守るのか、何のために生きるのか…戦うのかも忘れて…ただ必死にこの世に抗つてた。…でも」グッ

「んおっ…？おおっ…？」

瑞鶴「…私にも、生きる意味が出来た。守るものが出来た！…私の生きる意味は、あなたの、提督の夢を叶える為に！守るべきものはここ！私らの鎮守府！…あなたが私に与えてくれた夢と希望さ。…せいぜい、裏切らないでね…？♪」

グイツと俺の左腕に絡んでくると、ぎゅつと掴んで、そう上目遣いで俺に言ってくる。

「ぐっ…善処…するよ…」ニコ

俺はそんな彼女に引きつった笑顔を向けて、そういうことしか出来ない。ここで『いやーちよつとまだ分からないっすねえーw』とかネタぶちかましたら、この子に射抜かれると思つたから。そう答える。

瑞鶴「…にししっ♪言質…取つたからね…提督♪」ニコ

「…おう…頑張ります…」

瑞鶴「うんっ…頑張つて！…提督♪」ニコ

なんだろう。このどうにも出来ない感情は。とりあえず俺はこの瑞鶴の笑顔を見ながら、現実逃避でもするか…

そのご、どっから現れたのか分からない鈴谷に腹パン喰らいました。…なんでやねん。



## 演習の誘い?…キマシタワー（何が?）

「んんっ? んだこれ?」

ある日の朝、いつも通り我が鎮守府のポストに無造作に入った仕事ゴミの山を持ち出す。よいしょっと持ち上げた時に、はらりと何処かのファイター宛のような紋章のついたシールがついた手紙が落ちる。

「……妖精さん、ちよつとこれ持っていつもの場所に運んどいて。」

（分かりました♪）

「うん♪ありがとね?」ニコ

俺の後を着いてきてくれた数人の妖精さんにそう伝えようと、笑顔で受け取ってくれると、パタパタと持ち出して言ってくれた。

「……」

俺宛に届けられたその紙を俺はソツと開け、目を通す。ざっくり伝えようと、演習の誘いのようだ。こちら側にペナルティがない、至極真つ当で、正当な手続きをもして行われる、練習試合。…だが

「この一文がなければ…な。」

それは文の中心文、その部分だけ何故か赤い文字記入された『なお、この演習結果は上に報告する。』との一文。なぜその部分だけを赤黒い字で証言したのかは、何となく察しがつく。

凡そ、下手な事をすればお前の寝首を搔つ切る…というあからさまな挑発行為だろう。

まあ、そもそも前回の演習も別に下手な事はしてない。俺は彼女達に作戦を立案し、それを実行しただけだ。それを成せたのは彼女らの実力が充分以上に備わっていたという事。俺は彼女らに助けられただけだ。

「…さあーと。この紙は見せないでおこうかね。後々面倒くさそうだ。…鈴谷辺りとかな。」

俺は招待状であるその封筒、それと一緒に同封されていた相手先の鎮守府の住所を抜き取り、コンロにぶち込む。

「んー！はあつー…まずはメンバーへの相談と作戦について…だね。つても、目星は着いてるんだがね。」

灰となつて消えていく紙を見送つてから、一つ背伸びをする。こんな澀んな紙を見たあとだって何、俺の真上で今もサンサンとキラめく太陽は、すごく眩しく、暑苦しかつ

た。

鈴谷 「演習の誘い…また…ですか？」

「まあまあ！そんな卑屈になるなって！今回は正当な申し出さ！何も悪いことはおきねえーって！」ニコ

そんな『まーたバカが出ましたか…』みたいな表情しないでよ。最近鈴谷さん、なんか俺以外の人達に当たり強くない？カルシウムたりてますう？

加賀 「…まあ、その演習って事は分かったわ。…今からメンバーを集めればいいのかしよう？」

「あーちよいまち。…前回の編成…つまり、君たち二人は今回お留守番だね」ニコ  
『はあ?!?!どうしてよ?!?!』

俺がそうニコツと笑って言うのと、2人から思いつきり胸ぐらを掴まれた…

「ちよつ、ギブミーギブミー！俺の首折れちゃう！二人で頭ゆらさないでお願いだから!!頭取れる!!」

ブンブンと首元からなっちゃんいかん音鳴ってるて!俺のクビ吹っ飛ぶ!消えちゃう!!

鈴谷「どうしてよ!?!あたしはあんたの秘書なのよ!?!」

「だからこそだ」

加賀「理解不能。前回の私たちのコンビは最強だった。だったら次も!」

「同じ策が通用するなら、今頃人類は深海棲艦っていう化け物に侵略されちゃいねえよ」

加賀「つつ!…ですがっ」

「…確かにお前ら二人のコンビは強い。鈴谷の圧倒的なサポート能力。加賀の何処へでも瞬時に飛ばせる機動力、応用性、凡庸性。確かに二人がいれば、相手なんて怖くないのかもしれないな」

『でしたら!!』

「だがつつ!!…だが、それはお前ら二人の力なだけで、鎮守府全体の力じゃない。」

珍しく俺が声を荒らげたことにびっくりしたのか、強く強ばっていた肩の力が一瞬緩くなった。

「…無論、お前らも大事な鎮守府の仲間だ。…だけどな?なにか面倒事、争い事をする度に君ら2人の力を借りてちゃ、他の子達が報われない。それに、俺はまだまだこの子

達と仲良くない。…だから、君たち以外の子達にも、活躍の場を持たしてやりたいんだ。例えそれが望まれてなくても、俺はそうしたい。将来彼女たちが笑顔になるために、必要な事だから。」

鈴谷 「つつ…」

加賀 「……」

俺のその言葉に、出かけた言葉を飲み込み、握り拳を証明する。

分かつてる。この2人は俺の事をとでもよく思ってくれてる。こうして演習に率先して参加の意を証明してくれるってのは、それだけ俺の事を信用してくれているということだ。

だが、悪くいえば俺はこの2人や、天龍、夕立と言った限られた子達にしか信頼を置かれていないということだ。この鎮守府はまあまあ広い。それこそ、俺の会ってない艦なんて数えりやキリが無い。そんな大所帯に、1割もの信頼も得てない時点で、俺の底は知れる。

今までなら別にそれでも良かったかもしれない。だが、俺はここを明るくみんな笑顔で帰って来れる、みんなの自慢になるような鎮守府にしたい。俺がいない所で笑顔になっても、それは俺の目の前では表してくれない。それは俺がまだ、この子達に認められてない証拠なのだ。

天龍「…別に、むしろそれでいいんじゃないか?」

鈴谷「天龍…」

天龍「いやさ、この身体になってから、駆逐艦の奴らと話すようになってから、色々分かってきてさ。…みんなさ、提督と話がしたいと…でも、もう出来上がっちゃまって人間関係の輪に、果たして入れるのか…って、不安を抱いてる子がほとんどだった。」

加賀「…それはっ…」

天龍「…なんて言えばいいのかな…確かにあたしらの接し方は、それこそもう既に仲良くなった親友にも近い接し方だ。そりゃ、傍から見りゃ、話しかけていいのか不安になるのも頷ける。…それに、提督が思うって事は、そういうことなんじゃないの?…提督を見守る・助けるってのは、何も常に傍に居ろって訳じゃねえーんだぜ?…裏で助ける事だって、できるんだぜ?」

珍しく、こういう事にはあまり口を挟まない天龍が加賀と鈴谷にそう言う。…恐らく、彼女らしいブレイキ…なのだろう。隣に居る時雨と夕立も分かってるようで、無言で俺に目を合わせると、ニコツと笑ってくる。好きにすればいいと思うよ♪って言わんばかりに…

鈴谷「だけ…どっ…」

天龍「なあー鈴谷。そんなに提督の事…信じれないか?」

鈴谷「っ?! そんな! ただ私は!」

天龍「本当は自分でも気づいてるんだろ? 他の子が増えたら自分よりいい子なんて沢山いる。だから、秘書艦の座すら取られちゃうって。今はまだ、あたしら数名だから余裕もあるだろう。だが、10人:20人と、提督の事を分かってくれるヤツら増えれば、自然にライバルも増えてくる。そうだろ?」

鈴谷「つつっ:」

天龍「:信じろ」ニカ

鈴谷「なっ!」

天龍「あたしらは今までそうしてきただろ? 人間不信だったあたしらにわざわざ良くしてくれて、過去などしらん! という感じでズケズケとあたしらの内側に入ってきて、悩みも全てかっさらって行っちゃまった。それが今のウチらの提督だぜ?:信じるしかねえーさ! 後先考えても、悪いようにはならない!:だつて信じてるから。:鈴谷は、信じられないか? 提督の考えが」ニコ

そう鈴谷を説得してくれている天龍さん。その説得で既に加賀は白旗を上げているため、実質決定してよくなるものだった。

てか天龍さん、そんな俺の事過大評価されても困るんですけど。俺、好き勝手、しただけ。オーケー? てか、最初のコンタクトも木刀でタコ殴りってそれタ立やん。うわ、

めっちゃキラキラした眼差し向けてきてる! 夕立がすごいキラキラした眼差しでこっち見てる!!…目を背けておこう。

つと、俺が馬鹿な思考回路を回していたら既に話は終わっており、鈴谷が折れていた。鈴谷「そんな事…言われたら…折れるしかないじゃない。…提督を信頼出来なくなったら…それこそ私はもう元の私に戻れなくなっちゃう…提督すら信用出来なくなっちゃうたら…私…:ううん。ごめんささい…そうね。信じるわ。…提督の事。むしろずつと信頼してたもん!!してないみたいと言わないでくれる!!」

夕立「あゝいつもの調子に戻ってきたっほい♪」

時雨「…ふふ♪お茶入れるよ?」ニコ

鈴谷「…はあ…秘書なのに…見苦しい所を見せたわね…。提督」

「うえ?え?何?」

鈴谷「…信頼してるわよ。…これからも…ずつと。永遠に♪」

え、闇深。

「オーケー任せろ。」

鈴谷「…うんっ♪」ニツ

あ、可愛い。ちよつといま闇深い一面見れた気がするけど気の所為だよな。うん! 気のせいだ!



よし！何とか鬼門であつた鈴谷から許可は取れた！好き勝手やるぞー！

そうして俺は、1ヶ月後の演習の為に、まだ見ぬ艦娘達へとスカウトしに行くのでした！Pと言つてもええんやで？クイクイ

演習メンバー集めなきやならんなあ…アゝアゝアゝッ!  
(!?)

鈴谷達と別れ、俺はまだ見ぬ艦娘をへと会いに食堂に馳せ参じた訳…なのだが…

「…明らか避けられてますね…」おれわ…」

辺りを見渡しながら食堂を歩いているのだが、艦娘は居るのだが目と目があつても目を逸らされ、俺の歩く半径20cmぐらいの距離を保たれてる…

(あれ? おかしいな…俺何時ATフィールドなんて習得したつけ…あれ…目が霞んできたな…) ゴシゴシ

知っていたが、いざこうも全開に距離を空けられると泣ける。俺が来る前はワイワイ騒いでたじゃん…グスンッ

問宮「あつ♪提督さん!♪来てたん…です…か?」

「問宮さああん!」 ヒシッ

問宮「あら? あらあらあら!?! / / ど、どうしたのかしら!?! / / /」

たまたま横切った問宮さんに思わず抱きついてしまった…あらあらと慌てるも優しく俺の頭を撫でてどうしたのの聞いてくれる…お母さんや…これはお母さんですわ…

!

間宮「そうっ…演習メンバーを探していたんですか…」

「そうっ…そうなんだよお！だけど…見て見ればわかるけど…みんなが距離を…距離をおおおいおおい！」

ヘツタクソな泣き真似を挟みつつ食堂の窓際で間宮さんが俺の話を真剣に聞いてくれる…お母さんやっ…

間宮「いつものメンバー…って言いたいところだけど、ここに来る時点で何となく察しは着きます。…新しいメンバーで仲を深めたい…と。」

「お母さん…」

間宮「はっ…はいっ…？／＼お、おおかあっ…？／＼／＼／＼」

思わずお母さんで叫んでしまったよ…。言われた本人は頬に手を当てながら徐々に頬を紅く染めていつてるし…

しかし…俺の言葉足らずな発言でここまで理解して、意見すらも言つてのけるとか…本当に艦娘ですか？実は人妻さんなんじゃないっすか？

まあ流石に…これ以上間宮さんのことをお母さんでいじっていたら俺があらぬ疑い

と性癖を擦り付けられそうなので、そろそろ真面目に背筋を伸ばす。

「…概ね間宮さんの言う通りです。皆の鎮守府なので、俺は他の子達にも輝ける場所を作りたいたいです。…ですが今までそれこそ鈴谷や加賀、夕立、時雨と言った特定の人物としか接点を持っておらず…他の子との溝がこんなにも…あ、ヤバい。また泣きそう。」グスンッ

間宮「あ、あらあら…泣きそうと言うよりは泣いてるじゃないですか…。はいっ、ティツシユ」スツ

「ああ…すいません…」ズビィッ

ポケットティツシユを俺に手渡してくれる間宮さん…母性本能だけではなく女子力までも高いとか…はっ!?女子力||母性本能だった!?

『なに頭おかしい考えしとんねん』

(ですよねー♪)

最近、明らかにツツコミ役となってるガンダロロリくそジジイ(推定八千歳)、普段何してるのか全く皆目見当もつかないロリジジイ

『おい。明らかに変態のクソじじいやないかい!』

(実際そうだろ)

『…』

(・・・)

『へへへへへっw』

(やかましいわ)

『お主もノリノリだった癖に…』

前にやったな。このノリ

間宮 「うーん…具体的にはどう言った子達をスカウトしよう?」

「そうですね…今回の編成はそれこそ戦艦や重巡洋艦といった方々ではなく、駆逐艦や軽巡洋艦の子達を活躍させたいんですよねえ。」

間宮 「なるほどねえ…うーんっ…あっ♪それでしたら私!居ますよ♪」

「え?マジで!?紹介してくれる?!

間宮 「いいですよ♪場所はー」

『まるでお見合い話みたいな会話じゃったな』

(うっせ…／＼)

言われた場所に続く廊下をテクテクと歩いていると、先程の会話の事を言ってくるじじい。

確かに話のしかた的にモロお見合い結婚のソレだった。心做しか更に溝が空いた気がするぜ…トホホ

『まあー良いでは無いか。お主も20代の後半にさしかかろうとしているのだ。そういった話をしてくれなければ困るぞ』

（貴様は孫の顔が見たいジジイかっての。その論点だと俺が孫だから俺で我慢しなさい）

『こんな汚い…ましてや男とか嫌じゃー』

（おいゴラ。誰が汚え成人男性だはっ倒すぞ）

そんな会話（？）をしながら廊下を歩いてた。あれ？こつちで合ってるのか？

『ちなみにもう過ぎてるぞ』

（先に言えやエロ親父）

『理不尽!?!』

俺は10歩程ムーンウォークしながら後ろに下がる。

「ふむ。ここか。」スッ

『戻り方どうにかならんのか。』

「止まった時にポウ！ってノリノリで言った奴はどこのだいっだよ。」

『……………』

「シカトかよっ」

コンコンつとノック。

？ 「…」 ガチャツ

「お！ いたいたつ。こんにちわ。俺はここに来た提」 ガチャンツ

「…あれ？」

『嫌われてるのう』

うさ耳みたなカチューシャをつけてる女の子が出てきたと思ったら自己紹介中にパタンつと閉じられたんですけど。え？ 俺そんなにブサイクだった？ ふっは！（涙目）

「……………えーと…」

？ 「貴方に貸せるほど私には力はありません。他を当たって下さい。」

扉の向こう側でそんな事を言われてしまう。このパターンは…前任か。たく…つくづく面倒事だけ置いて行きやがって…

「話でも聞いてくれないかなあ…なんてっ…ほ、ほら、お互いを知らなきや何も」

？ 「どうせ知ったって、直ぐに裏切られるのなんて分かってるから。…前の人もそうだった。私はただ速いだけって言われた。それ以外は何も出来ないゴミクズだって言

われた。…貴方も、それを言いに来たんでしょ？」

え？なに？前任そんな事言いやがったの？はいくつころ。これはくつころ案件ですよ。スパナとペンチ持ってこい。歯と爪をありつたけかき集めたものを煎じて飲ましてやる。

『やめとけやめとけっ』

？「それに…私はもう海には出れない。もう私は…走れないんだから」

「……」

出てき方で薄々わかっていた。明けるまで這いずるような音。うさ耳が俺の足元に生えていたこと。

両足切断…恐らく、彼女にとって最も残酷な事を前任はしたんだろう。

サツカーを好きなやつ足を壊す…いじめにもよくある事だ。

？「…分かったでしょ？だったら」

「お邪魔しマース」ガチャッ

？「ちよっ!?!あうっ!」コテンッ

そもそも、ドアの前で抑えるように座つても悲しいことにここにある全てのドア、両開き式なのよね。押しダメなら引いてみるってな。

「…やはりな。」



目に広がるのは、もう何年も放置されてるであろう太ももの下からが何も無く、包帯でぐるぐる巻き。ここに来た時のこの子達を治す場所は使い物にはならなかった事を鑑みて：既に手遅れということなのだろう。太ももの色が紫色に変色してる：壊死してるのだろう。

? 「つつつ……最悪：でしょ? こんな私に誰がつ」

「ふむ。年数単位の放置による神経の死亡。まあー要は壊死だね」ピト

? 「つつつ……」ビクツ

彼女の太ももに手を添える。生きてるのに冷えきった感覚は、下半身の機能停止を意味する。…艦娘らしい死に方だ。彼女らは妖精さんの言うように、コアが存在する。

そのコアを破壊されない限り、肉体の一部が停止したとしても、生き続けられる。つくづく…前任は狡猾で、悪人で…最悪な人間だよつ

「……何をされた…のかは、この際は聞かないことにする。いや、聞かなくても分かる事だからね。…君の口ぶりからも、なんとなくだか想像できるよ。」

「…走ることに、速さには取り柄のないなら、それすらも奪って完全に殺そうとしたのだろう。前任は。」スーッ

? 「つつつ……」

太ももを労わるように撫で続ける。俺は少女を少し抱き寄せる。

「少し失礼するね」ニコ

? 「あっ…んっ…」ビクッ

よっこらせつとと彼女を持ち上げる。いつまでも廊下に寝転がしつてのも胸糞悪い。彼女の部屋の玄関の近くの壁によっかからせ、俺自身も腰を下ろす。

目線が彼女より少し上に来るため、必然的に少し上を向いてくる。

全く…間宮さんはこれを知つてて…悪女なのか、それとも仲間思いなのか…いや、後者だろうな。それだけ俺を信頼してる…つて解釈でいいのか…分らんな。

? 「…情け…ないよね。力も何もなくて、速さと逃げる事しか取り柄がないのに、刃向かつてさ…結局手に入れたものは何も無くて…失つたものは大きくて…私…」

「そんなことは無い。…刃向かうのも大事な事だ。言いたい事を言えないなんてそんな事…この場所には相応しくない。」

ぐるぐる巻きの包帯を解く。固くキツく縛られていたおかげで今の今まで止血できていた。いやむしろ、死んでないことが不思議な事だ。

だが、その包帯を解くことで、チヨロチヨロと、血が流れ出す。

? 「なっ…なにをつっ…」

壊死してるとはいえ、こうして血が溢れ出るのだ。…まだ…治せる。

「妖精さん…俺に力を貸してくれっ」ピト

? 「んっ…／＼」ビクッ

両太もにも手を合わせる。スベスベしてるとはいえ、体温は感じ取れない…俺は、要らないからと言って、ここまでする前任のことが許せないっ

彼女の取り柄であるものすら奪い取りやがってっ

{……}ピト

? 「んなっっ…?!」

俺の思いが届いたのか、一人、また一人と、暇を持て余していた妖精さん達が俺の背中へと手を合わせてくる。その数ざっと15人ぐらい。

「俺はさ、それこそ提督としては未熟だよ。」

? 「なっ…?…?…?っ!」

「艦娘のことだつて分からないし、何を考えてるなんて分かりやしない。皆にも認められてなくてさ、ほんつと、ダメダメな司令官であり、提督だよ。」ポワアア

俺の両手が淡い黄緑色に光り出す。だが自然と、驚くという感情が合われなかった。今はそんな事よりも…目の前の子に…

「でもさ、そんな俺でもさ、慕ってくれる子が居るんだ。好きだと、大好きだと、言ってくれる子が居るんだ。尊敬していると笑顔で言ってくれる子が居るんだ。」ジワアアア

? 「っ…ああっ…」

だんだん熱を帯びてくる。背中に手を置いてくれていた妖精さん数人が、肩に座ってくる。

「俺は、それをもつと多くの子達に言われたい。心の底から俺に信頼を置いて欲しい。遅くてもいい。不満も何もかも、ぶちまけてもいい。俺は一人でも多く…艦娘達を救いたい。」ポワアアアア

? 「あつ…あうつ…／＼」

次第に、その光が彼女の太もも全体に照らされていく。その色が、ドンドン濃くなつていく。

? 「なんでっ…だって私達は道具でっ! 提督の!」

「違うさ。道具だったら、俺はここまで本気になれちや居ない」ギユツ

? 「んっ…!／＼」ピクンツツ

「艦娘だからこそ、人でも道具でもない、艦娘だからこそ、俺は俺でいられる。助けたいと思える。力になりたいと、思える。…おこがましいと思うけどね。…でも、何より俺は…」ポワアアアンツ

? 「っ!?!」

「君みたいなのが、何も出来ずに蹲ってるだけなんて…そんな理不尽…心底我慢出来な

いんだよっ！」

次の瞬間、色濃く光り出すと、紫色に変色していた両足が手と同じ色に変わり出すと、黄緑色の粒子を纏いながらまるで逆再生してするように……両足が元に戻る。

？「!!? う……う……くっ……!? た、立てっるっ!?」

まるで初めて立てた子鹿のように両足を震わしながらも、しつかりと立ち上がる少女。

「……俺は提督だ。」

？「っ……? っ!? ちょ！ ちょつと!」 ガシッ

フワリと力が抜ける感覚が全身を包み込む。そのせいで頭を後ろに倒れかける。その瞬間、彼女に抱き寄せられてしまう。

「提督だからっ……ここに鎮守府にいる子達には……笑顔になつて欲しい……なあっ……立て嬉しかった……か？」 ニコ

？「つつ!! も、もちろんっだよっ! もうダメって思つてて! それで!!」

「あつははっ……それなら……よかつたああ……わけも分からない現象で、わけも分からないこと口走つちまつてたけど……島風の足……直せてよかつたあ」ニコ

島風「っ!? や！ 嫌だよ！ 提督！ そんな！ 私！ まだ提督に!」

「……………」

島風「提…督…?…ねえっ…提督っ…返事してよっ…!嫌っ…嫌だよっ!ねえ!提督っ!私まだ!ありがとうも!!自己紹介も!協力するも!何も!…なにもっ…!」  
ギユツ

「…:…スーツ…:…ハーツ…:」

島風「…:…んっ…?」チラ

「ふがっ…:…んんっ…:…ばかやろー…:そんな食えるわけ…:」ムニヤムニヤツ

〇 ツンツン

島風「…:…:…:」チラ

『妖精疲れて眠さってるだけだよー』

島風「スツ

「んー…:…りようかー…:…んふふ♪」スヤスヤ

島風「つつっ!／／／／もおおおつつ!!／／／／」カアアアアア

その声は、鎮守府内に響き渡り、心配になった者が見に行くと、足が復活した島風を見かけ、食堂へ連れていかれると皆泣いて喜んでいたが、本人である島風1人が納得行かない様子だったという…

## 大魔法は一日1回しか打てないのだよ（回数制限）

「んん〜…困りますお客様ア〜…んっ？なんだ。もう朝か」

時雨「どんな寝言だいそれは…」

ムクリと体を起こしてそう口に出す。どうやら俺は疲れて眠ってしまったようだ。

まあーそりゃ？手から緑色の粒子がドバドバでてたらそりゃ疲れますよね。MP切れかな？

時雨「それより提督聞いたよ。島風ちゃんの足を治したんだって？」

「えっ？あ、ああ…んまあーそんな事もしたかな。」

どうやら、島風の足が治ったその日…というか昨日の夜、あまりの出来事で食堂では宴会みたいな騒ぎになっていたらしい。

時雨「まあーでも…当の本人が納得いつてなかったけど…主役が居ないとか不満って顔してた。」

「そりゃー、こちとら大魔法を放ったからな。紅魔族は魔法を放ったらその日一日は稼働できなくなるもんなんだぜ！」キラーンッ

そんな事を言っつて、左目に眼帯をつけて、赤い玉がはめられた杖を何処からか取り出

す。…ふっ…決まった…!

時雨「…どこから出したんだい…そんな大きなもの…」

「まあそんなことはどうでもいいのだよ。それで？島風に何か影響は？」ポイツ

時雨「えっ？…あ、ああ…特に異常という程の出来事は無かったよ。むしろ、元気に  
なりすぎて困ってるぐらいだよ…」

「なっはっは！元気ならいいじゃねえーか！誰しも！元気が1番さー！」ニカ

ニカツと笑って医務室のベットから腰を浮かす。ふむ。特に俺の方も体に異常は無  
いようだ。良かったぜ。これでうっかり爆裂魔法しか撃てなくなる呪いとかつかなく  
て。

いやでもまあえよ…？爆裂魔法を扱えたらそれはそれで俺TUEEを見せてつけれ  
るのでは…？

時雨「…なーに馬鹿なこと考えてるんですか…大体、元気づて…医務室から起き上  
がった提督が言いますか？」

「さあーてと！今日も一日頑張るぞい！」

時雨「あつ…無視しないで欲しいのだけっ…あうっ…提督…？」

「…細かい事気にしないっ♪」ナデナデ

ワシヤツとクシヤクシヤにする感じで時雨の頭を撫で回す



時雨「あつ……も、もうつ……髪の毛は大事に……はううつ……／＼んもうつ……提督は相変わらずなんだねっ……」

「おうっ！」ニカ

時雨「……はあ……全く……。……しようがないですねっ……提督は……♪」  
そうして、俺と時雨は、医務室を後にする。

時は過ぎて、同日の昼の2時ぐらい。馬鹿みたいに広いグラウンドにて……

島風「遅い遅い〜♪」

？「ちよっ！まつっ……は！早すぎるって！」

島風「早くしないと追いつけないよオ！」

？「っ?! って島風あんた！前！前見て!!」

島風「へ？前…?」

「んあっ…?」

島風「ふわっ?! /」

「んなっ?!」

俺氏、グラウンドに來た途端、例のうさ耳駆逐艦にごつつんこされる。せめて街角というベタなシチュエーションが良かった…グスンツツ

「おー…いてて…元気で結構…うぐつつ…臓器が…」

おもつくそ溝内に島風の顔面がぶつかってきたため、その場でリバースするかと思っ  
た…どうやら、俺の体はオートしてないようだ。よくやったぞ。俺の臓器

パツパと尻についた砂を払い落として手を差し伸べる。

島風「っ?!」

「…? 何してんだ？ほれ、立てるか？」

手を差し伸べたことがそんなに驚く事かね。

島風「あ、ありがとう…」スツ

「ん？おうっ。怪我がなくて大変何よりだ♪…そっちの子は確か…天津風だったか？」

天津風「つつ！」ビクリツツ

…なぜそんなに警戒されてるのだ。挨拶しただけだと言うのに…

「さてと、島風が元気なものもこの目で確認できたし、俺は作業に戻るとするかね。かけっこもいいが、程々になあ」フラフラ

手をヒラヒラとさせながら、その場から立ち去ろうとする。

島風「あつ！あのつつ！提督さんっ！」

「ん…？どうかしたか？」

大声で呼び止めてくる島風。その顔は少し強ばっており、プルプルと震わしていた。…ふむっ。

俺は膝を地に着けて、島風より少し下に頭を移動させる。そうして覗き込むように、島風の目を見つめる。

島風「っ!？」

その行為に驚いたのか、一瞬目がギョツとしてしまっている。

そりやそうか。今での彼女達は、常に見下されてきていたのだから。こうして誰かを見下すような構図には、彼女らと俺の身長差では無理だ。物理的に。

「…どうかしたか？」ニニ

緊張を和らげるために、できるだけ優しい声を投げかけてそう確認をとる。ピクッと反応すると、震えていた手がだんだん治まっていく。…すると、その両手を胸元に持つ

ていき、祈るようにすると、晴れやかな顔で

島風「…提督さんっ…この恩は一生…ううんっ…生涯忘れない…。…提督さんに助けてもらったこの命…提督さんの為に使わせてくださいっ…」

「……………ふっ。お断りだ」

島風「えっ……………」

なんだよそのヤンデレ契約みたいな重い契約。確かにこの鎮守府を皆の笑う場所に  
変えたいと言ったが、それはあくまで皆にリラックスしてもらいたいってだけで、俺の  
為に働けと言う縛りじゃねえぞ…

「俺はただ、島風の足を治してあげたに過ぎない。それは俺の力でもなんでもない。他  
ならない力を貸したくれた妖精さんの力だよ。俺に感謝されても困る」ニコ

島風「あっ…えっ…でもっ」

「それにっ…俺の為に命を使うなんて、そんな勿体ないことはやめろ。…島風の命は、  
島風自身の物だよ。他人にそれを渡しちゃダメだ。自分で思い考え行動する…そうい  
うもんじゃねえーか？命の使い方なんて…♪」ニコ

島風「つつっ！」

「そういうこつた！他人に明け渡すほどやっすいもんじゃねえーだろ？…好きな様に生  
きるといいさ。なっ♪」ポンポンッ

ポンポンつと頭をバウンドさせてから、ゆつくりと撫で下ろして、その場を立ち去る。  
…その際に

島風「…♪私！自分らしくなる！提督さんに褒められるぐらい！立派な艦娘になるよ！！」

俺はそれに何を言うわけでもなく、ヒラヒラと手を振り、ニカツと笑ってその場を去る。…うーんこれ。対応合ってるのかなあ…ワラカン

島風「……っ♪」キュツ

提督さんの背中を見届けながら、胸の高鳴りを沈めるようにそつと撫で下ろす。

ずつと待っていた。私を私と見てくれる人が。

ずつと探していた。私を必要としてくれる人が。

提督さんは私の事…特別必要としてる訳じゃないけど…それでも、私に暖かい言葉を何度もかけてくれた。

たったの2回…そんな少ない回数しか会わなくても分かる、提督さんの人柄の良さ

…。そして、私をあこの部屋から自由の身にしてくれた本当の恩人…。もう一生走る事なんて出来ないと思っていたこの足…

それが今、地面に足をつけて、自分の力でこの広い場所を走れてる。駆け巡れてる。叶わないと思っていた夢が…。叶ってる。

全部…。そう全部、全部が提督さんのお陰…。だから…。私は…。私がすべき事は…

『提督さんが困ってる時…。手をさしのべれるほど…。もしくはずーつとさしのべれるほど…。私が提督さんを守るほどの強さを…。♪』

島風「…。あつ…。演習の返事…。言い忘れてた…。元々それのために呼び止めたのに…。あはは…。から回っちゃった♪でも…。いっか♪…。提督さんにあんなこと言われたなら…。♪」

この場所は嫌いだった。嫌いな人が、大切な仲間を傷つけるから。…。でも、今は違う。

島風「提督さんの夢…。私も叶える努力…。したいな♪」ニコ

…。とりあえず…。早く提督さんに演習出させてくださいっていつてこなきや…。他の子に取られるとか不完全燃焼すぎる…。！